



2023年度JICA横浜 教師海外研修

ワークショップ集 & 報告書



研修国：ブラジル連邦共和国

独立行政法人国際協力機構
横浜センター(JICA横浜)

目 次

教師海外研修について

教師海外研修とは	04
研修日程	05
海外研修国の概要	06
海外研修参加者	07
海外研修日程	08
参加者の訪問先所感	09

ワークショップ

みんなで作ろうしあわせの村	20
多文化共生を考えよう ～移住すごろくゲーム in Brazil～	31

実践報告

小学校 (7名)	天田梨那	「Who is your hero?」	42
	(川崎市立土橋小学校)		
	奥村美奈子	「もっと知ろう!ブラジルのこと!」	50
	(横浜市立馬場小学校)		
	武井昴太	「遠くて近い国」	58
	(川崎市立梶ヶ谷小学校)		
	本祥馬	「多文化共生」	65
(忍野村立忍野小学校)			
森田靖子	「みんなで作ろう幸せの村」	72	
(横浜市立神橋小学校)			
吉川亮介	「互いの違いを知り、相手への理解を深めよう」	80	
(座間市立相模が丘小学校)			
米澤瑞綺	「外国にくらす人々の思いを知ろう」	86	
(逗子市立沼間小学校)			
中学校 (1名)	長島 瞳	「多文化共生・異文化理解」	91
(藤沢市立高倉中学校)			
高校 (2名)	川崎義碩	「多文化が共生するために何をすべきか?～What would you do?～」	98
	(山梨県立甲府第一高等学校)		
寺鍛治尚紀	「相互理解、寛容、共生、資源配分」	110	
(神奈川県立二宮高等学校)			

※この報告書に掲載されている意見は、本研修参加者によるものであり、JICAを代表するものではありません。
※参加者の所属等は、2023年度のものであります。

教師海外研修とは

1. 教師海外研修の目的

本研修は、国際理解教育や開発教育に熱心に取り組んでいる神奈川県・山梨県の教員や教育委員会指導主事等の皆さんを対象に、実際に開発途上国を訪問することで、開発途上国が置かれている現状や国際協力の現場、開発途上国と日本との関係に対する理解を深め、その成果を、学校現場等での授業実践等を通じて、次代を担う児童・生徒の教育に役立ててもらうことを目的としています。研修参加後は、JICA 国内機関と協力し、教育現場で開発教育を推進する中核となるような人材となってもらうことを期待しています。

2. 研修概要

本研修は、開発途上国の社会・教育事情や開発途上国で行われている様々な国際協力活動の現場視察（海外研修）と、海外研修の前後に行う国内研修（事前／事後）の2つのプログラムから成っています。国内研修（事前）では、海外研修への準備としてワークショップ体験、素材収集の方法・教材研究等を学びます。国内研修（事後）では、他の研修参加者と協働して開発教育の教材づくりに挑戦します。その成果（教材）を駆使しての実践授業を通じて、同じ関心をもつ多くの教員の方々と貴重な経験と成果を共有することを目指します。

3. 2023年度のテーマ「多文化共生と移民」

今回の研修先であるブラジルは多文化社会と呼ばれ、様々なルーツを持った人々が暮らしています。日本からブラジルへの集団海外移住は1908年に始まり、これまで約25万人もの日本人が移住し、現在ブラジルに日系人が200万人ほどいると言われています。

今年の海外研修では、異文化との出会い、葛藤、困難、協力、希望を経験してきたブラジル社会や日系人と触れ合うことで、多様性が尊重される社会・多文化が共生する文化への理解を深めて、そのような社会・文化づくりへのご自身および次代を担う子どもたちの参加促進の手だてについても考えていただきます。

参加者でチームを作りブラジルでの経験をいかしたワークショップをつくっていただきます。そのため事前事後研修では、ブラジルや日系移民、国際理解教育や開発教育で使われる参加型学習について、学んでいきます。

4. 応募資格

神奈川県と山梨県の学校現場で国際理解教育・開発教育に取り組んでいる、または関心を持ち、国内・海外の研修および報告会の全日程に参加可能な教員等で、所属長の推薦が得られる方。

研修日程

研修名	場所	日程	内容
国内事前研修①	JICA 横浜	2023年6月24日(土)	<ul style="list-style-type: none"> ・本研修概要 ・派遣国 ・視察先の説明 ・海外研修準備 (渡航手続き、健康/安全管理、素材収集の方法)
開発教育教員セミナー (基礎編)	JICA 横浜	2023年7月8日(土)	<ul style="list-style-type: none"> ・開発教育のワークショップの体験 ・教材研究の方法
国内事前研修②	JICA 横浜	2023年7月15日(土) 16日(日)	<ul style="list-style-type: none"> ・開発教育のワークショップの体験 ・教材研究の方法 ・前回参加教員との交流
海外研修	ブラジル	2023年7月30日(日) ～8月12日(土)	<ul style="list-style-type: none"> ・開発途上国の現場体験 ・教材研究のための素材収集
国内事後研修①	JICA 横浜	2023年8月26日(土)	<ul style="list-style-type: none"> ・研修先で得た素材の整理 ・教材 ・授業案 ・ワークショップの作成
国内事後研修②	JICA 横浜	2023年9月16日(土)	<ul style="list-style-type: none"> ・各所属先における授業実践等
実践授業	所属先	2023年9月 ～2023年12月	<ul style="list-style-type: none"> ・各所属先における授業実践等
開発教育教員セミナー (応用編)	パシフィコ横浜	2024年1月13日(土) 14日(日)	<ul style="list-style-type: none"> ※実践授業報告も行います。 ・開発教育のワークショップの体験 ・参考事例発表 ・教材研究の方法
最終報告会	山梨県地場産業 センター かいてらす	2024年2月～3月 ※神奈川県、山梨県で 各1回実施予定	<ul style="list-style-type: none"> ・実践授業の報告発表会

海外研修国の概要



ブラジル連邦共和国 (Federative Republic of Brazil)

- 首都**：ブラジリア
- 面積**：851.2万平方キロメートル(日本の22.5倍)
- 人口**：約2億784万人(世銀、2015年)
- 民族**：欧州系(約48%)、アフリカ系(約8%)、アジア系(約1.1%)、混血(約43%)
- 言語**：ポルトガル語
- 宗教**：カトリック約65%、プロテスタント約22%、無宗教8%(ブラジル地理統計院、2010年)
- 政体**：連邦共和制(大統領制)
- 主要産業**：製造業、鉱業(鉄鉱石他)、農牧業(砂糖、オレンジ、コーヒー、大豆他)
- GNI(名目)**：1兆9,200億米ドル(2022年、世銀)
- 一人当たりのGNI**：8,917米ドル(2022年、世銀)
- 経済成長率**：3.0%(2013年)、0.5%(2014年)、-3.5%(2015年)、-3.3%(2016年)、1.3%(2017年)、1.8%(2018年)、1.2%(2019年)、-3.9%(2020年)、4.6%(2021年)、2.9%(2022年)
(実質GDP、ブラジル地理統計院)
- 通貨**：リアル
- 日本の援助実績**：(1)有償資金協力(2020年度まで、E/Nベース)3,312.92億円
(2)無償資金協力(2020年度まで、E/Nベース)55.49億円
(3)技術協力(2020年度まで、実績ベース)1,209.82億円
- 主要援助国(2016年：支出総額, 単位：百万ドル, OECD/DAC)**
：(1)ドイツ(233.79)
(2)フランス(141.06)
(3)日本(61.78)
(4)英国(44.33)
(5)米国(39.08)
- 在留邦人数**：47,472名(2022年10月現在)(外務省在留邦人数調査統計)
(日系人総数推定 約200万人)
- 在日ブラジル人数**：207,456人(2022年6月法務省在留外国人統計)

(外務省ホームページより)

海外研修参加者

	氏名	学校名	学年 / 担当教科
1	天田 梨那	川崎市立土橋小学校	外国語専科 3 - 6年
2	奥村 美奈子	横浜市立馬場小学校	2学年
3	武井 昂太	川崎市立梶ヶ谷小学校	全科 特別支援級
4	本 祥馬	忍野村立忍野小学校	5学年
5	森田 靖子	横浜市立神橋小学校	6学年
6	吉川 亮介	座間市立相模が丘小学校	4学年
7	米澤 瑞綺	逗子市立沼間小学校	2学年
8	長島 瞳	藤沢市立高倉中学校	社会科 2学年
9	川崎 義碩	山梨県立甲府第一高等学校	英語 2学年
10	寺鍛冶 尚紀	神奈川県立二宮高等学校	英語 1学年
11	長縄 真吾	JICA 横浜	
12	中野 貴之	JICA 横浜	
13	福田 訓久	株式会社メディア総合研究所	

(五十音順 / 所属等は2023年3月現在)



ブラジル現地で毎日のように行ったふりかえり会にて、ファシリテーターからのお題についてペアで語り合っている様子。
左から：森田、吉川、武井、奥村、川崎、長島、寺鍛冶、天田、米澤、本

海外研修日程

参加者の訪問先所感

研修名	場所	訪問先
7月30日	午後	羽田空港発
7月31日	午前	移動
	午後	移動
8月1日	午前	サンパウロ空港到着 【技術協力】地域警察活動(ロータリー交番)
	午後	日本移民資料館見学 ふりかえり会
8月2日	午前	【ボランティア活動視察】ブラジリア学園
	午後	サンパウロ州立移住博物館 ふりかえり会
8月3日	午前	【草の根技協】カサパーバ公立小学校3年生の環境野外授業視察
	午後	【草の根技協】LFC - Casa de Cirilo - Caçapava ふりかえり会
8月4日	午前	【現地学校視察】アルモニア学園
	午後	【現地学校視察】サウージ学園 ふりかえり会
8月5日	午前	サンパウロ空港発～マナウスへ
	午後	【技術協力】INPA(国立アマゾン研究所)フィールドミュージアム事業視察 盆踊りイベント参加(エフィジェニオサーレス自治会)
8月6日	午前	マナウス市営市場散策
	午後	アマゾン川視察 ふりかえり会
8月7日	午前	【ボランティア活動視察】ジョゼフィーナデメロ校
	午後	総領事館表敬 マナウス発～サンパウロへ
8月8日	午前	サンパウロ市営市場視察
	午後	【現地学校視察】サンミゲルアルカンジョ市コロニアピニャールの日本語学校 【現地学校視察】公立学校視察 ピニャール地域のみなさまとの交流、ホームステイ
8月9日	午前	移住地内の農園を視察
	午後	【草の根技協】PIPA 帰国研修員との交流
8月10日	午前	ブラジル事務所にて研修報告会 【ボランティア交流】サンパウロ市内活動ボランティアの活動説明と意見交換会 事務所周辺視察
	午後	サンパウロ空港発
8月12日	午後	羽田空港到着

1日目：7月30日 日

● 日本からブラジルまでの移動中および現地到着

全員で研修に向けての意気込みを共有し羽田を出発。しかし、羽田からの便が遅れ、アトランタ空港の手続き場所が大混雑していたことにより、乗り継ぎ便に間に合わないという事態発生。まさかのアトランタホテル泊、次の日の便に二手に分かれて搭乗することになる。でもピンチはチャンス！貴重な体験をすることができたと思うことにする。アメリカの空港にいても、日本と違う文化を感じることができ、わくわくする。ブラジル、待っていてください。(天田)



自動販売機一つとっても日本と違う。すべてが新鮮。

2日目：7月31日 月

● アトランタで1泊してサンパウロを目指す

昨日の不安はどこへやら、ある意味10時間以上のフライトの後に1泊できたことはリフレッシュになった。アトランタから直行する組と、マイアミ経由組に分かれ、サンパウロを目指すことになった。サンパウロで会おう！と別れるも、離れ離れになることに少し寂しさを感じた。仲間意識が芽生えている証拠かなと思ううれしかった。明日からの研修が楽しくなりそうだと実感した瞬間だった。(奥村)



マリオットホテルの朝食に大満足の笑顔。

3日目：8月1日 火

● 地域警察活動プロジェクト視察

日本式の交番制度を普及させる技術プロジェクトが行われ、現在ではサンパウロから各州へと広まりを見せているとのことでした。犯罪に対応をするのではなく、防止をする。そのためには市民との信頼関係の構築が肝要であるという考えのもと、ラジオ体操や青少年向けのサッカー教室を行うなど市民と顔を合わせる機会を大切にしているようでした。

私たち教員はときに子どもたちの不適応行動への対応に迫られます。しかし一番大切なことはそれらに対処するのではなく、起こらないようにすること。そして、そのためにはテクニックももちろんですが、なにより大切なのは教師と子どもたちとの間にあたたかな人間関係が築かれていることなのだろうと思います。そういった意味で、対象は違いますが、同じ「人」を相手にする職業である警察官の方のお話は、違った角度から自分の取り組みを見直すとともに人と関わる上での本質的な示唆を与えていただく貴重な時間となりました。(武井)



長旅にも負けず交番の前で笑顔の記念撮影。

● ブラジル日本移民資料館見学

移民としてブラジルの発展に貢献された武田さんのお話をお聞きすることができました。JICA横浜の移民資料館からだけでは決して知ることのできない過酷な様子を、館内の資料やお話からうかがうことができました。毎朝4時に起床し、原生林を切り開くという過酷な肉体労働。にもかかわらず、農具の支払いで負債がかさみ、1年目は赤字状態。突貫工事でつくる小屋は間から雨が入り込む。マラリアによって子どもたちは命を落とし、持ってきた行李を棺桶がわりにして埋葬する。想像を絶する苦悩の日々を、夢や希望、意地、覚悟などを活力に乗り越えていくその生き様に心から感動しました。そしてこの感動を覚える、強く、たくましい姿はぜひ歴史教育とともに道徳教育の材としても扱いたいと思いました。(武井)



館内ガイド武田氏の話が胸にしみました。

4日目：8月2日 水

● ブラジリア学園視察

学校の施設見学や、日系社会海外青年協力隊員春田氏の授業を視察した。施設見学では教室、プレイルーム、音楽室、食堂、工作室など多くの教室を見ることができた。私立の学校で、幼稚園の子どもから受け入れている。子ども達が遊ぶ場所も多くあり驚いた。常に子ども達のためになることを考えて指導をしているという言葉が心に残った。また、春日隊員の授業では、折り紙を用いて、紙飛行機を作る授業を参観した。日本では、なじみのある折り紙だが、ブラジルでは、ゼロからの指導のため、大きな折り紙を用意して伝えたり、動画を見せながら指導をしながら、子ども達も楽しそうに参加していた。(本)



ブラジリア学園長との対談では移住当時の話も聞けた。

● サンパウロ州立移住博物館視察

日本以外の国々からも、ブラジルに移住してきていたのだと知った。また、その博物館自体が昔の移住者の住む場所だったことに驚いた。移住者は、その中から外出ができないことに大変な生活だったのだろうと思った。ブラジルにいる外国籍の人数よりも、ブラジルの外に出稼ぎに行っている人数が多いことに驚いた。(本)



世界中からの移住者について通訳付きでしっかり学んだ。

5日目：8月3日 木

● カサパーバ公立小学校

私たち一人ひとりの勤務学校を検索しネームプレートとして準備して下さったり、朝ごはんや手作りのプレゼントで心のこもったおもてなしをして下さったり、たくさんの準備をして私たちを迎えて下さったことに感激した。日本型環境教育をブラジル型に変えながらカリキュラムを考えて、長く環境教育を行っていることに、先生の努力があると感じた。学校で行っている教育が地域・家庭にも広がり、ブラジルの環境につながると教育の大切さに繋がると感じた。「教育で交流し合うことで、その国のよさに気が付くことができる…」文化だけでなく教育の交流も多文化共生のきっかけになると感じた瞬間であった。
(森田)



全校生徒が集まって私たちの演奏と踊りを見てくださいました!!
あまりの大きな歓声に私たちのテンションもあがりました。

● LFC- Casa de Cirilo - Caçapava

先生たちはみんな明るく、子どもたちをあたたく見守っている姿が印象的な施設であった。社会福祉と学校が密接につながることで、地域にいる人たち一人ひとりを大切にしていることに気が付いた。困っていることやできないことを地域で支えるシステムは日本にもっと取り入れたいシステムであると感じた。日本から準備してきた、日本文化を伝える交流会では、言葉の交流は少なかったものの、文化を通して日本の伝統文化を楽しんで伝えられたような気がした。(森田)



日本の文化体験コーナーをつくり、子どもたち、先生たちに楽しんでもらいました。みんなの笑顔に私たちも元気をもらいました。日本文化の素晴らしさを改めて実感しました。

6日目：8月4日 金

● アルモニア学園

日系の方が始められた私立の学校を訪問した。現校長先生はアルモニア学園の卒業生で、日系の方々が高齢者になったものを次世代の日系の方が未来につなげている…そんな印象をうけた。バスを降り立つと日本庭園のような外観の入り口で、校内の随所には、日本文化を感じられる掲示物…ブラジルに来たのに、どこか懐かしく思える学校だった。設備がとても行き届き、児童・生徒たちも希望に満ち溢れている。日系人の成功と、この学校に通う次世代のブラジリアンがどのような社会を作っていくのか楽しみになった訪問だった。
(吉川)



日本に修学旅行に行ったという高校生たちとの交流。

● サウージ学園

「温かい…」校舎内、校長先生に会った瞬間に、強烈な印象を受けた。「あなたのヒーローは誰？」のインタビューでも、多くの子が「お父さん、お母さん」と答えるのを垣間見て、サウージ学園では日本の言語・文化だけでなく、家族や人を思う優しい心が育っているのだと感じた。校長先生は、ブラジルで差別にあい、自身が辛い経験をされながらも、子どもたちには深い愛情で接し、笑顔からは優しさがにじみ出る方だった。「子どもたちが幸せになって、難しいブラジル社会をちょっとでも変えていってほしい」の言葉に、今までの人生と教育観が集約されている気がする。住んでる国・人種は違えど、子どもの心は一緒に、未来につなげていく。日系社会の今…だけでなく、教育者としてどうなりたいかを考えさせられた訪問だった。(吉川)



「あなたのヒーローは誰？」と教室でインタビュー。

7日目：8月5日 土

● INPA (国立アマゾン研究所)

マナウス空港到着後に熱帯の蒸し暑さを感じながら、INPAへ。たくましさを感じるシロアリの巣、人間のせいで数が減ってしまったマナティー、植民にゆかりのあるゴムの樹…情報量が多かったです。馴染みのある動物園や植物園と違って、自然の力強さや人間と自然の関係をダイレクトに感じられる施設でした。人間と自然の共生についても考えさせられました。(米澤)



研究員の話聞きながら森林を散策

● エフィジェニオサレス自治会 (盆踊り参加)

人生の中で1番盛大な盆踊り。踊りだけでなく、太鼓のパフォーマンスや花火までありました。日系の人だけでなく、非日系の方にも開かれているオープンな雰囲気が素敵でした。屋台には日本料理のおにぎりや焼き鳥だけでなく、ブラジル料理のpasteuなども並んでいて、文化の融合を感じました。(米澤)



日本が大好きで訪日経験もある方と出会い談笑中

8日目：8月6日 日

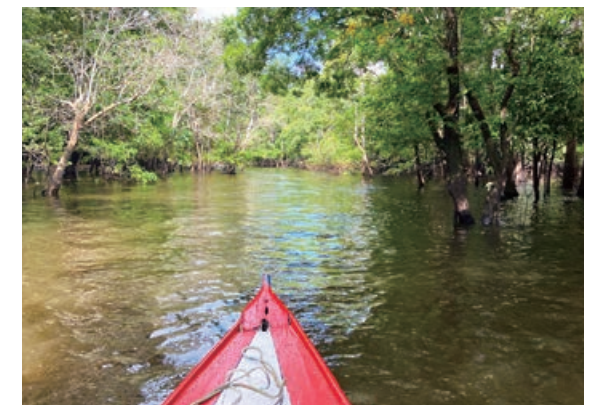
● アマゾン川視察

マナウスの魚・果物市場と民芸品市場を見学。市場周辺は治安が悪く、今回のブラジル滞在でブラジルの経済格差という課題を一番近くで目の当たりにする場所だった。今回の滞在では、街並みやお店の写真を撮りたくても、スマホを出すと盗られてしまうリスクがあるので、「記録に残したい。でも、安全が一番…」と日々葛藤があった。市場の人はフレンドリーで、南国特有の人々の温かさを感じられ、カラフルな南国フルーツやピラルクはじめ超巨大魚が並び、雰囲気圧倒された。(長島)



民芸品売場の方と記念撮影！

ボートに乗り、いざ世界一の川へ。多くの観光船が行き来していた。ボートでピンクイルカとの遊泳、巨大魚ピラルク釣り、先住民の文化見学、昼食ができるスポットによった後、小型ボートに乗り換えて、地図にも描かれていないような支流でピラニア釣り。ちなみに、釣れたピラニアは夕食のおかず！日本とは何もかも違う環境に終始驚きの日だった。そんなマナウスの地を開拓した今回のパワフルな日系一世のガイドさんをはじめ、日系移民の方々に脱帽。(長島)



ドキドキしながらアマゾン川の支流へ

9日目：8月7日 月

● ジョセフィーナメデロ校視察

日系社会青年海外協力隊として同校に派遣されている市川隊員の日本語の授業(小1)を見学した。アシスタントの教員と協力しながら、明るく、元気に、熱意を持って指導をしていたのが印象的であった。また、校内の視察も行き、陶芸や体育の授業も見学した。最後に、日本の教員陣で歌と踊りを披露した。(川崎)



市川隊員の授業風景

● マナウス総領事館表敬訪問

厳重な警戒がなされている領事館に入ると、一転、総領事と領事が非常に丁寧で温かい対応をしてくださった。総領事からは、マナウスにおける領事館の取り組み、同地域における日本(人)のプレゼンスの高さ、青年海外協力隊員の活躍、ブラジル初の日本語バイリンガル公立校の教育活動などについて説明していただいた。マナウスだけでなく、世界各地でこのような地道な日本の外交努力が行われているのだと感じ、感動を覚えた。(川崎)



厳重な警戒の中、唯一許された写真撮影

10日目：8月8日 火

● サンパウロ市営市場視察 ～サンミゲルアルカンジョ市へ移動

この市場でお土産をたくさん買うことができ良かった！サンミゲルアルカンジョ市への移動中、車がかなり揺れるとの話であったが、実際はそうでもなく、安心した。(寺鍛治)



市場の外で素敵な壁画を発見！

● コロニアピニャール(福井村)

コロニアピニャールの日本語学校を視察し、隣接する州立の公立学校も併せて訪問できた。夜は現地の日系の人々と懇親会、ご高齢の方々から昔のお話を多く聞けた。子ども達の和太鼓の演奏の迫力には圧倒された！(寺鍛治)



ここでもあたたかい歓迎を受けました。

11日目：8月9日 水

● 移住地内の農園視察

コロニアピニャールのピタヤ(ドラゴンフルーツ)、アテモヤ、びわ農園を視察させていただいた。出荷するまでの準備に農作物を育てるには5年かかると聞き、自然と向き合う農家の方々の日々の努力の積み重ねを知る。移住に至る経緯や移住後の話を伺った中で、「元気でいれば、何でもできる」という言葉が印象に残った。(天田)



お話の中に、日本人的な勤勉さと明るくてポジティブなブラジル人的思考を感じた。

● 草の根技術 PIPA 訪問

PIPAでは自閉症薬に頼らずに日常生活療法(TVD)を取り入れて子どもたちが社会の一員になる支援をしていた。サポートが必要な子へのブラジルの教育構造の問題点を知ると共に、これからの日本の教育の向かうべき方向についても考えるきっかけとなった。夜には3名の帰国研究員との交流会があり、研修で感じたことや多文化共生社会について意見を交わすことができた。(天田)



スタッフのフィリベさんから日々の生活指導や社会に出るための支援方法について話を聞いた。

12日目：8月10日 木

● サンパウロ市内活動ボランティアの 活動説明と意見交換会

現在、サンパウロ市内で活動されている隊員の方々からお話を伺う貴重な機会となった。特に印象に残っているのは、現地の人々の考え方や文化を受容し、相手に合わせながら工夫し続ける姿だった。活動を通してこのような姿勢が生まれ、活動終了後も国際協力を推進する大きな力になっていくのだろうと感じた。

意見交換会では、研修に参加している教員の質問の観点の鋭さに刺激を受けた。事前研修初日に「質問が答えを決める、問いにこだわろう！」とメモしたことを思い出した。質問力を高めることの大切さを仲間に気付かせてもらったことに感謝したい。(奥村)



3名の隊員の方々と意見交換会。

● JICA ブラジル事務所にて研修報告会

ブラジル研修で学んだことを報告させていただいた。この研修を通して自分自身が何を感じ、この経験を今後どのようにつなげていけばよいかを整理することができた。同時に、この機会を与えてくださり、支えてくださったJICA 横浜事務所やメディア総合研究所の皆様、JICA ブラジル事務所の皆様に感謝の気持ちでいっぱいになった。国際協力の現場最前線でご活躍されている方々と出会い、共に活動させていただくことで、国際協力の世界が身近なものになった。今後もJICAとの関係が持続可能なものであり続けるために、今の自分に何ができるのか、考えるきっかけになった。(奥村)



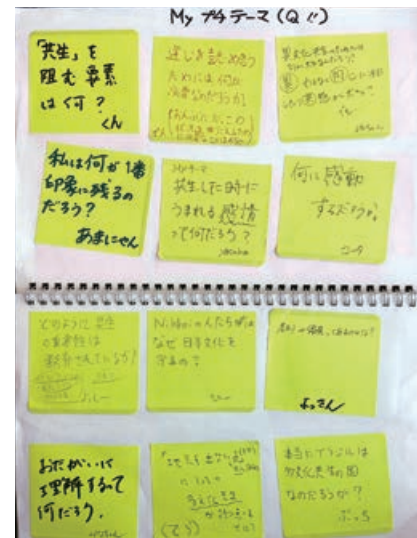
JICA 現地スタッフのみなさまと記念撮影。

13日目：8月11日 金

● サンパウロから帰路へ

それぞれの参加者がマイテーマを設定したことは「多文化共生と移民」という大きな共通のテーマに迫る上でとても効果的だったと思いました。多文化共生の概念や条件、必要性など、多面的に考えることにつながり、テーマについてより深く考えることができました。この話し合いを通して頭に浮かんだことは、ブラジルも痛みを伴いながら多文化共生を形作ってきたのだからということ。私が感銘を受けたサウジ学園の園長先生は幼少期に日本人であることを理由に虐げられた経験があるとのことでした。しかし、だからこそ子どもたちをたくさんの愛で包み込むとともに、ブラジルの多文化共生社会を支える1人となっていっしょのだからと思います。苦しみを乗り越える強さは他者への優しさと表裏一体なのだと思います。

このような強く、優しい移民たちの姿に社会全体が突き動かされ、少しずつ多文化共生が形作られてきたのだからと思います。今ブラジルが直面する経済格差の問題も、少しずつ状況が上向き、一人一人が自分らしく生きていける社会になっていくことを願ってやみません。(武井)



往路の空港で集めた参加者各自が追求したい「マイテーマ」の付箋。

Q 違いを認め合うためには何が必要なんだろうか？

Q 異文化共生のためには何が大切なんだろう？

Q 私は何が一番印象に残るのだろう？

Q 共生した時に生まれる感情って何だろう？

Q 何に感動するだろうか？

Q どのように共生の重要性は教育されているか？

Q Nikkeiの人たちはなぜ日本文化を守るの？

Q 差別や偏見ってあるのかな？

Q おたがいに理解するって何だろう？

Q 地元を出ない子にとっての多文化共生が持つ意味とは？



2023年度教師海外研修参加者【撮影：2023年教師海外研修事務局】

Workshop

みんなで作ろうしあわせの村
多文化共生を考えよう

14日目：8月12日 土

● 羽田空港到着

アトランタ空港から羽田空港までは飛行機で12時間程度だった。帰りは乗り遅れることもなく、参加メンバー全員で羽田空港に向かうことができた。体調不良者もなく健康に帰ってくることができてよかった！（本）



空港のロビーでもふりかえり会をしていました。

みんなで作ろうしあわせの村

ワークショップのねらい

本ワークショップには2つのめあてがあります。

【めあて①】

村づくりの話し合いを通して、「しあわせ」のために必要とする物や施設が人によって違うことに気づく。

【めあて②】

背景が違う他者との共存(多文化共生)を実現させるために自分ができることを考える。
また、上記のめあてを達成する過程で、自分がどんな社会をつくっていきたいのか、どんな大人になりたいのかについて考えるきっかけとする。

概要

ブラジル研修の中で異なる文化背景をもつ人々が共生していくためにはどんな社会を築いていったらよいのか考えました。また、ブラジルの学校を訪問したり、街や施設を見学したりする中で経済的格差を目の当たりにしました。多文化共生社会についての研修を行いながら、私たちは目指す社会像について考える機会が多くありました。

最初はゲーム感覚で自分達の住む村をよりよくするために話し合ったり、施設カードをじゃんけんで獲得したりします。【めあて①】学習者は自分の村のしあわせについて考えますが、他の村の状況を知り、経済的に裕福な村がある一方、自然災害に苦しんでいたりと、子どもが少なかったり、犯罪が多い村があったりすることを知ることになります。そして、2つ目のめあてとなる、異なる背景(条件)をもつ6つの村が共存する国民のしあわせをめざすにはどうしたらよいのかを考えることによって、村から国へと視野が広がっていきます。

しあわせの基準は人によって違います。話し合い、立場の違う人とも交流して理解し、違いを受け入れることで「多文化共生社会」は実現していくと考えます。実社会の課題に気付くことで、私たちが生きる社会に必要なことは何か、自分には何が出来るかを考えることができる人になって欲しいと思っています。

教材内容

- 施設カード
- 村の条件シート(A~F村)
- ワークシート

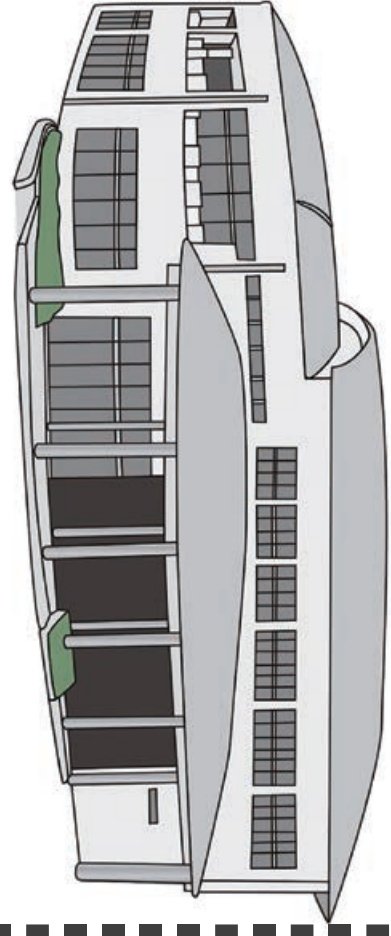
所用時間	45~60分	準備するもの	<ul style="list-style-type: none"> ●施設カード(掲示用、グループ配布用) ●村の条件カード(A~F村) ●ワークシート
1グループの人数	4~6人(6グループ)		

進め方

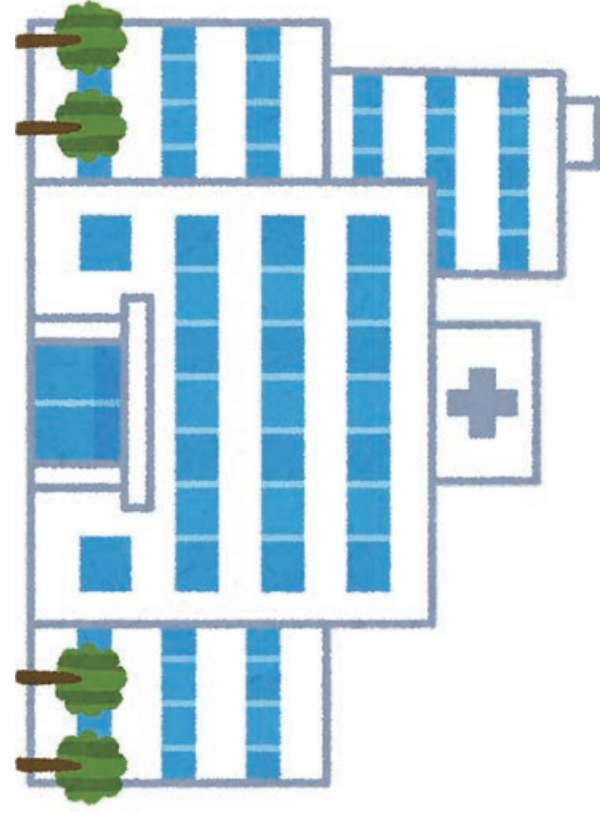
導入 (5分)	<p>全体を6グループに分ける。</p> <p>活動の流れを説明</p> <p>① 今日の活動、めあてを発表する。</p>
	<p>自分達の住む村の生活をよりよくし、人々がよりしあわせになるために必要な物・施設を考えよう。</p> <p>② 村の条件カード(A~F村)を配る。 ※他のグループには自分の村の条件については教えないことを伝える。</p> <p>③ 黒板に施設カードを掲示する。</p>
展開① (25分)	<p>1. 自分の住む村(A~F村)の生活をよりよくし、人々がよりしあわせになるために必要な物、施設を個人で考える。</p> <p>2. 各自欲しい施設をカードから3枚選び、欲しい理由もワークシートに書く。</p> <p>3. グループ話し合い、欲しい施設をグループで3つ決め、順位付けをする。</p> <p>4. 前に代表者が来てどのカードをどのグループに渡すか決める。欲しい施設が他のグループと被った場合はじゃんけんを行う。</p> <p>5. 3回目のじゃんけんが終わった後、それぞれの村の条件ともらったカードを発表する。 ☆裕福な村とそうではない村があることが分かる。</p> <p>6. それぞれの村の話聞いて、考えたことをワークシートに書き、発表する。</p>
	<p>2つ目のめあてを発表する。</p> <p>自分達の住む国の生活をよりよくし、人々がよりしあわせになるために必要な物・施設を考えよう。</p>
展開② (10分)	<p>4. 2つ目の、めあて「自分達の住む国の生活をよりよくし、人々がよりしあわせになるために必要な物・施設を考えよう」について考え、ワークシートに書いて発表する。</p> <p>5. 指導者から世界の経済的な貧富の差の話をしたり、資料を見せたりして、「共生・共存」「格差」「しあわせな生活」「自分たちが目指す社会」「自分がなりたい大人」などについて考える。</p>
まとめ (5分)	<p>自分の考えたこと、感じたことをワークシートに書き、全体交流を行う。</p>

留意点

- めあてが2つあるため、学年や児童の実態によって活動時間を工夫するとよい。
- カードを獲得した時の気持ちや、めあてが「国」になった時の気持ちを動画などに撮っておくと後から振り返る時に役立つ。
- 必要に応じて村の条件カードや施設カードを追加、または削除するとよい。
- 獲得カードの枚数の差少なくするために、2回目のじゃんけんが終わった後にボーナスカードを配布するなど工夫してもよい。
- じゃんけんでカードをもらえるか決まったことを想起させ、世界にはそもそも資源がなく、欲しくても持てない国や地域がある事も気づかせるとよい

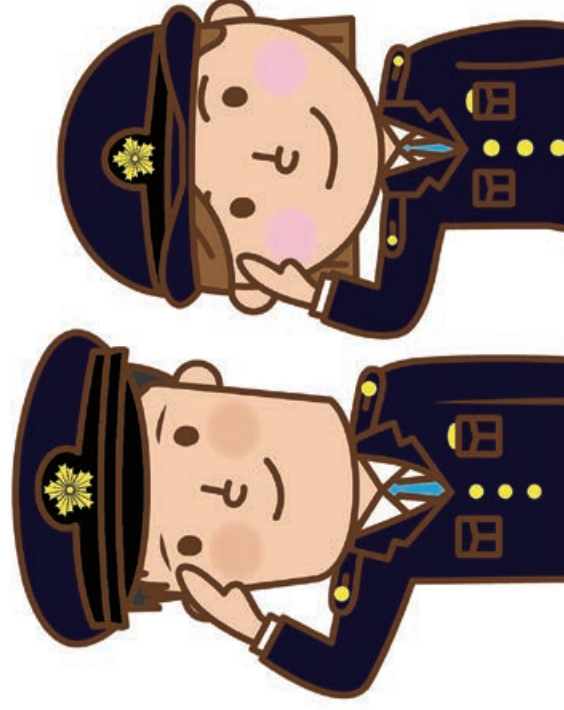


スポーツ施設

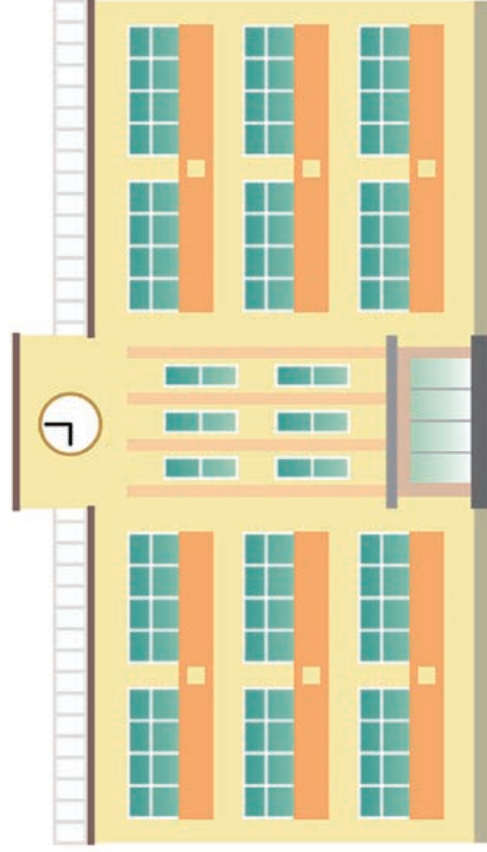


病院

警察

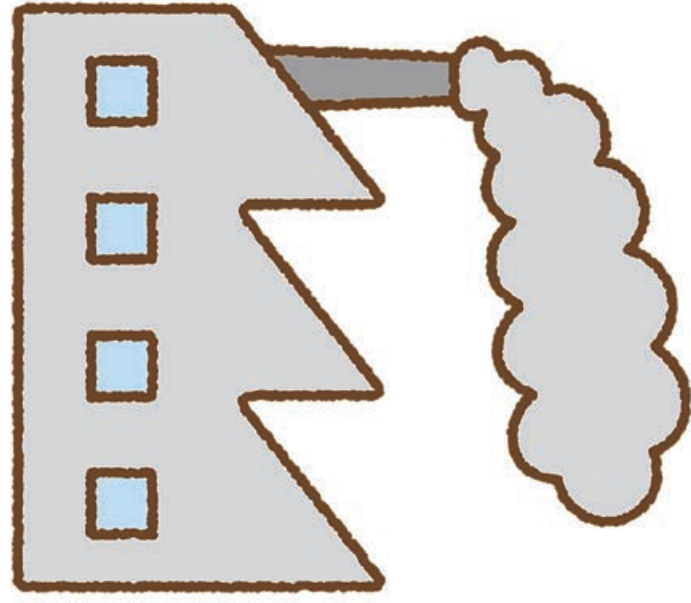


学校



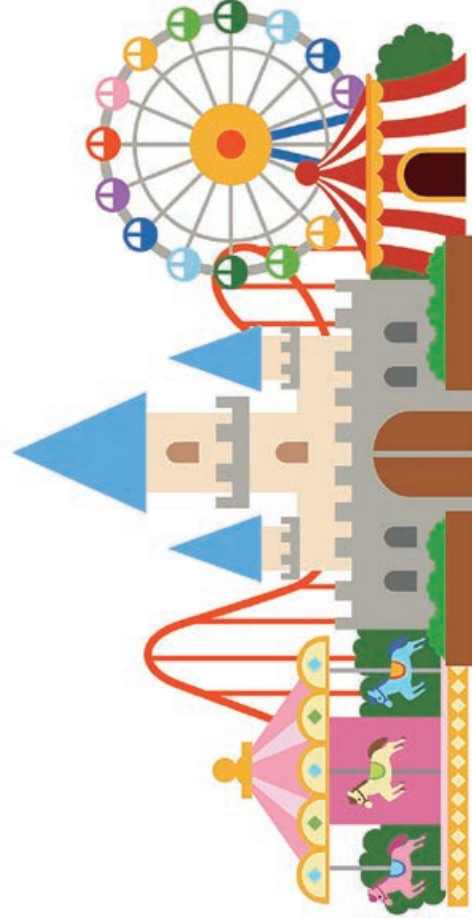


水道

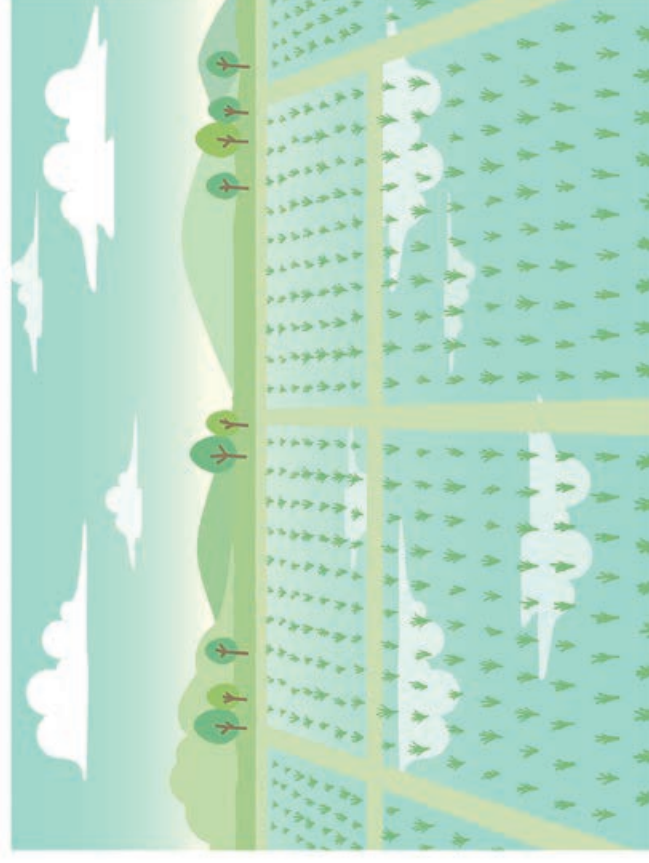


工場

娯楽施設



畑



A村

- 人が明るい。
- 治安がよい。
- 自然災害が多い。
- 暑くて作物が育たない。

C村

- 自然が豊か。
- 自然災害が多い。
- 子どもが少ない。
- 犯罪が多い。

B村

- 人が明るい。
- 自然が豊か。
- 産業がない。
- 病院がない。

D村

- 人口が多い。
- 土地がある。
- 作物がたくさんとれる。
- 犯罪が多い。

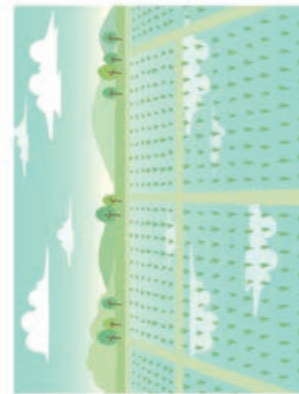
E村

- お金もちが多い。
- 人口が多い。
- 伝染病が流行っている。
- 犯罪が多い。

警察



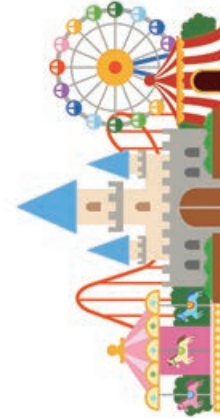
畑



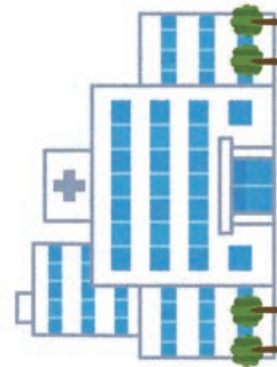
学校



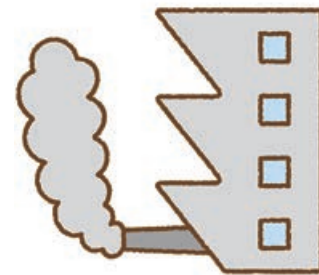
娯楽施設



病院



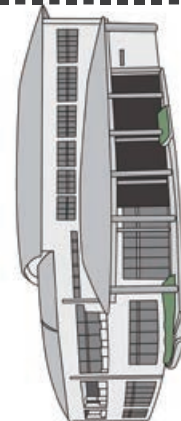
工場



F村

- 井戸水を使っている。
- 字が読めない人が多い。
- 伝染病が流行っている。
- 子どもが少ない。

スポーツ施設



水道



「みんなで作ろう しあわせの村」

年 組() 名前()

①しあわせになるために必要な施設を考えよう。(個人)

1番()	理由
2番()	理由
3番()	理由

②しあわせになるために必要な施設を考えよう。(グループ)

1番()	理由
2番()	理由
3番()	理由

③他の村の話聞いて、考えたこと感じたことを書きましょう。

④2つ目のめあてに関する自分の考えを書きましょう。

⑤今日の活動を通して、感じたこと思ったことを書きましょう。

多文化共生を考えよう

移住すごろくゲーム in Brazil

ワークショップのねらい

- 先人たちが異文化に身を置いた経験を追体験する。
- 日本に住む外国人の思いを想像する。
- 多文化共生の現状や課題について気づききっかけとする。

概要:(このワークショップを作成するに至った背景、制作者の思い、等々)

現在日本には沢山の外国人が居住しており、その数は今後も増加していくことが見込まれます。そこで私たちは、児童・生徒たちが、外国から移住しマイノリティとして生きる人々の苦労や葛藤、喜びを知ることで、日本での外国人の暮らしや、多文化共生について考えるきっかけとなるワークショップを作りたいと考えました。

今回私たちは、研修で訪れた JICA 横浜の海外移住資料館やブラジルでの学びを活かし、日本人がブラジルに渡った経験をもとにしたすごろくゲームを作成しました。移住すごろくで遊ぶことで、先人たちが外国に身を置いた経験を擬似体験します。そして、その体験をもとに、現在日本に住む外国人が日本でどのようなことを経験しているかを考えます。日本に住む外国人の暮らしを、「外国人の視点」で想像することで、多文化共生について、自分ごととして考える1つのきっかけとなれば幸いです。

教材内容


時数	所要時間	1グループの人数	準備するもの
1	50分	3~6名	<ul style="list-style-type: none"> ●移住すごろく in Brazil (4枚1セット) ●サイコロ ●すごろくのコマ ●付箋 ●解説スライド(印刷、または、タブレットで配付) ●ワークシート
		移住すごろく in Brazil で遊ぼう!	
2	50分	3~6名	<ul style="list-style-type: none"> ●移住すごろく in Brazil (裏紙に、付箋をつけて班ごとで作成したオリジナルすごろくとして利用) ●サイコロ ●すごろくのコマ ●付箋 ●ワークシート
		オリジナル移住すごろく で遊ぼう!	

所用時間	50分×2コマ	準備するもの	<ul style="list-style-type: none"> ●移住すごろくゲーム in Brazil (4枚1セット) ●解説スライド(印刷もしくはタブレットで各班で開く) ●サイコロ ●すごろくのコマ(白、赤、黒、黄、青、緑) 他の物でも代用可 →ダイソーにあるブロックがちょうど6色入りなので、オススメです。 ●付箋(赤、青)
人数	3~6人 (4人がベスト)		



進め方


1 時間目

項目(時間)	内容
導入 (10分)	<p>「多文化共生ってなんだろう?」「多文化共生じゃないのはどんな状態?」</p> <ul style="list-style-type: none"> ●「多文化共生」という言葉について考える。 ●ワークシートを活用。 ●身近な場所での外国語表記の看板などの写真を見せてから問いかけると自然。 ●予想される答え: <ul style="list-style-type: none"> →多文化共生: 共に生きる、異なる文化や言語などを認め合う、差別がない →多文化共生じゃない: 差別、いじめ、1つの文化を強要する
展開 (30分)	<p>「移住すごろく in Brazil」で外国への移住体験しよう!</p> <ul style="list-style-type: none"> ●日本人を含め、多様な人が暮らす国の例としてブラジルを紹介。 ●日本からブラジルへ移住した人々の歴史をもとに作成したすごろくで遊ぶことで、外国への移住を擬似体験することを伝える。 <p>【すごろくの遊び方】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●班でじゃんけんをして順番を決める。さらに、コマの特性を選ぶ。 ●マス目で「-1」などあれば、その指示に従う。移動した先に再び「-1」等書いてあっても移動はしない。 ●※印のある場所に止まった時には、解説スライドを読む。(スライドを班員に見せるスライド係など決めておくとうい) ●スタートする時は、みんなで「Vamos (パモス) (ポルトガル語、スペイン語で「一緒に行こう」などの意味)と言おう! ●「SimSim」と書いたマスは「へえ」という意味。みんなでシムシムと言ってうなずこう! <p>●はやく終わった班には、解説スライドを全部読むなど指示をする。</p> <p>「移住体験をして思ったこと、気づいたこと、発見したこと、疑問」</p> <ul style="list-style-type: none"> ●班でマス目を指さしながら共有、その後、何人か全体にシェアしてもらう。 ●ワークシートを活用。
次回に向けて (10分)	<p>日本に住む外国人はどのような経験を日本でするだろう?</p> <ul style="list-style-type: none"> ●先ほどのすごろくを参考にして、外国人→日本に移住したバージョンでオリジナルすごろくを作る。 ●考えるヒントとして、ALTの先生へインタビューする機会を作ったり、インターネットで調べたりすると良い。 ●よいことはピンクの付箋、悪いことは青の付箋に記入をしてもらう。  <ul style="list-style-type: none"> ●次回、作成したすごろくで遊ぶことを予告。 ●多めに付箋を渡して家でも考えてもらう。

コマの特性

- お金がある
- 現地語が話せる
- 現地に知り合いがいる
- 社会的
- 身体が丈夫
- メンタルが強い

2 時間目

項目(時間)	内容
導入 (10分)	<p>前回の活動を振り返り、オリジナルすごろく作成の準備時間を設ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●付箋は1人4枚以上が目標。 ●書いた付箋は、前回使ったすごろくの裏紙に貼り、スタートやゴール、矢印を記入する。 
展開 (30分)	<p>オリジナルすごろくで遊ぼう</p> <ul style="list-style-type: none"> ●準備ができたところから、すごろくで遊ぶ。 <p>他の班のすごろくを見に行き、「なるほど」「確かに」と思ったマスを探す</p> <ul style="list-style-type: none"> ●班に戻って共有する。 <p>日本に住む外国人はどのような経験を日本でするのだろう?</p> <ul style="list-style-type: none"> ●再び、前回と同じ質問を問いかける。 ●ワークシートを活用。 ●日本での喜びや苦勞、どちらの経験も全体に共有できるようにする。
まとめ (10分)	<p>「私たちの生活って、多文化共生できているのかな」</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ワークシートを活用。 ●一番最初に問いかけた「多文化共生とは?」、「多文化共生じゃない」への答えを振り返りながら考えさせる。

補足説明(必要に応じて):

出典: イラスト いらすとや <https://www.irasutoya.com/>

添付(カード類)

バモス
Vamos!
スタート



①
1日で
春夏秋冬

+2

●

②
現地語の力は
凄い！距離が
縮まる！

+2

●

③
現地語分か
らず騙される

-2

●



⑰※
良い教育
を受ける

+2

○

⑱
ごはんの
量が多い

Sim Sim

⑮
現地の方と
結婚する♡

全力で喜ぶ！

⑭
感染症で
入院する

以外
1回休み

●



左下

移住すごろくゲーム in Brazil

<目的>
先人たちが異文化に身を置いた経験を追体験する！

左上

⑳
ジャポネス
グランチード

+3



㉑
トイレットパー
パーが流せず
トイレ詰まる。

-1、他-2

●

⑲
高校・大学
に通って良い
仕事！

+2

○ ●



⑱※
和太鼓
クラブで優勝

+2

右上

コマの特性

- お金がある
- 現地語 (ポルトガル語) が話せる
- 現地に知り合いがいる
- 社交的
- 身体が丈夫
- メンタルが強い

合言葉を！
Sim Sim!

ゴール
Parabéns!

②②

近所の人と
もめる

● 以外-1

②③

カバンを
ひったくられる

-1

②④

おばあちゃんと
孫で言葉が
通じない

● 以外-1

②⑤

「何人？」
と聞かれ
答えに困る

見つめ直しの1回休み

②⑥

宝くじ大当たり
日本に行き、
自分のルーツ探す

全員で喜ぶ！

右下

⑨
働いても
収入よりも
借金多く、
貯金できない
-6

⑩
突然の
退去命令
内地へ移動
スタートへ戻る

⑪
差別を
受ける
● 以外-2

⑫
外交関係悪
化で
日本に
帰れない
● 以外1回休み

⑬
フレイジョアード
見た目よりも
美味しい
Sim Sim



⑧※

いろいろな
国の人
が
住んでいる
● は+2

⑦※

農作物
初収穫
全力で喜ぶ！

⑥※

ヒョウガ
降って
農作物全
滅
● 以外-2

⑤※

うわー！
隠れていた
アリクイに襲わ
れる
● ● ● は-1

④※

食べ物がなくて
アルマジロを
食べる
● 1回休み！



R5 教員海外研修 ブラジル移住すごろく解説集

すごろく班

① 1日で春夏秋冬を感じる寒暖差

ブラジルは、南北に広がる大きな国。
北部アマゾン付近は赤道に近いので、年中暑いですが、
南部のサンパウロの冬は
朝晩は冷え込み、昼はTシャツで
過ごせるくらい暑くなります。
1日で春夏秋冬が体験できると言われています。



⑤ 農地を開拓中、オオアリクイに襲われる

本来はおとなしいオオアリクイですが、
狩猛(どうもう)になることがあり、
前足にある大きなカギ爪をふりかざして
襲いかかることもあります。
体長は1.2m~2mほどあり、
ピューマやジャガーさえも撃退する
ことがある程です。



② ポルトガル語が話せる!

ブラジルではポルトガル語が
話されています。

英語が分かる人の割合は
あまり多くないので、

ポルトガル語を覚えないと、
コミュニケーションは難しいです。



⑥ ひょうが降ってきて、農作物全滅

多くの日本人移民は、農作物の
収穫によって生活をしていま
した。

収穫間際に雹(ひょう)が降
って、農作物が全滅になるこ
ともありました。

大切に育ててきた作物からの
収入を失い、絶望すること
もありました。



③ ポルトガル語が分からずだまされる

現地の言葉が分からないと、
物の売買や契約の際に、
不利になる時も多くありました。
自分の権利を守るために、
言葉が分かることは、とても重要です。



⑦ 農作物初収穫

なかなか現地の土壌に合わず、農作物の
収穫が困難でした。
ブラジル中部では、主にコーヒーを栽培
していました。
ブラジル北部では、ジュートという作物を
育てていました。ジュートとは、収穫した
コーヒーなどを入れる麻袋の原材料となる
植物です。
奇跡的に、上手く育った苗を
大切に増やし、安定した収入源にでき
ようになりました。



④ 食べ物がなくてアルマジロを食べることも!!

ブラジルの農園へ移住した人々の当時の食生活は、
芋や豆の塩ゆでを毎日食べていました。
米や肉はとても高かったので、
場合によっては
アルマジロは貴重な
タンパク源として
食べられていたそうです。



⑧ いろんな国の人が入っている

ブラジルはもともと先住民が暮らす土地でした。
ポルトガル人の入植以降、
奴隷制度で連れてこられたアフリカ人、
奴隷制度がなくなって労働力となった
イタリア人、日本人など
様々なルーツの人たちから暮らしている国です。
ブラジル人と言っても、その姿は千差万別です。



⑨ 働いても収入よりも借金が多く、お金が貯まらない

農園(ファゼンダ)に雇われていた
日本人移民の人々の
給料日は年に一回だけでした。
それまでに必要なものは農園のお店で
つけ払い(借金)で支払っていました。
つけ払いの支払いが給料よりも多く、
借金だけが残ることもありました



⑭ 感染症で入院する

農園に移住した人々にとって病院は
医療費が高すぎたり、
遠すぎて行くのに何日もかかったり
今のように簡単にいけるものではありません
でした。マラリアや、
今では助かる病気で亡くなる人が
沢山いました。



⑩ 突然の退去命令!

ブラジル南部に住んでいた日本人の
一部は、退去命令が出されました。
退去命令が出された日本人は、一度
移民収容所に運ばれて、内陸の奥地に移動
させられました。
山奥に小屋を作り、一から畑を開墾
していく人もいました。
引越すだけのお金がない人達は、福祉家
に助けられながら各地方に向かいました。



⑮ 現地の人と結婚する

家族単位で移住してきた日本人
移民たちですが、
現地で生まれた子(2世)、
孫(3世)、
ひ孫(4世)になるにつれて、
日系以外の人々との結婚が
増えました。



⑪ 差別を受ける

ヨーロッパ系住民も多い
ブラジルでは、アジア系
である日本人が差別される
こともありました。
また、第二次世界大戦
ではブラジルはアメリカ側
を支援。敵国人として差
別が深刻となりました。



サンパウロの移民博物館内部の写真。ブラジルでは、今でも「移民」を受け入れるか、
拒絶するかの議論は続いている。博物館のガイドさんの話によると、移民の国・ブラ
ジルでも、人種差別はゼロではないという。

⑯ ボリュームたっぷりのブラジル飯

ブラジルの食事は日本食と比べ
て油分が多く、ボリューム感も
ある料理が多いです。
ブッフエやシニア形式のお店
がたくさんあるので、栄養バラ
ンスを考えながらブラジルでの
食生活を楽しみましょう!



⑫ 外交関係悪化で日本に帰れない。

第二次世界大戦中、ブラジルは、
アメリカ側を支援しました。

敵国となった日本との関係(国
交)が断絶しました。

その結果、日本に帰りたくても帰
れない人々が沢山いました。



⑰ 良い教育を受ける

ブラジルにも
公立と私立での教育格差があります。
私立は最先端の教材、ICT機器、施設が充実
しています。
いわゆる「名門校」は全日制の学校が多く
授業時間も公立に比べて長くなっています。



⑬ フェイジョアーダ、見た目よりも美味しい!

フェイジョアーダは
ブラジルの国民食です。

黒インゲン豆、ソーセー
ジや豚肉・牛肉などを煮
込んで作るため、適度な
塩気がきいていて美味し
いです。



ブラジルの私立学校の給食です。
ビュッフエ(バイキング)ス
タイルで好きなものを好きなだけ
食べられるのが素敵です!

⑱ 和太鼓クラブで優勝

ブラジルで受け継がれている日本
文化の一つが太鼓です。
日系コミュニティの中でも大切
にされています。

ブラジルに渡った移民が工夫して
現地の材料でブラジル太鼓とい
う太鼓を作りました。(写真中央)

子どもたちの中には和太鼓大
会に優勝して、日本での演奏チャ
ンスを手に入れることを夢見て、
練習に励んでいる子もいます。



⑲高校・大学のおかげで良い仕事に就く

日本よりも経済格差が大きいブラジルでは、日本以上に学歴が就職に影響することもあります。

勉強や学歴が全てではありませんが、それらはブラジルでも重要視されています。



⑳カバンをひったかれる

日本ではあまり聞かない窃盗や強盗の発生率はブラジルなど諸外国ではかなり多いです。

日本にいる感覚で歩いていると確実に狙われます。



㉑うっかりトイレトーパーを流し、トイレを詰まらせる

トイレ文化は国によって様々です。ブラジルでは、基本的にトイレトーパーをトイレに流すことはできません。ペーパーはゴミ箱へ捨てます。日本にいるときと同じ感覚で、うっかり流してしまうと詰まってしまうことも...。気をつけましょう！



㉒おばあちゃんと孫で言葉が通じない

日本語だけ話すおばあちゃん（1世）、日本語もポルトガル語も話すお母さん（2世）、ポルトガル語だけ話す孫（3世）日系人でも日本語を話さない人たちが増え、家族での深いコミュニケーションが難しくなることも多いです。



㉓ ジャポネス・ガランテード

直訳すると「信用できる日本人」です。

仕事熱心で真面目な日本人移民は現地で信頼を獲得し、「日本人なら信頼できる！」と取引で得をする人もありました。



㉔「何人？」と聞かれ答えに困る

日系移民の多くは、ブラジル生まれ、ブラジル育ちなので自分はブラジル人だと思っ

ても、家族が日本出身だから、周りから日本人！と言われることもあるようです。



㉕近所の人ともめる

多民族国家のブラジルでは、沢山の文化が入り混じって生活しています。

お互いの文化が尊重できないと、トラブルの原因になることも。

右の写真は日本文化が色濃いリベルタージの街並みです。



㉖宝くじで大当たり！日本へ自分のルーツを探しに！

自分のルーツ（先祖）を知ることで、

「自分」をつくってきた

日本の文化もブラジルの文化も大切に

に思える機会になるかもしれません。



2023年度教師海外研修参加者 [撮影：2023年教師海外研修事務局]

実践授業報告

※この報告書に掲載されている写真は、教師海外研修参加者の責任の基に提供されたものを使用しています。
※参加者の先生、児童生徒さんの原文をいかして掲載しております。表記などにばらつきがありますが、ご了承ください。

RINA AMADA



実践者	氏名	天田 梨那	学校名	神奈川県川崎市立土橋学校
	担当教科等	外国語科	対象学年(人数)	5年生(169名)
	実践年月日もしくは期間(時数)	2023年11月(8時間)		

【実践概要】

【1】実践する教科・領域

外国語科

【2】単元(活動)名

NEW HORIZON Elementary 5
「Unit 8 Who is your hero?」

【3】授業テーマ(タイトル)と単元目標

〈授業テーマ〉 [Who is your hero?]

〈単元目標〉 あこがれの人を紹介するために、その人が得意なことなどについて、短い話を聞いてその概要が分かったり、伝え合ったり、話したりすることができる。
外国語の背景にある文化に対する理解を深める。

【4】単元の評価規準(話すこと/やり取り)

1 知識及び技能

Who is your hero? My hero is ~. Why is ~ your hero? He/she is good at ~. およびその関連語句などについて、理解している。日常生活や憧れの人が得意なことなどについて、お互いの気持ちなどを伝え合う技術を身に付けている。

2 思考力、判断力、表現力等

自分のことを伝え、相手のことをよく知るために、日常生活やあこがれの人が得意なことなどについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて、お互いの考えや気持ちなどを伝え合っている。

3 学びに向かう力、人間性等

自分のことを伝え、相手のことをよく知るために、日常生活やあこがれの人が得意なことなどについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて、お互いの考えや気持ちなどを話そうとしている。

【5】単元設定の理由・単元の意義

【単元設定の理由】

「Who is your hero?」の学習では、自分の考えるヒーローとその理由を友達や先生と英語で伝え合うことが単元のゴールとなる。授業を行う際、毎回単元の最後に国際理解教育の学習(Over the Horizon)を行っているが、今回は、ブラジル研修で学んだことを踏まえたワークショップを単元の最初に行い、児童の学習の動機づけをすることを旨とするにした。

【単元の意義】

しあわせな社会に必要なものとは人それぞれ考えが違ふことを知ったり、自分達がしあわせになるために必要な施設を考えたりすることにより、目指していく社会や自分の目指したい人物像について考える。そして、それを伝え合うことで他社理解、自己理解を深める。最初に自分たちが目指す社会についてのイメージを抱くことによって自分がなりたい大人像について考える手立てになると考えた。

【児童観】

土橋小学校には、帰国子女や海外にルーツを持つ児童が多く在籍している。全校の人数は千人を超える大規模校である。英会話を習っていたり、英語の検定を受験したりするなど、家庭も児童も外国に興味、関心をもつ児童が比較的多いと感ずる。ワークショップを通して、児童の目指す社会やなりたい大人について考え、様々な異なる人々が共生していく社会について考えるきっかけになることを目指した。また、話し合い活動や自分の考えを伝え合う活動を通して、異なる考えを持つ人のことを知ることや自分の考えを伝えることに興味をもち、自分の世界を広げていけるような子どもたちに育ってほしいと考えている。

【指導観】

世界はすべての人が平等・公平に住むことができていない現実がある。また、日本は少子高齢化社会が進み、今後多くの外国人を受け入れ、多文化共生社会を目指す可能性が考えられる。実社会の課題に気付くことで、私たちが生きる社会に必要なことは何か、自分には何ができるかを考えるきっかけとなしてほしい。

外国語の授業では、様々な国の文化や自然、人々の様子を扱うことが多い。普段から異文化理解の活動も多く取り入れ、子どもたちの発見や思考を促すように工夫している。紹介する国の中には、日本と同じ習慣がある国もあれば、全く違う国もある。ブラジルのことを紹介したり、ブラジルの子どもたちの考えるヒーローとその理由を紹介したりすることでヒーローについてのイメージを広げることができると思った。英語は人とコミュニケーションをとるための1つの手段である。子どもたちには、学んだ英語を使って人とコミュニケーションをとることの楽しさを感じてほしいと思っている。

【6】単元計画(全8時間)

時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1 本時	みんなで つくろう しあわせの村	村づくりの話し合いを通して、発展のために必要とする施設や人がによって違うことに気づく。社会の発展の仕組みについて考える。	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちが住民になったと仮定して、しあわせな村や国をつくるためには何が必要かを考えて話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 村の条件カード 施設カード スライド資料 振り返りシート
				
2	Heroの条件について考えよう。	ブラジルの子供達が考える憧れの人について知り、自分のヒーローについて考える。	<ul style="list-style-type: none"> ヒーローの条件について考える。 ブラジルの子供達の考えるヒーローとその理由を知り、自分の考えるヒーロー比べる。 	<ul style="list-style-type: none"> スライド資料
3・4	Starting Out	憧れの人についてのやり取りのおおよその内容を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> 指導用デジタル教科書の登場人物や指導者の憧れの人についてやり取りを聞いて、内容を推測し、表現に慣れ親しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> デジタル教科書 ピクチャーカード
5・6	Your turn	憧れの人についてたずね合う。	ヒーローについて紹介する表現方法を理解してたずね合う。	<ul style="list-style-type: none"> デジタル教科書 クロムブック
7・8	Enjoy Communication	憧れの人とその理由を伝え合う。	自分の考えるヒーローとその条件について考え、スライドを使ってALTと伝え合う。	<ul style="list-style-type: none"> クロムブック
				

単元の最後に児童一人一人が作成したスライドを見せながら自分のヒーローについてALTに伝える「チャレンジタイム」を行った。英語を使って自分の思いを伝え合う活動を定期的に行っている。

【7】本時の展開(1時間目)

本時のねらい

しあわせな村づくりの話し合いを通して、発展のために必要とする物、施設が人によって違うことに気づく。社会の発展の仕組みについて考え、自分がどんな社会をつくっていききたいのか、どんな大人になりたいのかについて考える。

過程・時間	教員の働きかけ・発問 および学習活動・指導形態	指導上の留意点 (支援)	資料 (教材)
導入 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> 今日の活動、めあてを発表する。 		パワーポイント
	自分達の住む村の生活をよりよくし、人々がよりしあわせになるために必要な物・施設を考えよう。		
展開 (50分)	<ul style="list-style-type: none"> 活動の流れを説明 各自欲しい物をそれぞれが考えて、順位付けをする。 班ごとに選ぶカードを3枚話し合って決める。 前に代表者が来てどのカードをどのグループに渡すか決める。(じゃんけん) 2回目のじゃんけんが終わった後にボーナスカードを配布する。 3回目のじゃんけんが終わった後、それぞれの村の条件ともらったカードを発表する。 ☆裕福な村とそうではない村があることが分かる。 みんなの発表を聞いて考えたことを書く。 2つ目のめあてを発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> クラスを6グループに分ける。 施設カードを黒板に貼る。 村の条件カードを配る。 ワークシートを配布する。 	黒板掲示 施設カード 村の条件カード ワークシート
	自分達の住む国の生活をよりよくし、人々がよりしあわせになるために必要な物・施設を考えよう。		
まとめ (5分)	<ul style="list-style-type: none"> めあてに向けて、考えたことをワークシートに書く。 全体交流をする。 話を聞いて考えたことをワークシートに書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 村から国に代わることで子供たちの視野を広げる。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 全体交流をする。 挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 現実の社会について考えるよう支援する。 	

【8】評価規準に基づく本時の評価方法

本時では記録に残す評価は行わないが、児童の発言やワークシートの記述を読み、2時以降の学習活動に考えたことが活かされていくかどうかを評価する資料とする。

【9】学習方法及び外部との連携

- ブラジル研修で自身が感じたことからワークショップを作成し、児童に「しあわせな暮らし」「なりたい自分」について考えるきっかけとなる授業を導入して取り入れた。
- ブラジルの子どもの将来の夢や憧れの人とその理由のアンケートを取り、その集計結果を土橋小学校の児童に伝えることにより、外国の子どもと自分達の考えの似ているところや異なるところに気づくことを目指した。

【10】学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

- 担当している3～6年生19クラスの児童に JICA 教師海外研修での経験をスライドで説明し、国際理解教育や JICA の活動について話をした。担当教室の English Room に写真や説明の掲示をしてより多くの児童や教員が国際理解教育に興味を持つよう心がけた。
- 所属する川崎市の「国際・外国語研究会」の所属教員に自分の経験や実践について報告し、教師海外研修のレポートを作成して研究冊子「私の国際教育」に掲載する。



【自己評価】

【11】苦勞した点

通常の45分の時間では学習内容を行うことが時間的に難しいと考え、本時は短時間学習15分をつなげて60分授業を行うことにした。指導者が一方的に情報を伝えるのではなく、児童自身が体験し、考えをもつためにはどのような授業展開ができるか検討することに労力を費やした。また、より児童が自分事として「多文化共生」「公正・公平」などの社会問題を捉えるためにはどうしたらよいかという視点をもって教材開発や授業展開の検討に努めた。また、外国語科の「Who is your hero?」の学習内容と今回のワークショップの内容をどのように自然な形で関連付けるかについては熟考した。

【12】改善点

最初はゲーム感覚で自分達の住む村をよりよくするために話し合い、施設カードをじゃんけんで獲得する活動を行った。児童は自分の村の幸せについて考えるが、他の村の状況を知り、経済的に裕福な村がある一方、自然災害に苦しんでいたり、子供が少なかったり、犯罪が多い村があったりすることを知ることになる。そして、2つ目のめあてとなる、6つの村が共存する国民の幸せをめざすにはどうしたらよいかを考えることによって、村から国へと視野が広がっていくような授業展開にした。さらに、ワークショップの活動からブラジルや世界の国の経済的貧富の差が明らかにわかる写真資料を見て、現実の社会の問題に直面する。実社会の課題に気付くことで、自分たちが生きる社会に必要なことは何か、自分には何ができるかを考えるきっかけになったと思う。

【13】成果が出た点

単元の最後に児童に行った振り返りに「Who is your hero?」の授業の最初に『みんなで作ろうしあわせの村』のワークショップを行ったことで、多文化共生社会や自分の目指す大人像について考えることができたと思いますか?という質問をしたところ、児童の66.7%が「とても思う」、33.3%が「やや思う」(全く思わないは0人)という回答があった。ブラジルの子どもの考えるヒーローとその理由についても紹介したことにより、自分の目指す大人像について視野を広げて考えることができたと感じる。教科書から学ぶだけでなく、体験的に学んだり、同世代の海外に住む子ども達とのつながりを考えたりすることの大切さを実感した。

【14】学びの軌跡(児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)

【児童の振り返りからの抜粋】

- 「みんなで作ろうしあわせの村」のワークショップの振り返り
 - 解決策を口で言うのは簡単だけど、実際に実行するのは難しいと気付いた。
 - ゲームの中だと簡単に言えるけど、現実になると簡単に言えないし、全部そろったら幸せ、そろってなかったら幸せじゃないわけでもないと思った。仲間がいたら私は幸せかな、と思った。
 - みんなが幸せになるには、コミュニケーションが大事だと思う。お金も大事だけど、辛いことがあったらみんなでなくさめてあげたい。この活動を通して、簡単に考えていたことがそうではないことに気付いた。
 - ちょっとしたゲームから、社会のことをよく考えることができた。世界には貧困に苦しんでいる人が世界にはいることも考えて過ごしていこうと思った。
 - どんな人にも平等に話せるような人になりたいと思った。なぜなら、海外では日本と違う文化がたくさんあるから、日本に来た人にも日本の文化を押し付けたり、自分たちと違うからと言ってけなしたりするようなことはしたくない。それぞれの文化を大切にしたい。
 - 村を合体すればよいと思いついたけど、やっぱりお金をあげるのはそう簡単にできないし、平等になるかどうかはわからないからもっと深く考えないといけないと思った。また、今回の授業を通して、自然災害などは人の手でなくすことはできないから、すべての村を平等にプラスマイナスゼロにすることは難しいと思った。
 - 最後の話で、世界中で、同じ国の中でも貧富の差があることが分かった。お金がある人がそうでない人にお金を配ることはできないから、平等な社会を目指した方がいいと思う。また、これからは「多文化共生社会」になるから、格差がないような社会をつくらなければならない。

○ブラジルの子どもの考えるヒーローを知り、どのように思いましたか?

- ブラジルの子ども達は家族愛が強いと思った。家族を憧れにして頑張るっていいな、と思った。
- 日本と比べたら、家族や神様など、親切にしてくれる人や支えてくれる人に憧れていると思った。
- 国が違って、考え方が似ているな、と思った。
- 家族のことをとても好きで、尊敬していることに感心した。
- ブラジルの子どものヒーローの大半はサッカー選手だと思っていたから、家族が大半で驚いた。
- どんな人にもいろいろな個性があり、自分の憧れのヒーローもそれぞれ違って、やっぱり個性っていいなと思った。(みんなとヒーローについての交流を終えて)

【15】授業者による自由記述

ブラジル研修に参加できたことで周囲の人や校内の子ども達にブラジルという国や日本とのつながりについて伝えることができた実感している。土橋小学校の子ども達は、遠く離れた国、ブラジルが私や JICA を通して今まで以上に近く感じるようになったと思う。私自身も研修に参加したことで多文化共生社会の実現に向けて多くのことを学ぶことができた。そして何より、この研修で得た一番の宝は「人との出会い」である。ブラジルの子ども達にヒーローの調査をしたい！という私の願いに現地の多くの学校で協力してくださったり、帰国後に翻訳を手伝っていただけたり、数えきれない人々のサポートの元、授業実践を行うこともできた。一緒に研修に参加された先生方は私に多くの刺激を与えてくれた。研修は終わっても、私はこれからも多文化共生社会や国際理解教育について考え続け、実践を重ねていきたいと思っている。

別添資料：
授業で使ったパワーポイント、ふりかえりシート

「みんなで作ろうしあわせの村」
5年 組() 名前()

①しあわせになるために必要な施設を考えよう。(個人)

1番() 理由
2番() 理由
3番() 理由

②しあわせになるために必要な施設を考えよう。(グループ)

1番() 理由
2番() 理由
3番() 理由

③他の村の話聞いて、考えたこと感じたことを書きましょう。

④2つ目のめあてに關しての自分の考えを書きましょう。

⑤今日の活動を通して、感じたこと思ったことを書きましょう。

Who is your hero?
~In Brazil!!~

No1: Parents, family
No2: God
No3: teacher

Why?

Family(家族)
・世話をしてくれる
・守ってくれる
・やさしい
・信頼できる
・問題を解決してくれる
・愛してくれる
・自分を応援してくれる

God(神様)
・自分を作ってくれた
・ガイドしてくれる
・助けてくれる

Teachers(先生)
・いろいろなことを教えてくれる
・やさしい
・助けてくれる

Who is your hero?
~In Japan!!~(土橋小5年生)

No1: Athlete
No2: Parents, family
No3: characters(anime, game)

みんなで作ろうしあわせの村

他の村の話聞いて、考えたこと、感じたことをワークシートに書きましょう。(③)

活動のめあて

自分達の住む村の生活をよりよくし、人々がよりしあわせになるために必要なもの・施設を考えよう。

活動の流れ

それぞれのグループが〇村(A~F)の住民になります。それぞれの村には条件があります。村に必要な物・施設を3つ考えてください。(個人で考える→グループで3つ決める)



欲しいもの・施設をもらうには、

1. グループの代表者1人が前に来る。
2. 「せーの」で欲しいカードを指さす。
3. 誰ともかぶらなかつたらもらえる。
4. かぶってしまったらじゃんけんして勝ったグループがもらえる。(負けたグループはもらえない)

ボーナスカードタイム

どのグループもカードが1枚もらえます。でもどのカードがもらえるかはわかりません。代表者1人が前に来てください。

グループごとに村の条件やゲットしたカードをみんなに発表しよう。

みんなで作ろうしあわせの国

めあて

自分達の住む国の生活をよりよくし、人々がよりしあわせになるためにどうしたらよいかを考えよう。



公正・公平

貧困 格差 平等 幸せ

多文化共生社会

みんなが幸せと感じる社会をつくるにはどうしたらいいですか?
どんな社会をつくりたいですか? どんな大人になりたいですか?

MINAKO OKUMURA



実践者	氏名	奥村 美奈子	学校名	神奈川県 横浜市立馬場小学校
	担当教科等	全教科	対象学年(人数)	2年4組(32名)
	実践年月日もしくは期間(時数)	2023年11月～12月(6時間)		

【実践概要】

【1】実践する教科・領域

道徳

【2】単元(活動)名

他国の文化に興味をもち、親しもう

【3】授業テーマ(タイトル)と単元目標

〈授業テーマ〉 **「もっと知ろう！ブラジルのこと！」**

〈単元目標〉 ○ブラジルの文化に触れることを通して、他国を知りたいという気持ちを高める。
○自分たちの文化とのちがいや他国のよさを見つけようとする態度を養う。

〈関連する学習指導要領上の目標〉 国際理解、国際親善(C-16) 他国の文化や人々に親しむこと

【4】評価の視点

1 多面的・多角的な見方へ広げる

他国の文化や文化に親しむための様々な考え方に気付いたりして、自分の見方・考え方を広げ、深めている。

2 自己を見つめ、考えを深める

他国の文化や文化に親しむことについて、学習したことをもとに、自分はどうか、どう考えるかなどを振り返り、考えを深めている。

【5】単元設定の理由・単元の意義(児童/生徒観、教材観、指導観)

【単元設定の理由】

きっと未来はもっといろいろな友達が教室にいることが当たり前の時代になっている。隣に座っている友達が、前に座っている同僚が、外国人や外国につながる人かもしれない。その時まで、

みんながいるいろいろな文化を受け止め、互いに認め合い、尊重できる人になって欲しいと願っている。ブラジルを通してそのような気持ちを育みたいと考え、本単元を設定した。

【単元の意義】

横浜市鶴見区の一部の地域では、ブラジルと深い関わりがある。同じ鶴見区に住む一人として、多文化が共生している地域について知り、ブラジルの文化を通して、他国について考えさせる。

【児童観】

横浜市の国際理解教育の一環として全校で行われている国際理解教室では、オーストラリア人のIUI(International Understanding Instructor)を迎え、オーストラリアの文化について理解を深めている。また、低学年から外国語活動を行っており、今年アメリカ人の外国語講師と交流してきた。学校外で英語を学習する児童も多く、これらの講師との授業では積極的に楽しく活動している。一方で、他の区と比べると学校全体でも外国につながる児童が少なく、自分とは異なる文化をもつ者との交流経験があまりない。身近にいる外国につながる友達のことを思い、興味をもち、知りたいという気持ちにつなげていきたい。

【指導観】

ブラジルという遠い国の馴染みのない文化について、いかに身近に感じ、主体的に取り組むことができるかという視点で学習課題を設定した。「ブラジル移民」という歴史的背景も大切だが、まずは国際理解教室で行っているような「文化」について知ることについて焦点を当てた。私自身が体験したブラジルのおもしろいところや日本とのちがいについてまとめた資料をもとに、音楽、図工、学活、体育など教科を横断して理解を深めていくこととした。

【6】単元計画(全6時間)

時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	道徳科 (気持ちのよい挨拶) 20. 「あいさつ」 っていいな	誰に対しても進んで、気持ちのよい挨拶をしようとする態度を育てる。	1.挨拶のよさを発表する。 2.『あいさつ』っていいなを読んで話し合う。 3.挨拶をしてよかった経験を発表する。 4.教師が作成した資料「あいさつのパワー」を読み、あいさつの良さを知る。 5.世界のあいさつに親しむ。あいさつは世界中の人々とコミュニケーションする上で欠かせないものだを知る。	教科書:東京書籍 「新しい道徳②」p.71-73 明治株式会社ホームページ 「比べてみよう!世界の食と文化」 世界のあいさつを比べてみよう
2	音楽	音を選んで合奏する楽しさを味わう。 ブラジルの楽器と日本の楽器のちがいを知る。	1.「マンボナンバーファイブ」を聴いて曲想を感じ取り、リズムにのって音楽活動を楽しむ。 2.ブラジルのサンバを聴き、どんな楽器が使われているか想像する。 3.ブラジルの楽器か和楽器か想像し、2つに分ける。 4.ブラジルの楽器の音を聴いて楽しむ。	教科書:教育出版 「小学音楽 音楽のおくりもの」 ロイロノートスクールシンキングツール

3	図工	工作にあらわす。遊ぶもの・仕組みから思い付いたものをつくる。 どんなものでも楽器になることに気付く。	1. 前時で活動したブラジルの楽器について想起させる。そこから造形的な見方・考え方を働かせ、様々な共通点や違いを感じながら作りたい楽器について考える。 2. 楽しいと感じた音や材料を使って、音の鳴る仕組みをつくる 3. ブラジルのサンバの音楽に合わせて音を鳴らし、つくったものの楽しさや面白さを味わう。	教科書：日本文教出版「ずがこうさく」
4	学活・体育	ブラジルの遊びを通して日本とブラジルの遊びのちがいに気付いたり、楽しんだりする。	1. 「ブラジルじゃんけん」の仕方を覚え、ペア→グループ→全員で楽しむ。 2. 「Batata quente (バタータケンチ)」 “熱いじゃがいも”の意味で、日本の爆弾ゲームと似ている遊びを楽しむ。 3. ブラジル版「ホップスコッチ」日本のけんけんばを楽しむ。 →体育「跳の運動遊び」につなげる。	「ブラジルと出会おう」 谷 啓子 (著) 富本潤子 (著)、 IAPEポルトガル語教室 (著)
5 本時	道徳科	すごろくゲームを通して、ブラジルのことを知り、おもしろいと思ったことや日本とちがうところを見付ける。	1. すごろくのルールを確認する。 2. 4人グループですごろくを行う。 3. ブラジルのことでおもしろかったことや、日本との違いについて気付いたことを書く。 4. 海外でどうやったら仲良くなれるか考える。 5. 書いたことを共有する。	タブレット端末 ロイロノートスクール ワークシート
6	道徳科	日本に暮らす外国人の生活を想像する。	1. ブラジルと日本の関係など、時代背景について簡単な説明を聞く。 2. 「ぼくは、カウアン」を読んで、主人公はどんなことを考えながら過ごしているか話し合う。 3. 日本に住んでいる他国の人々に思いを寄せ、自分ができることは何かについて考える。	「ぼくは、カウアン」 文芸社 たかまつ ようこ (文) ウミノ カズコ (絵) タブレット端末 ロイロノートスクール ワークシート

【7】本時の展開(5時間目)

本時のねらい

「他の国のことを知りたいな」「他の国の人と仲良くなりたいな」等という気持ちをもって、ブラジルの文化に触れることを通して、更に他国のことを知り、進んで親しもうとする気持ちを高める。また、自分たちの文化とのちがいやよさを見つけようとする態度を養う。

過程・時間	教員の働きかけ・発問 および学習活動・指導形態	指導上の留意点 (支援)	資料 (教材)
導入 (5分)	1. これまでの学習の振り返りをする。 ・これまでブラジルのことについて学習したことは何か想起させる。 2. 本時の見通しをもち、めあてを確認する。 ・すごろく「ブラジル生かつゲーム」を通してブラジルの生活を疑似体験する。	・モニターにこれまでの学習過程の映像を映し、思い出せるようにする。 ・ブラジルのことをもっと知ろうとする意欲を高める。	ワークショップ作りで考えたすごろく「ブラジル生活ゲーム」 タブレット端末 ロイロノートスクール
ブラジルのことを知って、おもしろいと思ったことや、日本とちがうところを見つけよう！			
展開1 (25分)	3. すごろくのルールを確認する。 ●4人グループで行う。 ●スタート位置にはじきのコマを置き、全員で「Vamos!」と言って始める。 ●マスに止まったら、必ずそのマスの説明を読む。(ビデオマークは動画が見れるマスなので必見!) ●マスの下に書いてある指示に従う。 ●全員でストップするマスに止まったら、教師を呼び、ひみつのクイズを受け取る。	・マスの内容に注目するように、写真や動画を用いて視覚的な工夫を施す。 ・ルールが分からない児童がいないか随時机間指導を行う。	
展開2 (10分)	4. ブラジルのことでおもしろかったことや、日本とのちがいについて気付いたことを書く。 ・もしも、自分が海外へ行ったら、どうやったら仲良くなれるか考える。 ・書いたことを全体で共有する。	・ロイロノートで振り返りを行う。手書きがよい場合は、紙のワークシートを用意する。	タブレット端末 ロイロノートスクール ワークシート
まとめ (5分)	5 友達と振り返りを交流し、更に考えを深める。 ・ブラジル以外の国の人々に目を向け、仲良くなりたいなという気持ちで交流してきたかよく考える。	・実践への意欲をもてるように次時への活動に目を向けさせる。	

【8】評価規準に基づく本時の評価方法

1 多面的・多角的な見方へ広げる

- ・他の国の人と仲良くなりたい、自分の国のことを伝えたい」という考え方を引き出し、意見を出し合っている。
- ・仲良くなると、「もっと他の国のことや人が好きになり。知りたくなる」というよさに気付いている。

2 自己を見つめ、考えを深める

- ・他国の人々や文化に親しむことについて、学習したことをもとに、自分はどうかだったか、どう考えるかなどを振り返り、考えを深めている。

【9】学習方法及び外部との連携

- JICA 横浜の図書館で借りた本を学級文庫とともに展示し、「知りたい」意欲を高めてきた。そのうち学校の図書室でブラジルのことが書いてある本を選んで読む児童も増えた。
- すぐろくのマス一つ一つに注目して進められるよう、タブレット端末1台を各グループに用意させ、マスの説明書きを端末で見れるようにした。その際、文字よりも写真や動画を多く入れることで、マスの意味を容易に想像したり、理解したりすることができた。
- 音楽の授業でブラジルの楽器を紹介する場面では、本物の楽器をどこかで借りることができればなおよかったと思う。

【10】学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

- 学校内では、道徳・人権週間とつなげて「みんな知ってる？鶴見区のこと」と題して、横浜市鶴見区の多文化共生している地域の話や、ブラジルと日本の歴史的背景や日系移民、教師海外研修で体験したことを全校朝会で伝えた。また、その時の資料を児童が見れるように学校掲示板に掲示した。
- 授業実践を行うにあたり、学年内の他の3クラスですごろくを使って授業を行った。その際、ブラジルと日本の関係などを簡単に説明し、実践に向けて少しずつ調整していった。
- 土曜参観で次時の道徳の授業を行った。保護者が見守る中、ブラジル移民についての説明を前振りで行った。
- 学級懇談会の時に、保護者から要望があったので教師海外研修で体験したことについてスライドを作成して伝えた。

【自己評価】

【11】苦勞した点

低学年児童にブラジルのことを、すぐろくを通して理解してもらうにはどうしたらよいか悩んだ。一番伝えたい「日系移民」のことをマスに入れるなら、歴史的背景を説明する時間が必要だったが、低学年には難しいと判断し、全校朝会で伝えるまでに留まった。身近に海外につながる友達が少なく、今後交流していくために、学習したことをすぐに実践していくことが難しい状況も否めない。

【12】改善点

原本のすぐろくは、マスが昔のことと、最近のことが混在したり、時系列にならなかつたりしていたのでマスを調整したり、一つ一つのマスの内容を理解させるための説明や写真、動画を入れたりなど、学級の実態に応じて調整する必要がある。また、マスの内容については、日系移民の昔と今、現代のブラジルの生活、動物、食べ物、スポーツなど歴史と文化を区別したすぐろくを作ると分かりやすく、より身近なものになると思った。

【13】成果が出た点

多教科に渡り、ブラジルの文化と結び付けて学習を進めることで、児童が国際理解を身近なものに感じることはできたのではないかと考えている。すぐろくでブラジルのことを知るきっかけとなり、朝会で話した内容などつなげて直接質問しに来る児童も少なくなかった。全校朝会で話した内容を掲示することで、立ち止まって読んでいる児童や教職員を見かけ、興味を持ってもらえたと感じている。また、保護者から子どもがブラジルやSDGsと関連させて海外に興味をもち始めるきっかけになったという声があった。

【14】学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）

【児童の振り返りからの抜粋】

ブラジルの公用語のポルトガル語や、サンバなどを生活に取り入れると、子どもたちの方から自然と「ボンジーア！（おはよう）」と言いついていたり、サンバの音源を見つけてきてリズムにのったりしていた。ブラジルという国を通して、他の国の人々や文化を好きになり、もっと知りたいという意欲を高めるきっかけになった。



KOTA TAKEI



実践者	氏名	武井 昂太	学校名	神奈川県川崎市立梶ヶ谷小学校
	担当教科等	全教科	対象学年(人数)	特別支援級 6年生(4名)
	実践年月日もしくは期間(時数)	2023年11月(4時間)		

【実践概要】

【1】実践する教科・領域

道徳

【2】単元(活動)名

「近くて遠い国」

【3】授業テーマ(タイトル)と単元目標

〈授業テーマ〉「遠くて近い国」

〈単元目標〉 困難に負けず、生活の中に楽しさや希望を見出そうとした移民の方々の生活の様子を知り、そのたくましい生き方に感動する心を育むとともに、移民政策をきっかけとし、深いつながりをもつブラジルに関心を持ち、これからもそのつながりを大切にしようとする心を育むこと。

〈関連する学習指導要領上の目標〉

内容項目 C(18)国際理解、国際親善 D(21)感動、畏敬の念

【4】単元の評価規準

自己を見つめる

- 現在の自分自身の暮らしぶりとの違いに気づき、自分が移民をする立場になったならばどのように感じ、何を思うかを考える。【感動・畏敬の念】
- 学習したことや今までの自分の言動を振り返ってブラジルとのつながりについて考えをまとめる。【国際理解・国際親善】

【5】単元設定の理由・単元の意義(児童/生徒観、教材観、指導観)

【単元設定の理由】

今地球上には、世界規模で考えていくべき紛争やエネルギー・環境上の課題がある。また、今後はますますヒト、モノ、カネが活発に行き交う社会になってくる。そのような国際社会を生きていくにあたって子ども達には世界のこと、各国のことに関心を持ち、それらを尊重する態度を身につけてほしいと考え、単元を設定した。

【単元の意義】

その育成をする上でまず着目すべきなのは自国と他国の間にある共通点と相違点だと考えた。共通点は一見関係のなさそうな国であっても身近に感じ、関心をよせるきっかけになるだろう。相違点は自国にはない尊重されるべき魅力である。国際理解教育を今年度初めて行う本単元では、ブラジルとの共通点に着目し、身近な国の一つと感じられるようにすることで、世界やさまざまな国々に関心をもつきっかけとしていきたい。

【児童/生徒観】

本学習に参加をした子どもたちとともに学習をするようになって2年目を迎えた。昨年度の前期は非常勤講師として関わった。後期になると私はインターンとしてルワンダ共和国に行き、現地と本校とをリアルタイムで繋ぎ、オンラインでルワンダを題材に国際理解教育を行った。現在改めて本校に着任し、担任として関わっている。

ルワンダからの国際理解教育を行って以来、ルワンダは子どもたちにとって最も身近な国の1つとなるとともに、海外に高い関心を示すようになった。その証拠に今でも何気ない会話の中にふとルワンダのことが出てきたり、地球儀を眺めたりする児童が多数いる。今回ブラジルという全く別の国を扱うことで、子どもたちは世界の多様性に気付くとともに、世界に関する関心がより一層高まっていくだろうと考えている。

【指導観】

教材について

①「ハルとナツ 届かなかった手紙」 NHK 総合テレビ

この教材は当時のブラジル移民の方々の実情をよく調べ上げた上で描かれたドラマである。主人公はブラジルに向かう当時小学生だった2人姉妹の姉である。年齢が近いため児童にとっては感情移入がしやすいはずだ。ナレーターによる説明や俳優の方の迫真の演技により、当時の時代の様子がありありと表現されているため、移民という歴史的事象に出会わせる上で写真や文字資料よりも非常に効果的な資料になると考える。

②「移民すごろく」

日本出発から帰国までの出来事を表したマスのできる限り時系列で並べた。こうすることで自分自身が移民としての生活を送っているような疑似体験をし、彼等の心の内に迫ることができるのではないかと考えた。マスの内容は移民に関することだけに絞ることで「移民の生活の様子について学ぶ」という目的意識をもって取り組めるように工夫した。

【6】単元計画(全4時間)

時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	「遠くて近い国」	写真や動画をもとに課題を見出すことを通して、学習への関心を高めるとともに、見通しをもつことができる。	<ul style="list-style-type: none"> ○世界の祭りの動画を見て、どの国の祭りかを考える。 ○マナウスの盆踊りの写真や動画を見てどこが日本に似ていると思ったのかを考える。 ○日本に馴染みのあるものがブラジルではたくさん見られることを知り、もっと知りたいと思ったことについて考える。 ○なぜブラジルには日本に馴染みのあるものがたくさんあるのか考える。 ○振り返りを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スペインのトマト祭り、タイのコムローイ祭り(YouTube)、マナウスの盆踊り(授業者撮影) ・ワークシート
2 本時	「遠くて近い国」	自分自身がブラジル移民になったつもりで生活上の苦労や努力について考えることを通して、そのたくましい姿に感動する心情を育む。 【感動・畏敬の念】	<ul style="list-style-type: none"> ○前時のふりかえりをする。 ○移民という人々について紹介する。 ○移民すごろくを行う。 ○なぜブラジルには日本に馴染みのあるものがたくさんあるのか考える。 ○移民の人たちの生活の様子や生き様について知り、心に残ったことをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の内容をまとめた掲示物 ・移民すごろく ・「ハルとナツ」 ・ワークシート
3	「遠くて近い国」	写真を通して、日本とブラジルとの文化的なつながりや共通点に気づき、ブラジルに関してより一層関心をもつことができる。	<ul style="list-style-type: none"> ○前時のふりかえりをする。 ○写真をもとにどのようなつながりが生まれているのかを考える。 ○ふりかえりを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の内容をまとめた掲示物 ・写真 ・ワークシート
4	「遠くて近い国」	歴史的、文化的、経済的に強いつながりのあるブラジルとの関係をこれからも大切にしたいという心を育む。 【国際理解・国際親善】	<ul style="list-style-type: none"> ○前時のふりかえりをする。 ○それぞれの資料がどのようなつながりを表しているのかを考える。 ○国同士のつながりが大切な理由を考える。 ○ふりかえりを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の内容をまとめた掲示物 ・ワークシート ・写真

【7】本時の展開(2時間目)

本時のねらい

自分自身がブラジル移民になったつもりで生活上の苦労や努力について考えることを通して、そのたくましい姿に感動する心情を育てる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入(8分)	<ul style="list-style-type: none"> ○前時のふりかえりをする。 ○移民という人々について紹介する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習をまとめた掲示物への着目を促し、記憶を喚起する。 ・「どのような人々が日本文化をブラジルに持ち込んだのか」という前時に見出した課題解決の見通しがもてるようキーワードを示す。 ・前時に見出した課題の解決のためにすごろくを行うことを見直し確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の内容をまとめた掲示物 ・「ハルとナツ」
展開(22分)	<ul style="list-style-type: none"> ○移民すごろくを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・移民の方々の暮らしを知って感じたこと、思ったことを適宜問い、板書する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・移民すごろく
まとめ(15分)	<ul style="list-style-type: none"> ○なぜブラジルには日本に馴染みのあるものがたくさんあるのか考える。 ○移民の方々の生活の様子や生き様について知り、心に残ったことをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・移民の方々が日本文化をブラジルに持ち込んだことがわかるまですきた時に問う。 ・一面的な考え方をしている場合には問い返し、多面的に考えられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート

【8】評価規準に基づく本時の評価方法

自己を見つめる

現在の自分自身の暮らしぶりとの違いに気づき、自分が移民する立場だったらどう感じ、何を思うかを考える。

【9】学習方法及び外部との連携

グループに一枚、拡大したすごろくを配付することで、止まった場所と説明を互いに共有できるようにする。また、互いの物理的な距離感を近くすることで自然と会話が始まるようにし、考えを広げたり深めたりできるようにする。

【10】学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

6年生の社会科では日本とつながりの深い国の人々の生活について学習する。その際、資料を提供したり、実際に授業を行ったりする予定。

【自己評価】

【11】苦勞した点

授業を行うにあたって、どの教科に位置付けて授業を構想するか大変苦心した。一般に選択肢は「社会」「外国語」「総合的な学習の時間」そして「道徳」だと考える。しかし、私が所属する自治体では「道徳」に絞られると言っても過言ではない。「社会」で行えるのは6年生担任のみだし、「外国語」は専科の先生が授業を行う。「総合的な学習の時間」は、各校、各学年ごとに扱う題材は決まっているから、一担任の思いで国際理解教育を扱うことは容易ではないのである。したがって今回は「道徳」で行った。しかし、「道徳」には「道徳」の目標があるため、国際理解教育への思いが増せば増すほど、「道徳」の目標から離れていってしまう難しさを感じた。以上のような難しさから「道徳」の学習ではあるが、1時間で授業を構想するのではなく、記録に残す評価を行わない時間を含めた、単元で授業を構想することとした。

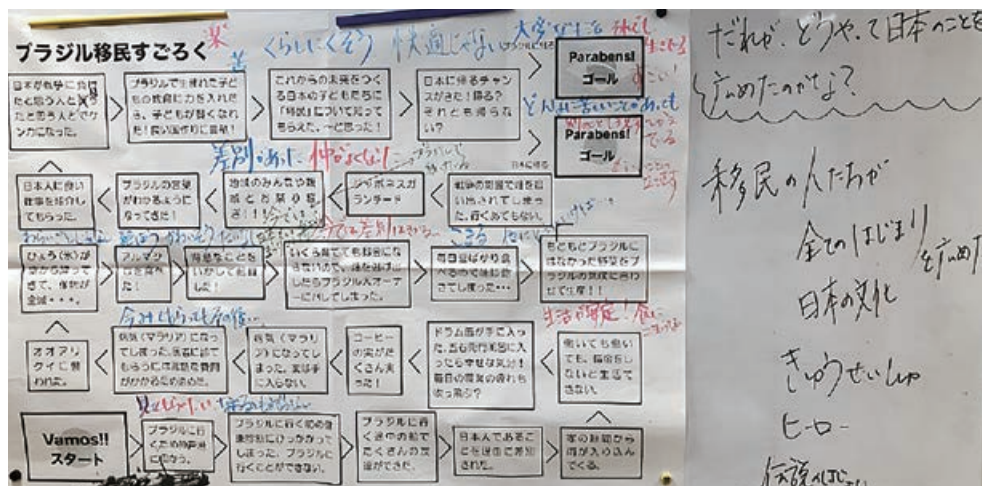
【12】改善点

日本との相違点についても扱わなければならなかった。そして、それらにはブラジル独自の文化や習慣、考え方、願いや歴史などが詰まっていた、尊重されなければならないものだと感じられるようにしなければならなかった。しかし、本単元を構想するにあたって、移民の方々の生き様を中心として扱いたいという思いがあったため、これら2つを1つの単元として構成することが難しかった。

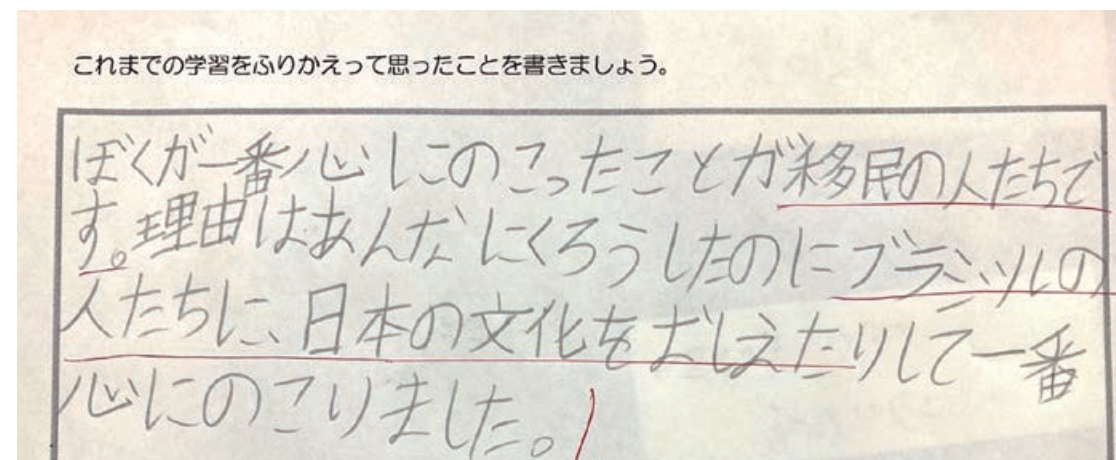
【13】成果が出た点

子どもたちから「この学習もっと続けたいです」「次に国際理解教育をするのはいつですか」という声が聞かれた。ブラジルへの興味関心が高まったことがうかがえた。また、「別の国についても勉強したいです」という声も聞かれたし、実際に休み時間、自らインターネットでその他の国について調べ、ノートにまとめる児童も複数いた。ブラジルをきっかけに、その関心を世界に広げる子どもたちも出てきたことがわかる。

【14】学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）



↑すごろくの時の児童のつぶやきや意見を板書したものの。まずに止まるたびに、その説明と関連する「ハルとナツ」のシーンを見た。過酷な様子がわかりやすく描かれているため、子どもたちも「絶望的な気持ち」「かわいそう」などという言葉で、移民の方々の苦勞を表現していた。そこで、「そんな中で今でも愛される品質の良い野菜や果物を育てたってことだよな?」「大変なことたくさんあったと思うけど、仲間たちと日本の行事や遊びを行った時ってどんな気持ちだったと思う?」と問い返した。すると、「移民の人たちは救世主ですね!」「苦しさに負けていないからすごい!」と多面的に考え始め、本時でねらった【感動・畏敬の念】へと向かっていった。



↑子どもの単元の振り返り。移民の方々について知ることを入り口とし、ブラジルという国や世界に関心を広げてほしいと願って構想した単元だった。そうは言いつつも、児童の振り返りを分析すると、やはり授業者自身が一番思いをもって扱った場面が子どもたちの印象に残るのかもしれないと思った。もしくは、ワークショップを行うことで楽しみながら学んだからこそ、この場面での学びが印象に残ったのかもしれない。

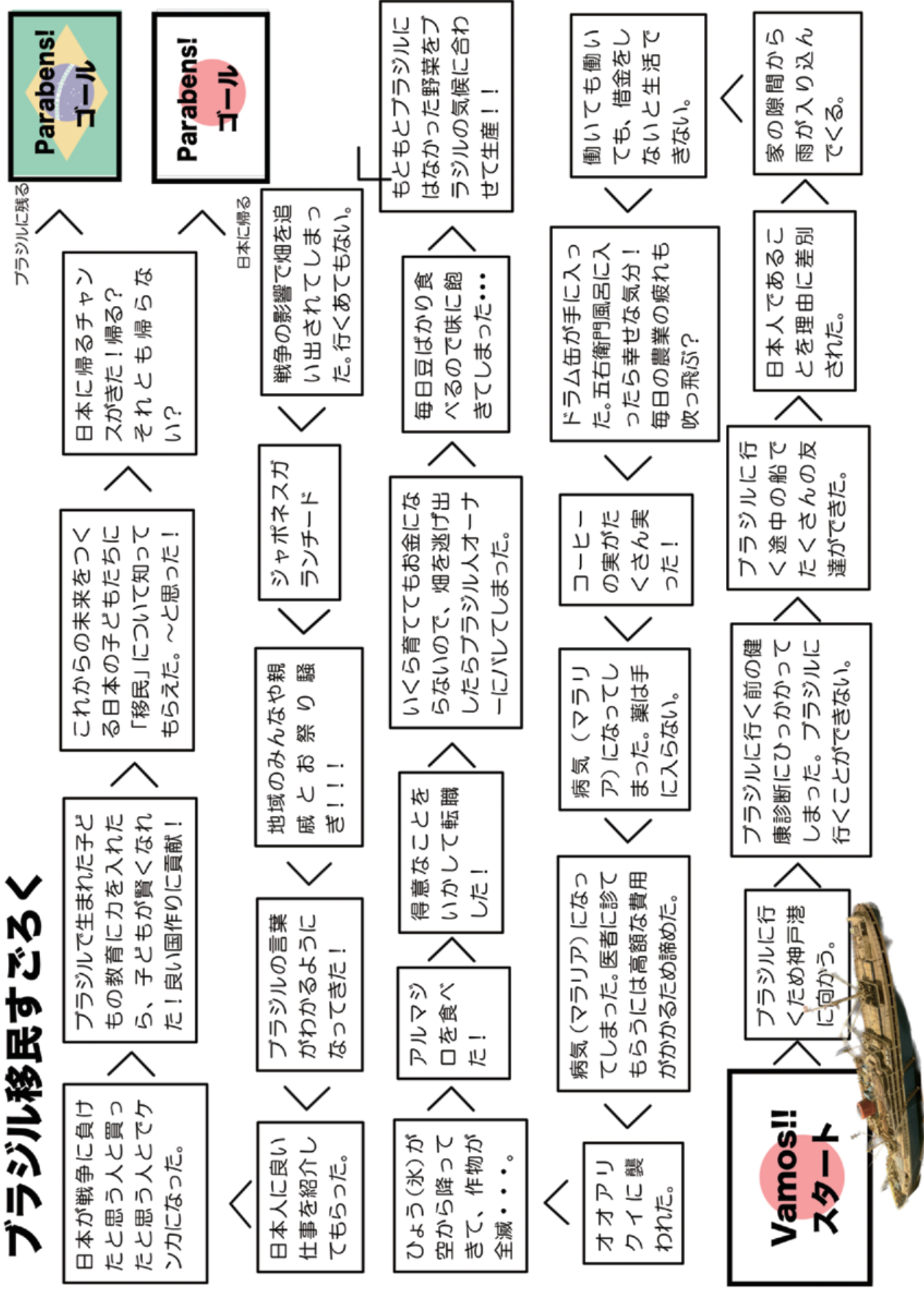
【15】授業者による自由記述

「11. 苦勞した点」で述べたとおり、国際理解教育を小学校の現場で行うことには難しさがあるかもしれない。とりわけ、学習指導要領に基づいて、教科学習の中にワークショップを位置付けるとなると私自身は頭を抱えた。しかし、子どもたちは関心をもち、知的好奇心がすぐられる中でこそ真に学んでいくものだと考えると、「14. 学びの軌跡」でも述べたとおりワークショップは可能性を秘めた学習手段だとも思う。拙い実践ではあるが、参考にしていただき、より実践の叩き台となるならば幸甚の至りである。

参考資料：JICA 横浜ライブラリーの資料多数
JICA 横浜海外移住資料館の写真
「ハルとナツ 届かなかった手紙」NHK 総合テレビ

別添資料：授業で使用したすごろく台紙

ブラジル移民すごろく



SHOMA MOTO

実践者	氏名	本 祥馬	学校名	山梨県忍野村立忍野小学校
	担当教科等	全教科	対象学年(人数)	5年3組(27名)
	実践年月日もしくは期間(時数)	2023年11月17日(1/2時間)		

【実践概要】

【1】実践する教科・領域

特別活動

【2】単元(活動)名

よりよい人間関係の形成

【3】授業テーマ(タイトル)と単元目標

〈授業テーマ〉 **「多文化共生」**

〈単元目標〉 学級や学校の生活において互いのよさを見付け、違いを尊重し合い、仲良くしたり、信頼し合ったりして生活するために自分ができることを探することができる。

〈関連する学習指導要領上の目標〉

(1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。

【4】単元の評価規準

1 知識及び技能

ブラジルに渡った、日系人の喜びや苦勞を知ることができる。

2 思考力、判断力、表現力等

日系人について理解を深め、日本にやってくる外国人について考えることができる。

3 学びに向かう力、人間性等

日系人への思いをはせ、日系人の喜びや葛藤を考え続けることができる。

【5】単元設定の理由・単元の意義（児童/生徒観、教材観、指導観）

【単元設定の理由】

私が勤めている学校は、山梨県の忍野村という所にある。忍野村は外国から観光客がよく来る土地であるために、子ども達は外国人と出会う機会が多くある。さらに、学校内には外国籍の児童、外国にルーツのある児童が多く、私のクラスには3人いるので、互いの違いを理解して尊重し合い生活できるようになってほしいと思ったから本単元を設定した。

【単元の意義】

子ども達同士がお互いの文化や価値観の違いを知り、認め合いよりよい生活をするためにどうしていくとよいかを様々な立場から考えることができる。

【児童観】

本学級は、男子14名、女子13名の計27名在籍している。誰とでもすぐに仲良くなれる元気な子どもが多く、笑顔が多いクラスである。自分の気持ちを伝えることができるようになってきている。一方で、何気ない一言、冗談に悲しむ子ども達も見受けられるようになってきた。自分の気持ちを表現することについては、上手とはいえない状況にある。

【指導観】

ワークショップのブラジル生活ゲームを通して、日本人がブラジルに渡った時の喜びや、苦勞を知ることで、日本に來ている外国人がどんなことに喜びや、苦勞するのか想像できるようになり、違いを認め合う心構えができると考える。自分の気持ちを上手に表現できるような環境を作りたいと考え、本実践を行った。


【6】単元計画（全2時間）

時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1 本時	ブラジル生活ゲーム	ブラジルに渡った日系人の喜びや苦勞をスライドやすごろくを通して、知ることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ブラジルに渡った日系人の喜びや苦勞をスライドやすごろくを通して、知る。 印象に残ったマスについて理解を深める。 	ブラジル生活ゲームのゼット
2	日本生活ゲーム	前回のすごろくを通して、これから日本にやってくる外国人の喜びや苦勞について考え、日本に來た外国人版のすごろくを作ることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 日本にやってくる外国人がどんなことに喜びや苦勞を感じるのか考える。 日本版のすごろくを作る。 	ジャムボードのデータ

【7】本時の展開（1時間目）

本時のねらい

ブラジルにおける、日系移民の喜びや苦勞をスライドやすごろくを通して、知ることができる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5分)	1.いつから日本人がブラジルへ移り住んだのかクイズに答える。 ■50年前 ■10年前 ■100年前 2.ブラジルまで、船で何日かかるかクイズに答える。 ■30日 ■60日 ■90日	<ul style="list-style-type: none"> いつから日本人がブラジルへ移り住んだのかクイズをする。 ブラジルまで船で何日かかったクイズをする。 	スライド資料
めあて：ブラジル生活ゲームを通して、ブラジルでの生活について考えよう			
展開 (30分)	3.ブラジル生活ゲームのルールを知る実際にすごろくをする。 マス目で驚いたことや、初めて知ったことをプリントに書く。 試しにサイコロを2つ使ってルールを確認する。 ・コマがすべて同じだと、ブラジルに行った人が全員同じになってしまう。 ・コマに性格を付けたい。 4.どの属性のコマが一番早くゴールに行けるか考えコマを選ぶ。 コマの属性 ①お金がある ②現地語（ポルトガル語）が話せる ③現地に知り合いがいる。 ④誰とでも仲良くなれる ⑤体がじょうぶ ⑥メンタルが強い	<ul style="list-style-type: none"> ブラジル生活ゲームをさせる ルール説明をする。 すごろくをしながら、驚いたことや、初めて知ったことをワークシートに書かせる。 1回目のブラジル生活ゲームのルールに付け加えたいことを考えさせる。 コマに属性を付けて2回目のブラジル生活ゲームをさせる。 属性によって、マス目の見方や考え方が変わってくる。一回休みや、2マス進むなどの詳しいルールについては、グループで相談して全員が納得したら次に進めると伝える。 1分以内に決まらない場合は、じゃんけんまたは、基のすごろくのルールに従ってコマを進めさせる。 ブラジル生活ゲームを通して感じたこと、考えたことをプリントに書かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> サイコロ すごろく すごろくの目的資料 コマ コマの属性の説明用紙 プリント
	 <p>病気で入院するマスに、「体がじょうぶ」な人が止まったら、すごろくには、一回休みというルールだがグループで相談して、休みなしにするなど</p> 		

まとめ 10分	<p>5. 振り返る</p> <ul style="list-style-type: none"> • プリントを見て、驚いたこと、初めて知ったことを書く。 • ブラジルに渡った日本人がいることを初めて知った。 • 食べ物に苦労があったことを初めて知った。 <p>6. 資料を見て感じたことを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 日本に来ている外国人が増えている。 • 日本で苦労している人々がいるかもしれない。 <p>7. 次回の確認をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 『令和2年国勢調査 人口等基本集計結果からみる我が国の外国人人口の状況』から感じたことを発表させる • 日本に来ている外国人がどういう喜びや苦労を感じているかを考え、日本バージョンのすごろくを作ることを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> • 日本に来ている外国人の統計資料『令和2年国勢調査 人口等基本集計結果からみる我が国の外国人人口の状況』
------------	---	--	---

【8】評価規準に基づく本時の評価方法

- ブラジルに渡った、日系人の喜びや苦労を知ることができる。
- 日系人について理解を深め、日本にやってくる外国人について考えることができる。
- 日系人への思いをはせ、日系人の喜びや葛藤を考え続けることができる。

【9】学習方法及び外部との連携

学習方法は、ワークショップを行う時や、話し合いをする時には、4人1グループで考えさせるようにしていた。4人で考えさせることで、話し合いが活発に進むような感覚があります。ただし、しっかりと自分の考えを出した上で話し合いをすることが大切だと思っています。

外部との連携は、特にありません。

【10】学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

学校内では、ワークショップを学年の他のクラスでも行いました。同じ学年でも、クラスが違っていると考え方が違ったり、感じ方が違ったりして、教材の使い方や、問いかけの質を上げていきたいと感じることができました。また、校内で授業実践を広めることができているが、様々な学年の実態に沿って道徳の授業や、総合的な学習の時間などを使い、国際理解教育や、多文化共生について考える機会を設けたいと考えています。

【自己評価】

【11】苦労した点

ブラジルに渡った日本人に対して、大変や、かわいそうという気持ちを考えることができる子ども達は多くいたが、ブラジルに渡った日本人の喜びについては考えるのに時間がかかったり、見つけることができない子ども達が多かった。すごろくを楽しんで終わりと思ってしまう子ども達を引き付けることに苦労した。振り返りの時に、子ども達に自分事としてとらえられるような発問を考えることが大変だった。

【12】改善点

すごろくをするのに時間がかかってしまったので、ルールを簡素化したり、双六の目の数を減らしたりすると、振り返りの時間をしっかりと確保できると思った。また、目の説明のスライドの情報が多く読むのに時間がかかってしまった。もっと端的にスライドを作ったほうが良かった。

【13】成果が出た点

すごろくで、ブラジルに行った日本人の生活を体験することで、楽しみながら歴史や、ブラジルとの関わりを知ることができていた。属性を付けることで、グループでの会話が広がり、思いを伝える機会が増えた点良かった。また、日本版のすごろくを作成する時には、外国人がどんなことに喜びのか、苦労するのか、想像することができた。違いを知り、認め相手の立場を想像することが何よりも大切だということに気が付いた姿が見られた。

【14】学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）

子ども達の振り返りシートより

ブラジル生活ゲームを終えてのコメント

- ブラジルに移住した人は色々な苦難に耐えながらも生活していたのがすごいと思った。
- 昔、日本人がブラジルに60日かけて移住したことに驚いた。
- ブラジル移民はとても貧しい生活をしてたということを知りました。私は、ブラジル移民よりとてもいい暮らしをしているので、とてもびっくりした事が多かったです。
- 自分が経験した中では、1回もなかった事だし、想像もしないことでびっくりしたけどたくさん知れて楽しかった。

「統計資料を見て、今後どうしていきたいか」という問いに対しての反応

- 海外からくる人達に対して言葉が通じなくても分かるうとする気持ちが大切だと思います！
- 様々な人と一緒に過ごすことは、自分も学べるということで大切だと思います。
- 外国人だからって差別せずに日々の生活を送ることを大切にしたい。
- 外国人がきたら色々なことを教えたいと思います。

【15】授業者による自由記述

ブラジルでの教師海外研修は、とても刺激的で、自分自身の引き出しを多くすることができたと感じています。教師海外研修に行ってもいいと許してくれた学校には感謝しかありません。ワークショップを作るのは、大変でとてもきつかったです。しかし、一緒にブラジルで研修を受けたメンバーと、取り留めのない話をするとはとても、面白かったです。

以前は当たり前という言葉嫌いでした。でも、文化も言語も違うブラジルに行って感じたことは、人って違って当たり前なのだということでした。人と違うことを恐れずに話をするのがとても大切だと感じます。この研修を通して、また授業実践を通して、「問い=答え」ということが身に染みて感じました。問いの質を上げるために多くの違和感を大切にしていきたいです。その違和感をポジティブに伝え合える世の中になってほしいと感じています。そのためにも、私自身が違和感をポジティブに捉えられるような地球人になりたい強く考えています。

- 参考資料：
 ・『令和2年国勢調査 人口等基本集計結果からみる我が国の外国人人口の状況』
 ・授業で使用したワークシート

ブラジル生活ゲーム①
5-3 ()番()

めあて：ブラジル生活ゲームを通して、)での生活について考えよう。

1. ブラジル生活ゲームをして、印象に残ったマスのベスト3は何ですか。マスの番号と、マスの内容を書こう。

() _____
 () _____
 () _____

2. 日本のどんな所に外国人は喜びを感じ、どんなことに苦労するか、調べてすごろくを作ろう。

理由 _____
 理由 _____
 理由 _____

3. 今日の学習を通して、考えたことはなんですか。

4. 最後の統計資料を見て、どう思いましたか。

1



Earth

2



Earth
Earth
Earth

3



BRAZIL
São Paulo
サン・パウロ
Manaus
マナウス

4

クイズ① 日本からブラジルに渡った人々がいます。いつ頃でしょう？

① 1997年
② 1987年
③ 1908年

5

クイズ② ブラジルへは何日かかったでしょうか？

① 60日くらい
② 7日くらい
③ 45日くらい

6

今日は、ブラジルに行ってみましょう！！

今日の合言葉は、、、、

もちろん バモス！！！！

7



8

ブラジル到着〜〜〜！！！！



9

めあて
ブラジル生活ゲームを通して、ブラジルの生活について考えよう。

10

統計資料
次の資料を見て気づくことは何ですか。



令和2年国勢調査
人口等基本集計結果からみる我が国の外国人人口の状況

11

今後日本は・・・

- ・海外からくる人々が多くなるのが予想される。
- ・日本が好きで来たり、日本のことを勉強したいと思って来たり、稼ぎに来たりと様々な思いで来ている。

12

様々な人々が来た時、どうしていきま
すか

今日のすごろくを通して感じた、「え。」「初めて知った」「そんなことがあるんだ〜」「日本とちがう」を大切に

ちがう所があることは、生まれ育った環境や、文化がちがう。

だからこそ、「へ〜、そうなんだ〜」という興味を持って過ごしていくこと大切。

YASUKO MORITA



実践者	氏名	森田 靖子	学校名	神奈川県横浜市立神橋学校
	担当教科等	全教科	対象学年(人数)	6年2組(32名)
	実践年月日もしくは期間(時数)	2023年11月8日(3時間)		

【実践概要】

【1】実践する教科・領域

道徳「国際理解・国際親善」(相互理解・寛容)

【2】単元(活動)名

「みんなで作ろう幸せの村」

【3】授業テーマ(タイトル)と単元目標

〈授業テーマ〉「みんなで作ろう幸せの村」

〈単元目標〉自分たちの村が幸せになるために必要なものや村づくりの話し合いを通して、発展のために必要とする物が人によって違うことに気づき、社会の発展の仕組みについて考える態度を育てる。

〈関連する学習指導要領上の目標〉

日本人としての自覚や誇りを持ち、進んで他国の人々とつながり、国際親善に努めようとする態度を育てる。

【4】単元の評価規準

- 自分たちの村に必要な施設や物をかんがえることができたか。
- 他の村の状況を聞いて、自分たちでできることは何かを想像することができたか。
- 村から国に考えを広げた時に、社会の仕組みについて考えることができたか。

【5】単元設定の理由・単元の意義(児童/生徒観、教材観、指導観)

【単元設定の理由】

本単元は、道徳の「国際理解・国際親善」の単元に基づいて設定した。本学級には外国籍の児童が在籍することや日本語が話せない児童が体験入学するなど国際理解に関わる環境が必要であった。積極的に英語を使って会話したり、インターネットを使ってその児童の国について調べてみるなど、関わる事ができていた。これが、国際理解の一步だと考えているが、もっと深く興

味をもち、自分事として考えることはできないか考えた。日本のよさ、日本以外のよさを知ること、自分の幸せはどうやってつかんでいくのかを、自分と向き合って考えほしいと単元を設定した。

【単元の意義】

「幸せ」を考えるときに、まずは自分だけの幸せを考える。今回の活動は、自分たちの村の幸せを考え、必要なものや施設を勝ち取ることからスタートする。じゃんけんで勝つことでしか必要なものや施設をもらうことができない。話し合いではなくじゃんけんなので運次第。不公平感が生じる。この不公平感から、児童が自分だけではなく、周りの村の状況を考え、どうすればよいか考える。村から国、そして自分の住んでいる町、国はどうなのかと視点を広げることが大切であると考えている。

【児童観】

本校では国際教室があり、様々な国にルーツをもつ児童が増えている。また、本学級では、外国籍の児童が在籍していること、日本語以外に中国語・英語を話せる児童がいること、日本語が話せない児童が入学するなど国際色豊かである。海外旅行や海外で生活していた児童もいることから、日本以外の国について知識のある児童も多い。しかし、日本語が話せない児童がいても、自分から積極的に関われる児童はあまりいない。日本以外の国や世界に興味をもち、自分の国への誇り、自信をもって多くの人に関わってほしいと思っている。

【指導観】

本学級には、外国にルーツをもつ児童が多いことが児童にとってよい経験であると捉えている。このことを、児童にも伝えていきたい。自分の国のことを知ること、友達の国のことを知ること、そして、もっと仲良くなるためにはどうしたらよいか考えること、意見が合わなかったときにどうやって解決していけばよいかを考えられるようになってほしい。これは、児童が大人になってからたくさんの人と関わった時に、活かせる経験であると考えている。違った価値観を受け入れる、視野を広げることで考えを広げることができるのがこれから生きる児童には必要だと考えている。

【6】単元計画(全2時間)

時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	「エンザロ村のかまど」	日本人としての自覚や誇りを持ち、進んで他国の人々とつながり、国際親善に努めようとする態度を育てる。	1.日本にはない問題で苦しんでいる他国の状況について知っていることを発表する。 2.「エンザロ村のかまど」を読んで話し合う。 ◎岸田さんは、どんな思いからエンザロ・ジコを考え出したのでしょうか。 3.国際理解や親善を自分の問題として考える。 ○困っている外国の人々を手助けするために、あなたはどんなことをしていきたいですか。 4.世界の人々のために活躍する(活躍した)人物について、教師の話聞く。	ワークシート

2 本時	「みんなで 作ろう幸せ の村」	自分たちの村が幸せになるために必要なものを考えることや村づくりの話し合いを通して、発展のために必要とする物が人によって違うことに気づき、社会の発展の仕組みについて考える態度を育てる。	1. 幸せに生活する上で必要なものや施設を考える。 2. 村の条件カードを配り、村ごとに必要なものや施設について考える。(個人→グループ) 3. 村の代表が前に出て、どのカードをグループに渡すか決める。(じゃんけん) 4. カードをもらったところで、それぞれの村の条件ともらったカードを発表する。 ○自分の村と周りの村の違いについて違いは不公平感に気付く。 5. 村が一緒の国に変わったときに、どうするか考える。 6. どんな国がよいか、どんな大人になりたいかを考える。	施設・もの カード 村条件カード ワークシート
3 (予定)	「海外で活躍 している 日本人を 知ろう」	日本人としての自覚や誇りを持ち、進んで他国の人々とつながり、国際親善に努めようとする態度を育てる。	1. 「エンザ口村のかまど」の学習を想起する。 2. カンボジアのJICAで活躍する隊員とZOOMで交流する。 ○カンボジアについて ○日本の教育とカンボジアの教育について 3. 日本やカンボジアのよさを考える。また、自分に今できることは何かを考える。	ワークシート

【7】本時の展開(2時間目)

本時のねらい

自分たちの村が幸せになるために必要なものを考えることや村づくりの話し合いを通して、発展のために必要とする物が人によって違うことに気づき、社会の発展の仕組みについて考える態度を育てる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問 および学習活動・指導形態	指導上の留意点 (支援)	資料 (教材)
導入 (5分)	1. 自分たちが幸せに暮らすために、必要なものや施設について考える。(全体)	• すべての意見を肯定で捉え、理由を聞く。それぞれ幸せの価値がちがうことに気付くようにする。	
展開 (35分)	2. 自分たちの村が幸せになるために必要なものや施設について考える。 (1) もの・施設が何かを知る (2) グループになり、村の条件を知る。 (3) 個人で村に必要なものについて考える。 (4) グループで村に必要なものを順番を決めて3つ決める。 (5) 村の代表が、必要なもの・施設を取りにくる。重なってしまった場合は、じゃんけんを決め、負けたらもらえない。	• 自分たちの幸せのものや施設と違うことに気付く。 • 自分で考えた後に、グループで共有し決めることで、違う意見を受け入れることができるようにする。	• もの、施設 カード(大) • 村条件カード • ワークシート • もの、施設 カード(小)

	(6) ボーナスチャンス どのグループももの、施設カードをもらえる。 (7) それぞれの村でもらったものや施設を発表する。 • ○村は病院がなかったのに、絶対に病院が欲しかったけど、もらえませんでした。 • ○村は人々が疲れているというので、娯楽施設が欲しかったのでもらえてよかった。 • ○村は子どもが少ないので、学校はいらないと思いました。でもボーナスチャンスで学校をもらいました。	• じゃんけんが勝つことでものや施設がもらえる。運であることに気が付く。(不公平感) • ボーナスチャンスがあることで、全部の村にももの・施設のカードが1枚はもらえるようにする。	
	3. それぞれの村の条件、もらったものや施設を聞いて考えたことを発表する。(全体) • 自分の村は、ほしいものがすべてもらえたから幸せな村になりました。 • たくさんもっている村と少ない村があるからずいと思えます。 4. このクラスが国に変わったら、自分の村はどう考えるかを発表する。(全体) • ○村と同盟を組んで、必要なものをもらう。 • 田畑のある村でたくさん食材を作って、工場のある村で加工してもらう。 • 話合って、みんな平等にしていきたい。	• 自分の村だけでなく、他の村についても考えるように声をかける。 • さらに村から国になったことで、大きな集団になったことに気付かせる。 • 自分の幸せに生活できるかももう一度考える。	
まとめ (5分)	5. ふりかえり • 世の中には、不公平がたくさんある。自分は幸せに暮らしたい。 • 戦争があるのは、やっぱり自分のことばかり考えているからだと思う。 • 支え合える国がいいと思う。 • それぞれのよさを尊重し合えるようになりたい。	• 貧富の差が激しい国の写真をみることで、どんな国がよいか視点を与える。	• ブラジルの写真

【8】評価規準に基づく本時の評価方法

○自分たちの村に必要な施設や物をかんがえることができたか。

→村の条件に合わせて、必要なものや施設を理由も付け加えて考えることができていたか。
また、グループで3つにするときに、自分の選んだ理由を友達に伝えることができたか。
(ワークシート・発言)

○他の村の状況を聞いて、自分たちでできることは何かを想像することができたか。

→自分の村の幸せだけでなく、他の村の条件を聞いて、自分のできることを考えることができたか。
(ワークシート・発言)

- 村から国に考えを広げた時に、社会の仕組みや平等・不平等について気づくことができたか。
→じゃんけんでほしいものをもらえる仕組みが、世の中にある力の強いものだけがもらってしまう仕組みが不平等であることに気づき、自分にできることを考えることができたか。
(ワークシート・発言)

【9】学習方法及び外部との連携

○話し合いの工夫

村の条件に合わせて、幸せになるために必要なもの・施設を考える活動では、個人→グループ→全体と個人で考える時間を大切にしたい。グループで話し合う時も友達の意見を大切にしながら考えるように日ごろから指導を繰り返した。自分の意見をもつことで、友達の意見を取り入れやすくなる。あっている、間違っているという判断ではなく、自分自身の視野を広げるためにも、話し合いを大切にしていきたい。

○JICAの隊員との出会い

ZOOMを使って、横浜にいる人以外にも簡単に会えるようになった。今回はカンボジアに長期派遣隊員でいっているJICA職員と交流する計画を立てている。実際に横浜で小学校教員をやっていた先生なので、日本の教育のよいところ、カンボジアの教育のよいところを知ること、日本のよさを再認識し、日本のよさを広めている人がいることに気が付いてほしい。

【10】学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

○校内研修

ブラジル研修後に職員に向けて、国際理解やインクルーシブ教育の研修と兼ねて報告会を行った。本校では、パラオにJICA職員として派遣していた先生やIAPEで外国にルーツをもつ子どもたちと交流をする先生もいる。その先生たちと一緒に海外での生活やその国の人たちとどのように関わるのかを視点に研修を行った。外国につながる子どもたちの苦労や困り感など、私たち教員側がどのように指導、関わっていくことがよいのか新しい視点で考えることができた。

○教科担当

本校では、教科担当で学年経営を行っている。そのため、ブラジル研修での報告をクイズ形式にした授業や今回の授業も6学年の全クラスで行うことができた。また、今回の授業を他学年の先生も参観できるように声をかけ、各学年に合わせて授業の進め方を工夫できるように提案した。

【自己評価】

【11】苦労した点

○村の条件カード

村の条件を考える際に、どんな条件があったらものや施設を選べるか、考えるかという点で悩んだ。条件ともの・施設の関係性も子どもたちの思考に関連させないと選べないからだ。村の条件を考える時に、どこの国かを想定しながら考えることで、全ての村の条件をみた時に想像できるように工夫した。

○1時間の活動時間配分

今回は45分の授業で展開したが、時間が足りないように感じた。村から国に感の方を変える時に、もっと時間をかけて考えたり、最初に自分たちの幸せについて考えたりことと比べてみるなど、授業最終(まとめ)の工夫と授業を2回に分けるなどの展開の工夫が必要である。

【12】改善点

○もの・施設のカード

ものと施設のカード8枚の選定には、苦労した点も多い。村の条件に合わせて考えたが、授業後に子どもたちから「ダムや電気が必要だった。」という声が聞かれた。枚数ともの・施設についてはアレンジが必要である。

○他教科との関連

今回は道徳の授業の国際理解で授業展開を考えた。6学年の社会科「世界の中の日本」の単元で世界の状況を調べてからこの授業を展開したら、もっと子どもたちが視野を広げて考えられたように感じる。

【13】成果が出た点

○話し合いの工夫

個人で考えてからグループで話し合っ、3つ決めるとい話し合いの活動をした。友達の考えを聞きながら3つに決めるとい活動は、相手の考えの意図や環境を想像したり、自分の考えを広めたりすることにもつながる。また、なかなか意見を言えない児童も安心して話し合いに参加することができた。

○1枚の写真

村・国の幸せを考えた後に一枚のブラジルの写真を見せた。この時間以外に、いろいろな国の写真を見せながら世界のことを考える時間はあったが、今回のブラジルの貧困の差が分かりやすい写真は初めてだった。児童の様子を見ていると、この写真の影響は大きかったようだ。授業の中で児童の印象に残る、また考えが深まる写真の提示が大切だと感じた。

【14】学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）

○それぞれの村の発表を聞いて感じたこと、考えたことは？

- ・みんな求めるものが同じなんだと感じた。世の中って、発展している国と貧しい国があるから違う村とも関わっていききたい。
- ・他の物資と交換してほしい！！
- ・私たちの村はよい村だと思った。それぞれの村の特徴を生かして、よい村を作っていくのがいい。
- ・自分がいらな思っても、他の村では必要なものがある思った。A村がだいぶ裕福だと感じた。
- ・村によってほしい物やいらな物がちがうことが分かった。
- ・字が読めない人が多い場合は、学校ではなくて違う方法があるのではないかと考えた。
- ・ほしい施設がもらえないと、苦労が大きくなる気がする。

○このクラスが国にと考えたら、どうやって幸せにする？

- いろいろな村と協力して、同盟を組み、お金をあげ、作物をもらい・・・助け合って国をよくする。
- どこかの村と同盟を組む。勢力をあげる。
- 自分の村が面倒になったら、違う村に行く。
- 他の村と協力する。自分の村の弱い部分を支え合っていく。
- それぞれの施設で儲けを考えていく。他の国と貿易をし、世界の国と協力していく。
- 最悪の選択はしないようにする。すべてを合併することはできないので、差を減らしていく。

○今日の活動を通して、感じたこと、思ったことは？

- UNICEFなどの機関ができ、発展途上国への支援は増えてきたかもしれない。先進国では「自分たちが幸せだからいい。」と知っている人がいるのも事実だと思う。日本は戦争をしていないが、戦争によって苦しめられている人がいるニュースをみると「かわいそう」とおもっていても本当に手を差し伸べているのは分からない。「自分さえ良ければ・・・」という考え方をかえないといけなかもしれない。
- いろいろな村、市、県で協力していきたく思った。国になってもそれぞれの長所を生かして協力できるようにする。自分もいろいろな場所に行って、その国の長所や短所を知っていきたく。
- 今回の授業でやったことは、実際に世の中でも起こっていると思う。自分の今の生活を振り返ってみることと他の国についても知っていきたく。みんなが平等に生きていけるような国にしたい。
- みんなが仲良しで、一人ひとりが支え合える国がいい。一人ひとりがしっかりと意見をもっていて、はっきりと言える国がいい。
- 幸せになるためには、政治を信じすぎず自分の意思をもって行動することだと思う。
- みんなが幸せになるのは不可能だと思う。
- 幸せなことは、ゲームをすることだと思っていた。みんなで支え合って、安全であることが一番だと思った。自分は将来、みんなに平等に接することができる人になりたいと思った。

【15】授業者による自由記述（教師海外研修に参加した本学習指導案作成者として、他の教員へのメッセージなど）

コロナ影響で、人との関わりが減り、外に興味が無くなってしまった子どもたち・・・ゲームや相手のことを知らずに交流できるようになった子どもたちの世界。今回、この研修に参加したきっかけは、児童に身近にいる先生の実体験を聞くことで、自分の知っている世界を広げてほしいと思ったからである。もちろん、自分の世界を広げながら日本のよさにも気が付いてほしいと思っていた。

実際にブラジルに行った話を聞きながら、児童はブラジルのよさにも気が付いたし、日本のよさにも気が付くことができた。今回の授業ではブラジル、日本に限らずたくさんの国を想像しながら、自分ができることは何かをじっくり考えることができたと感じている。正しい答えではなく、児童の今ある率直な思いを大切にしながら、「将来こんな授業やったな・・・こんな話聞いたな・・・」と思い出せるような印象に残る授業をやっていきたくと思う。

みんなで作ろう
しあわせの村

欲しいもの・施設をもらうには、

1. グループの代表者1人が前に来る。
2. 「せーの」で欲しいカードを指さす。
3. 誰もかぶらなかつたらもらえる。
4. かぶってしまったらじゃんけんして勝ったグループがもらえる。
(負けたグループはもらえない)

ワークシート ③

他の村の話聞いて、考えたこと、感じたことをワークシートに書きましょう。

活動のめあて

自分達の住む村の生活をよりよくし、人々がよりしあわせになるために必要なもの・施設を考えよう。

ボーナスカードタイム

どのグループもカードが1枚もらえます。でもどのカードがもらえるかはわかりません。代表者1人が前に来てください。

みんなで作ろう
しあわせの国

活動の流れ

それぞれのグループが○村(A~F)の住民になります。それぞれの村には条件があります。村に必要な物・施設を3つ考えてください。
(個人で考える→グループで3つ決める)

グループごとに村の条件やゲットしたカードをみんなに発表しよう。

ワークシート ④

自分達の住む国の生活をよりよくし、人々がよりしあわせになるためにどうしたらよいかを考えよう。

A村

- 治安がよい。
- 自然災害が多い。
- 暑くて作物が育たない。
- 字が読めない人が多い。

D村

- 人口が多い。
- 土地がある。
- 作物がたくさんとれる。
- 犯罪が多い。

B村

- 犯罪が少ない。
- 自然が豊か。
- 働いてばかりで人々がかかっている。
- 病院がない。

E村

- お金もちが多い。
- 人口が多い。
- 伝染病が流行っている。
- 犯罪が多い。

C村

- 自然が豊か。
- 自然災害が多い。
- 子どもが少ない。
- 犯罪が少ない。

F村

- 井戸水を使っている。
- 字が読めない人が多い。
- 伝染病が流行っている。
- 子どもが少ない。

80

81

RYOSUKE YOSHIKAWA



実践者	氏名	吉川 亮介	学校名	神奈川県座間市立相模が丘小学校
	担当教科等	全教科	対象学年(人数)	4年1組(30名)
	実践年月日もしくは期間(時数)	2023年9月～12月(6時間)		

【実践概要】

【1】実践する教科・領域

道徳科・国語科

【2】単元(活動)名

互いの違いを知り、相手への理解を深めよう

【3】授業テーマ(タイトル)と単元目標

〈授業テーマ〉 **「互いの違いを知り、相手への理解を深めよう」**

〈単元目標〉 「お互いの立場によって必要とするものや、考え方が違うことをとらえる」

○道徳科

【B主として人との関わりに関すること】相互理解、寛容

【C主として集団や社会との関わりに関すること】公正・公平・社会正義

【4】指導法の工夫

1 話し合い活動

個人の考えをもつ時間の後、グループで話し合いを行った。同じ条件であるはずの村の中で、意見を一つにまとめなければいけない活動をしたことで、「互いの優先するものの違い」を捉えさせた。

2 ねらいと評価に沿った発問構成

それぞれのグループに3枚の施設カードを「平等」に配った後、中心発問で「公平になっているか」を問うことで、「個→全体」への視点に着目させた。

3 思考を広げ深める工夫

前時において、「違う立場になって考える体験」や「ブラジル移民すごろく」を行った。ロールプレイングや疑似体験をすることで、自分とは違う立場の視点をもたせた。

【5】単元設定の理由・単元の意義(児童/生徒観、教材観、指導観)

【単元設定の理由】

本学級の児童は、特別支援学級、通級指導教室、授業の個別支援など様々な支援に関わっている児童が多く在籍をしている。校内においては、外国にルーツのある児童も多数在籍しており、国際学級も併設されている。また、表立った支援を受けていなくても、特別な配慮が必要であったり、外部の療育に通っていたりと、個性も多様である。そのため、学級を構築する上で「相互理解」は必然であるといえる。

【単元の意義】

本単元の特徴には、「自分以外の立場になって考える」活動を多く取り入れている。発達段階的に、対象との間に距離をおいた分析ができるようになってくるが、まだまだ自己中心性が残る年代であるといえる。本単元を行うことで、自分以外の考え方の広がり期待したい。

【児童/生徒観】

それぞれの個性を認め合い、助け合う姿が見られている。その反面、思春期に差し掛かり、「自分との違い」を意識する児童も増えてきている実態がある。

【指導観】

第4学年では社会科において、「国際的な分野」の内容も加えられてきている。例えば、「特色ある地域と人々の暮らし」「世界とつながる神奈川県」の単元では、神奈川県と外国とのつながりがあげられ、自治体や地域の活動について学習する機会がある。その一方、市内に目を向けてみると、在日米軍基地があるものの、児童の日常生活に密接には関係していない。そのため、国際色豊かな環境であるとは言い難く、異文化摩擦の体験も乏しいといえる。しかし、自分の生活に焦点を当ててみると、周囲との「考え方・価値観」は育っている背景によって違い、異文化は児童の生活の至る所に潜んでいるといえる。そのような気づきを、本単元を通し養っていきたいと考える。

【6】単元計画(全6時間)

時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	道徳科 「ブラジルからの転入生」	C 公正・公平・社会正義・ 友達のよい面に目を向けて生活していこうとする態度を養う。	題材「ブラジルからの転入生」を読み、考えるを通して、人にはそれぞれ持ち味があり、お互いの良さを認め合うことで、よりよい友達関係とは何かを考える。	
2 3	国語科 「あなたなら、どう言う」	■考えとそれを支える理由や事例との関係について理解することができる。	題材「キャンプに行こう!!」「たぶん、か～みんな、遊びに行こう～」を通して、自分とは違う立	■『キャンプに行こう!!』 JICA横浜2020年度 「教師国内研修実施報告書&ワークショップ集」

		<p>■目的や進め方を確認して話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめることができる。</p>	<p>また、互いの意見の共通点や相違点に着目しながら考えをまとめる話し合い活動を行う。</p>	<p>■『たぶん、か～みんな、遊びにいこう～』 JICA横浜2021年度 「学校や地域で活用できる！ 多文化共生ワークショップ集」</p>
4	道徳科 「ブラジル移民すごろく」	C 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度	<p>題材「ブラジル移民すごろく」を通して、ブラジル移民の方々が体験してきた「大変さや喜びなど」を味わう。また、疑似体験をすることで、「外国から見た日本」を考える。</p>	
5	道徳科 「みんなで作ろう幸せの村」	B 相互理解、寛容 ■お互いの立場によって必要とするものや考え方の違いを考えようとする態度を養う。	<p>題材「みんなで作ろう幸せの村」を通して、お互いの立場によって必要とするものや考え方の違いを考える。</p>	
6 本時	道徳科 「深めよう幸せの国」	B 相互理解、寛容 ■お互いの立場によって必要とするものや考え方の違いを考えようとする態度を養う。	<p>題材「深めよう幸せの国」を通して、お互いの立場によって必要とするものや考え方の違いを考える。</p>	

【7】本時の展開(6時間目)

本時のねらい

国づくりを通して、お互いの立場によって必要とするものや、「公平さ」について考える態度を養う。

過程・時間	教員の働きかけ・発問 および学習活動・指導形態	指導上の留意点 (支援)	資料 (教材)
導入 (5分)	<p>○前時「みんなで作ろう、幸せの村」を振り返る。</p> <p>○めあて「深めよう幸せの国」を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>あなたは、一つの国を任されることになりました。この国には、6つの村があります。「幸せの国を作る」ことがあなたの使命です。国が豊かになるよう、施設を分配してください。ただし、予算には限りがあります。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> • A～F村ごとに条件が違うことで、必要とするものが違ったことを振り返る。また、村会議の中でも、個人間で「大切とするもの」考の違いがあったことを抑える。 • 村単位では、「自分の村がよくなればいい」という考えもあったが、国単位でとらえると、国全体が幸せになっていないことに気付かせる。 • 自分ごととして捉えられるよう、身近な話題(神奈川県の中の座間市で考えると…など)に置き換えるようにする。 	

展開 (25分)	<p>○個人で活動の流れを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●国の名前を決める。 ●それぞれの村の特長(条件)と、限られた予算の中で、どの施設を、どの村に割り当てるかを考える。(ワークシート) 	<ul style="list-style-type: none"> • 割り当てる施設は前時同様、「病院」「スポーツ施設」「娯楽施設」「水道」「警察」「学校」「工場」「田畑」の8つであることを捉えさせる。 • 必要な場所に、必要なものを割り当てられるわけではなく、予算内で考えなければならないことを確認する。 • 今回は「一つの意見にまとめ」をするのではなく、自分と周囲との考えの「同じ点・違う点」に焦点をあてながら考えて聞くように伝える。
終末 (10分)	<p>○考えたことを全体で共有する。</p> <p>○振り返りカードを記入する。(ワークシート)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 「正しさ」はなく、「何を優先するかが個人で違うこと」を全体で十分に振り返るようにする。

【8】評価規準に基づく本時の評価方法

国づくりを通して、お互いの立場によって必要とするものや、「公平さ」について考えを深めていた。(発言・ワークシート)

【9】学習方法及び外部との連携

○学習方法

個人の時間 → グループの時間 → 全体の時間

- 思考を十分に行い、自分の考えをもたせるために、まず個人の時間をもたせた。また、本単元の目標である「相互理解」が深まるよう、グループワークを活動の中心とした。

【10】学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

- (校内) 研究授業実践及び、外部研修会の告知・共有。
- (校外) 自主サークル活動での実践報告及び研修会等の実施。

【自己評価】

【11】苦勞した点

単元のめあてが「お互いの立場によって必要とするものや考え方の違いを考える」である。活動が進む中、「お互いの違い」に目を向ける児童は増えたが、それを知ること「自分の生活にどう繋がるのか」を考えさせる点に苦勞をした。

【12】改善点

授業の反省点として、「個人の幸せで考えていたものが、突然全体につながっていった」「発想の転換があり難しかったのでは」というものがあった。そのため、「村の幸せ→国全体の幸せ」の内容をわけた方が、十分に思考を深められたのではと感じている。

【13】成果が出た点

授業での発言で、「それぞれの村が個人で、クラスは国だから…」というものがあった。「個人だけがよくても、チームとしてよくなっていない」という観点で考えられる児童が増えたことが、大きな成果であった。

【14】学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）

- 「自分たちの村がよければ他の村は別にいい」ではなく、協力していったほうがいいことがわかりました。
- 村は国で考えると「一つのチーム」だと考えることができました。自分の住んでいる市も、県やまわりの市町村と協力していけたら、もっとよくなっていくと思いました。
- 「自分たちがよければそれでいい」ではなく、他の人たちも公平にしていかななくてはならないと思いました。また、人それぞれ立場があることもわかりました。
- 今の日本と同じように「良い所・悪い所」にわかれている。SDGsのように、「世界で直していこう」という目標がある。今日の道徳では、今の日本と世界をかさねられたような気がした。
- 私の村は、すべてが「荒地」だったけど、みんなで協力し助け合ったら、もっといい村や国になることを知りました。そして、村や国を作る時に、自分の意見だけではなりたないこともわかりました。
- 自分の村だけが完璧でいいんじゃなくて、色々な村と協力し合って生きることが大切だとわかりました。
- 他の村にもいいところがあるが、全ての村が同じではない。A村の「暑い、作物がとれない」などは、他の村から協力してもらったりするなど、国や県で考えても楽しく生活ができると思う。全員で力を合わせて、もっとよくなっていきたい。

【15】授業者による自由記述

「子ども達の世界は狭く、閉鎖的」であると言えます。しかし、「今、目の前にある世界」が子ども達のすべてであり、生きている社会であるため当然のことでもあります。そんな私も、「日本語が話せない児童」がクラスに転入してくるまで、国際理解教育の必要性を感じることはありませんでした。

ブラジルでは、「日系移民」の方々との交流を通して、「海外から見た日本」を強く感じる事が多くありました。日系移民の方々には、「ブラジル人でありながら、日本人としての誇り」を持ち合わせています。この出会いは、研修のテーマである「多文化共生」の学びを得られたとともに、激動の変化の中にある日本社会及び自身の教育観を振り返るきっかけにもなりました。研修後の授業実践は、学級経営の土台にもなっています。クラスの児童は「身近な人との考え方の違い・多様性」を今までより深く考えられるようになったと手ごたえを感じています。

日本に生きる教育者として、「日本式の教育にこれからどう関わっていきけるのか…。」これからは模索していくことと思います。「現状維持が大切なのか」「何か変えていく必要があるのか」。…この報告書を見ていただいている先生方も、この研修を通じて、子どもたちの世界を少し広げる手伝いをしてみませんか？

参考資料：●『キャンプに行こう!!』JICA横浜2020年度「教師国内研修実施報告書&ワークショップ集」

- 『たぶん、か〜みんな、遊びにいこう〜』JICA横浜2021年度「学校や地域で活用できる! 多文化共生ワークショップ集」
- 「ハルとナツ 届かなかった手紙」NHK総合テレビジョン

別添資料：授業で使用したカード類

深めよう「幸せの国」

あなたは ● ×20枚持っています。
 「幸せの国」になるように、考えて「施設」を購入し、国を豊かにしてください。
 ただし、●は20枚しかありません。

農村イラスト 出典
 「illust AC」 <https://www.ac-illust.com/main/detail.php?id=1030259&word>

コインイラスト 出典
 「illusy8」 <https://images.app.goo.gl/tQqDEcrDDo6NatCL7>

MIZUKI YONEZAWA



実践者	氏名	米澤 瑞綺	学校名	神奈川県逗子市立沼間学校
	担当教科等	全教科	対象学年(人数)	2年3組(37名)
	実践年月日もしくは期間(時数)	2023年11月～12月(3時間)		

【実践概要】

【1】実践する教科・領域

道徳科 外国語活動

【2】単元(活動)名

外国にくらす人々の思いをしろう

【3】授業テーマ(タイトル)と単元目標

〈授業テーマ〉「外国にくらす人々の思いを知ろう」

〈単元目標〉 ブラジル移民や日本にくらす外国人の大変さや喜びを知り、その人たちに親しみをもつこと。

〈関連する学習指導要領上の目標〉

道徳科 【C主として集団や社会との関わりに関すること 18国際理解、国際親善 他国の人々や文化に親しむこと。】

外国語活動 【(3)外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。】

【4】単元の評価規準

1 道徳的心情

ブラジル移民について知る活動を通じて、異国に住む人々の苦楽について理解し、その心情を想像している。

2 徳的实践意欲と態度

異国に住む人々に対して、親しみをもち、関わろうとしている。

【5】単元設定の理由・単元の意義(児童/生徒観、教材観、指導観)

【単元設定の理由】

- ①移民の苦楽について考える活動を通じて、他者の思いを想像し、文化や価値観が異なる人々とも関わっていかうとする心情を育てたいと考えたから。
- ②来年度から始まる「外国語教育」の導入単元としてALT(外国語指導助手)の外国人教員と関わったり、外国語に触れたりして、外国語やその文化に対して親しみをもってほしいと考えたから。

【児童/生徒観】

好奇心が強く、他者との関わり(他学年の児童や担任以外の教員)にも興味をもっているが、初めての環境や慣れない人との関わりには、消極的になる児童も少なくない。特に今回関わる外国人のALTとは、これまでほとんど関わることができていない。しかし、外国や異文化への興味は強く、授業者が海外教員研修での経験を語った際は、たくさんの質問をする姿が見られた。

【指導観】

児童たちには、将来、他者を思いやる気持ちをもつだけでなく、実際に助けたり、関わったりと、行動を起こすことができる大人になってほしい。そのためには、まず他者に対してネガティブな不安感ではなくポジティブな興味をもつことが大切である。ブラジル移民や、日本でくらすALTの生活やその心情について楽しく体験的に学ぶ活動を通して、他者と関わることの良さや、面白さについて感じられるように指導したい。

【6】単元計画(全3時間)

時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	ボンジーア! ブラジル	ブラジル文化(あいさつ、ダンスなど)について知り、異文化に親しみをもつ。	ブラジル文化についてテーマ(あいさつ・ダンス・あそび・食べ物)ごとに、踊ったり、写真を見て話したりして体験的に理解を深める。 学習の後半に、ブラジル移民が土地を開拓している写真を見せ、移民の存在について知る。また、次時への導入として「ブラジルいみん」と「日系人」について簡単に説明する。	
2 本時	ブラジル 生活ゲーム	外国にくらす人々の生活の 大変さや喜びを知る。	ブラジル生活ゲームをして、ブラジル移民の生活や苦楽について体験的に理解する。 ブラジル移民になりきり、その気持ちを想像してワークシートに記入・共有する。 日本にくらす外国人の生活やその気持ちを想像し、共有する。	・ブラジル生活ゲーム ・ワークシート

3	ハロー！ R先生！	ALTとの交流を通じて、異文化や日本でくらす外国人に親しみをもつ。	ALTやALTの母国についてゲームや話を聞くことを通じて親しみをもつ。 質問タイムに、日本での生活や心情について尋ねることで、異国に住む外国人について理解を深める。
---	--------------	-----------------------------------	---

【7】本時の展開(2時間目)

本時のねらい

ゲームを通じて、いみんの気持ちを考えよう。

過程・時間	教員の働きかけ・発問 および学習活動・指導形態	指導上の留意点 (支援)	資料 (教材)
導入 (5分)	○前時に学んだ用語「ブラジル移民」「日系人」について確認する。		海外移住資料館の日系人の写真
展開 (35分)	○めあてを確認する。	・めあてを丁寧に確認し、「ゲームを通じて学ぶ」という本時のねらいを確実に理解させる。	ブラジル生活ゲーム
	○ゲームの準備・ルール確認をする。 ○ゲームを通じて、移民の生活について学ぶ。		
	○ワークシートに、「ブラジル移民」になりきって、その気持ちを書く。	・書き出しを指定し、書きやすいようにする。 ・近くの児童と意見を交流しながら書いてもよいことを伝える。	ワークシート
	○書いたことを全体で共有する。	・喜怒哀楽それぞれに関連することを取り上げる。	
	○日本にくらす外国人の生活を想像し、共有する。	・ブラジル移民の学びとつなげて、日本に住む外国人の生活にも喜怒哀楽があることを想像させる。	
まとめ (5分)	○次時の活動(ALTへの質問、ALTからの母国紹介)について確認する。		

【8】評価規準に基づく本時の評価方法

ブラジル移民について知る活動を通じて、異国に住む人々の苦楽について理解し、その心情を想像している。(発言・ワークシート)

【9】学習方法及び外部との連携

なし

【10】学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

- 授業実践について同僚に周知し、参観を呼びかけた。
- 他クラスでも「ブラジル生活ゲーム」を用いた授業を実施した。

【自己評価】

【11】苦勞した点

ブラジル移民や日系人という、児童に馴染みのない用語を理解させ、そのうえ自分の考えをもたせること。

写真などの視覚教材やゲームを通じて理解を促した。また、ワークシートにも意見を書きやすいような工夫(書き出しの指定や、なりきり吹き出し)をした。

【12】改善点

テーマ(ブラジル移民・日本にくらす外国人)が低学年児童にとって難しかった。本単元は高学年の社会と関連させると、より学びの効果が期待できると思った。低学年で行う場合は、テーマを異文化理解とし、ブラジル文化について知ることに留めるとよい。

また、3時間構成の本単元では、ブラジル移民の歴史と変遷、日系人の現状を学ぶことができなかった。これらのことまで理解させたい場合、もう少し時数を増やす必要がある。

【13】成果が出た点

児童が「海外に住むのは、大変なことも、楽しいこともある。」と、異国に住む人々の喜怒哀楽を想像することができたこと。また、そのことをふまえてALTと交流するところで、ALTが日本での生活を楽しめるように思いやりのある発言や、かかわりをする姿が見られたことが成果である。

【14】学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）

児童が書いたワークシートの内容

- 言葉がわからないと、大変。
- ぼくも移民になってみたい。外国に住むのは楽しそう。
- 日本の食べ物はおいしいよ。と教えたい。

【15】授業者による自由記述

移民は高学年児童にとっても難しいテーマである。そんなテーマに2年生の小さな児童たちと取り組むことは、私にとって大きな挑戦となった。本報告書の12【改善点】には、テーマの変更をするべきと書いたが、本学級の児童たちは高学年児童顔負けに、移民について考え、自分の意見をもつことができた。とても誇らしく思う。そんなかっこいい児童たちが、単元最後のALTとのゲームでは低学年児童らしく思いきりはしゃぎ、元気に歌って異文化を楽しんでいた。今回の挑戦を通じて、児童たちの新たな面を知れたことが自分にとっての一番の学びとなった。

別添資料：ワークシート



実践者	氏名	長島 瞳	学校名	神奈川県藤沢市立高倉中学校
	担当教科等	社会科	対象学年(人数)	中学2年生4クラス(研究授業は2年4組)
	実践年月日もしくは期間(時数)	2023年12月		

【実践概要】

【1】実践する教科・領域

社会科 地理的分野

【2】単元(活動)名

地理的分野 C 日本の様々な地域
(3) 日本の諸地域 関東地方

【3】授業テーマ(タイトル)と単元目標

〈授業テーマ〉「多文化共生・異文化理解」

〈単元目標〉 関東地方には全国で最も外国出身者が住む地域であり、今後も増加していくことが見込まれる。日本人のブラジル移住での経験をもとに作成したすごろくで遊ぶことで、外国移住を疑似体験する。その体験をもとに、日本で外国出身者がどのような思いで生活しているか想像し、日本(関東地方)での多文化共生について考える。

【4】単元の評価規準

1 知識及び技能

関東地方には外国人が多く居住していることや、日本からブラジルへ移住した人々の歴史、日本と世界の生活・文化の多様性を理解している。

2 思考力、判断力、表現

ブラジルに住む日系移民や日本に住む外国人の思いを想像し、多文化共生について多面的・多角的に考えることができる。

3 主体的に学習に取り組む態度

異文化や異なる文化をもつ人々を受容し、共生しようとする態度・能力を身につけている。

【5】単元設定の理由・単元の意義（児童/生徒観、教材観、指導観）

【単元設定の理由】

本校には外国につながりをもつ生徒が各クラス平均1名ほど在籍している。中でも、特にブラジルやペルーとのつながりをもつ生徒が多い。そういった生徒の多くは日本で生まれ育っているため、クラスで過ごす中で外国とのつながりを意識することはほとんどない。しかし、本校に赴任して、ミドルネームをからかうことで発生したケンカに遭遇したり、自分自身がマイノリティであると感じて、高校選択の際にあえて外国籍の生徒が多い学校を選択する生徒に出会ったりすることもあった。

多文化共生をテーマに本授業をすることで、外国につながりのある生徒が自分自身のルーツを学ぶきっかけにし、外国人など様々な立場の人々の気持ちを考えられる生徒を育て、多文化共生を目指す生徒を育成したいと考えた。

【単元の意義】

ブラジル移住すごろくをすることで外国移住の苦労や喜びを疑似体験し、その経験をふまえて外国から日本へ来た人々の経験を想像する。そして、私たちが住む地域は「多文化共生できているのか」と自分たちを問いかけるきっかけとする。

【生徒観】

本学年には、外国とつながりをもつ生徒が各クラス在籍している。しかし、日本の生活に馴染んでいるため、彼らが外国とのつながりがあることを意識することは少なく、そういった生徒の背景について知る機会はあまりない。

また、本校の生徒は外国へ行った経験や外国人との出会いも少なく、異文化を肌身で感じる経験が乏しい。さらに、前に学習した単元「近畿地方」で「インバウンド客を感じる日本の魅力」という問いを投げかけた際には、日本がどのような魅力をもつ国かピンとこない生徒が多い印象であった。

【指導観】

現状の生徒の様子から、外国人が日本でどのような経験をするか、一から想像することは難しいと考えた。そこで、学年の保護者の方や鶴見に住むアルゼンチン出身の方にお問い合わせした日本での経験を述べたアンケートを生徒と共有することで、よりリアルに外国の方の経験を想像できるように工夫を行った。

【6】単元計画

時	内容
1 導入	<p>1. 関東地方の自然環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 関東地方の学習テーマ「多文化共生」 ● フォトランゲージ 鶴見の多国籍スーパーの写真を読む ● 関東地方には外国出身者が多いことを知る ● 多文化共生という言葉について考える 「多文化共生とは？ 多文化共生じゃない」 

2	<p>2. 日本の首都 東京</p> <p>3. 東京大都市圏</p>
3	<p>4. 第3次産業</p> <p>5. 関東地方の工業</p>
4	<p>5. 関東地方の工業（続き）</p> <p>6. 大都市周辺の農業と山間部の過疎化</p>
5 (本時)	<p>単元のまとめ①</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 多文化共生を考えるために、多様な人々が暮らすブラジルへ移住した日本人の経験を疑似体験する（すごろくをする） ● ブラジルでの移住体験をして、思ったこと・気づいたこと・分かったことをシェアする ● 外国人が日本に移住した場合、どのような経験をするか考える（自分たちで日本に住む外国人の体験すごろくを作成する） ● 参考資料：外国出身者にアンケートしてみた！（自作資料）
6	<p>単元のまとめ②</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 作成したすごろくで遊ぶ <ul style="list-style-type: none"> ・遊び終わったら、他の班のすごろくを見て回る ・他の班のすごろくを見て、「なるほど」「確かに」と思ったマスを共有する ● 日本に住む外国人がどのような体験をしているかを考える ● 関東地方（日本）は多文化共生できているのか、このゲームを通して分かったこと・思ったことを考え、まとめ用紙に記入する

【7】本時の展開

過程・時間	教員の働きかけ・発問 および学習活動・指導形態	指導上の留意点 (支援)	資料 (教材)
導入	<ul style="list-style-type: none"> ● 単元のテーマ「多文化共生」の確認 ● 多文化共生の先輩「ブラジル」への教師海外研修の話を紹介 ● 海外移住の疑似体験をするため、ブラジルでの移住すごろくで遊ぶことを伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ● 全体指導の時は前を向いて行う 	
展開	<ul style="list-style-type: none"> ● ブラジル移住すごろくの遊び方を紹介 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ● みんなでやって欲しいこと ● 始める時は「バモス」と元気に！ ● 「SimSim」はうなずき。「シンシン」 ● 「全力で喜ぶ」では、みんなで喜ぼう！ ● マスにある「+1」や「-1」の効果は1ターン1回だけの効果 ● 順番を決め、「身体が強い」など特性を選ぶ ● ※マークのあるマス目に着いた時は、解説スライドを読む。班で1台解説スライド用クロームブックを用意 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ● 説明に集中できるように、道具関係は説明後に配布 ● コマを進めることに夢中にならずに、解説スライドも読むことを伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ● 移住すごろく用紙 ● コマとサイコロ ● 解説スライド（クロームブックで各班1台）

	<ul style="list-style-type: none"> ブラジル移住すごろくで遊ぶ 早く終わった班は、全部の解説スライドを読み、読み終わったら2回目を行う 		
ブラジルでの移住体験をしてみようだった？（思ったこと・気づいたこと・分かったことをシェアする）			
	<ul style="list-style-type: none"> すごろくのマスやクローブブックのスライドを指でさすなどしながら、班で共有させる →全体で何人か共有する 	<ul style="list-style-type: none"> コマやサイコロは手遊びの原因になるので回収 	
外国人が日本に移住した時にはどのような経験をするのかな？			
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 外国人が日本に移住した時バージョンでの、すごろくを各班で作成する。（次回、そのすごろくで遊ぶことを予告） 	<ul style="list-style-type: none"> 考える材料として、外国人へのアンケートやクローブブックを使用 付箋を使ってマスを作成（赤は良いこと、青は良くないこと） 	<ul style="list-style-type: none"> 外国出身者にアンケートしてみた！（添付資料） 付箋2色

【8】評価規準に基づく本時の評価方法

1 知識及び技能

ワークショップ中の眩き、振り返り、まとめ用紙から、新しく得た知識を使用している場面が見られるか。

2 思考・判断・表現

生徒同士の発言や作成したすごろく、まとめ用紙からブラジルへ移住した日系人や日本に住む外国人の思い、多文化共生について多面的・多角的に考えている様子が見られるか。

3 主体的に学習に取り組む態度

まとめ用紙から、多文化共生について、課題や実現できている点を自分ごととして考えている様子が見られるか。

【9】学習方法及び外部との連携

ワークショップは4人前後の班員で行った。また、日本に住む外国人について考える材料として、保護者や「多文化共生つるみの会」の学習会でお会いした方へアンケート（日本での移住の際の感じたことなど）をお願いし、そのアンケート結果を生徒と共有した。

【10】学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

本授業を校内の先生方に見ていただき、資料の共有も行った。また、2学年の総合的な学習の時間で「神奈川学習」を行い、テーマの1つに「多文化共生」や「日本人の海外移住」を設定し、神奈川県内に住む外国人やその文化、南米移住や日系外国人について調べ、発表する活動を行った。

【11】苦勞した点

単に楽しいすごろくゲームで終わらせだけでなく、どのような「問い」を最後に投げかけることが生徒が多文化共生について考え続けることにつながるのかが一番悩んだ点であった。「外国人にとって住みやすい国にするには？」「どんなところが課題？」「自分達にできることは？」といった問いなども考えたが、「多文化共生ってできているのかな？」という問いを投げかけ、単元の最初に考えた多文化共生という言葉にこだわることで、「できているような」「できていないような」安易に答え出せない葛藤を含む問いに少しはなったのではないかなと思う。

また、多くの生徒は海外旅行の経験や外国人と接する機会がないため、異文化を身近に感じる体験や、日本がどのような国であるか知る機会が乏しく、外国人が日本でどのような良さや生きにくさを感じているかを想像させることに苦勞した。

【12】改善点

- 1度目のすごろく（ブラジルへの移住体験）を行った後に、簡単な振り返りを行った。班では円滑に意見を言い合っていたが、全体に共有することに躊躇する生徒が多く、あまり意見を拾うことができなかった。そのため、気づいたことをワークシートなどに書かせてから共有することで、生徒の意見を拾えるようにしていきたい。
- すごろくでのゲーム要素に夢中になり、解説スライドを見ない生徒や、自作すごろくを作る際に、「スタートに戻る」「〇回休み」などゲーム要素ばかりにこだわる生徒が一定数いた。

【13】成果が出た点

- 単元の最初に「多文化共生」という言葉について時間をかけて考えたことによって、最後のまとめの際に、多文化共生が「できている」「できていない」かを安直に判断することなく、様々な視点から「多文化共生」について考えることができていた。
- まとめ用紙の中で「日本って結構いい国だと思った」という感想が複数見られ、知らなかった日本の良さに気づききっかけにもなっていた。
- アンケートやインターネットの情報を活用したことやそれぞれの班で作成したすごろくを共有したこと、前の単元で「インバウンド客は日本の何に魅力を感じているのか」という問いを事前に考えていたことも、日本に住む外国人の思いを想像することに効果的であった。

【14】学びの軌跡

①導入で問いかけた「多文化共生とは？」「多文化共生じゃない」

多文化共生とは？ （生徒の回答例） <ul style="list-style-type: none"> ●他国の文化を拒否でなく、受け入れて色々な文化と色々な人たちが生きていくこと ●お互いの文化的違いを認めあい、共に生きていくこと 	多文化共生じゃない （生徒の回答例） <ul style="list-style-type: none"> ●差別、いじめ ●1つの文化を強制させること ●同調圧力 ●他国の人を嫌ったり、他国の文化を拒否すること ●白豪主義
--	--

②生徒の作成したすごろくのマス例



③最後に問いかけた「多文化共生はできている？」

- できていると言われるなら微妙だと思います。コロナの時には、「コロナを持ってきたのは中国人だ。持ってくるな」と騒がれてましたし。完全にできる国なんてきっと存在しないんでしょうけど。色々な価値観の人がいますから。ですが、もちろんできている人も多くいるので、そんな人たちが増えていけたら嬉しいですね。私自身も完全にできているなんてとても言えませんが、少しでもよりできるように心がけたいと思います。
- 日本は外国人に対してあまり人種差別などをしていないし、実際にこの学校にいる子どもも楽しく過ごさせているから、多文化共生できていると考えました。外国人からしても日本は子どもや女性が安全に暮らせるなど治安が良かったり、公共施設も充実していて暮らしやすいと思います。しかし、外国人に限らず、日本は世界的にみてもいじめが多かったり、同調圧力が強いです。実際にクラス内でも多数派の意見ばかりに流れが進んでいき少数派の自分の意見が言えなくなってしまう状況になったこともありました。なので、誰の視点から見ると多文化共生であるか、そうでないかが違うのではないかと思います。
- 今はまだあまりできていないと思います。理由は多文化共生や異国文化を知れる機会が少なく、知識があまりはつきりしないからです。また、外国人と関わる機会も少なく、どう接すれば良いかわからないという現状などもあるからです。しかし、出来ていないところだけでなく出来ているところもあります。例えば、外国人の子供向けの国際教室が小学校や中学校にあったり、空港や駅で外国の人が「迷わない」「使いやすい」ように色々な言語やピクトグラムが使われていたりすることです。
- 私はどちらかというと出来ていないのかなと思います。理由は確かに外国人も多くいる地域もあるけど、全体で見たら表面上は愛想良くても内面は、うーん？みたいな人は多いのかなと思ったからです。日本人はそんなにわかりやすく示さないから決めつけは出来ないけど、無意識のうちに壁を作って関わらないようにしている人もいるんじゃないかなーと思いました。
- まだ完全には多文化共生できていないと思う。他言語の看板など共生できてそうな部分もあるけど、道とかで困ってそうな人がいても声をかけなかったり、怖いという偏見を持っている人が多いイメージがある。個人の偏見は人それぞれだから解決が難しいところが、日本人にとっても海外の人にとっても課題だと思う。

【15】授業者による自由記述

多文化共生をテーマに今回の研修を行うことで、考えれば考えるほど「多文化共生」という言葉が、容易に答えの出せない深い意味をもつものであると感じた。生徒のまとめでも、「多文化共生はできているのか」「多文化共生はどのような状態なのか」と悩みながら答えている姿があり、これからもこの問いを大切に、多文化共生を目指すことのできる生徒を育てていきたいと思う。

(資料) 外国出身者にアンケートしてみた！(原文のまま、もしくはグループ翻訳のまま掲載)

出身国	日本に来た時の印象	日本に住んで困ったこと	日本の良さ	日本は外国人にとって住みやすい？
インドネシア	<p>いいもの： 1.日本は清潔で非常に規律正しい国です 2.日本はその重要性を重視する国です 自然を守る 3.先進技術とインフラ整備 日本はとても効率的で創造的です</p> <p>悪い人： 家族だよ 1.仕事に優先順位を付ける 2.あまりに多くの人が命を絶つ自殺(じさつ)により</p> <p>第一印象は清潔感がとても素敵です 南米では食べかすのゴミやベットの草、整備されていない歩道が多く、マンションの管理人やお店や家の主が毎日掃除しても、ポイ捨てが普通に行われていたから日本の街の綺麗さにはとても感動しました 外れてはいるタイルがガタガタになっていたりと、雨の日は水たまりだらけではなくこういうタイルを踏むと服が汚れたりしました 相手への気遣いが多すぎて、友だち関係に発展させる方法が今でもわからない 私が育った国では気遣う事がそんなに無く、いつもみんなが自分のままなので、疲れないし、気の合う相手が見つけやすい</p>	<p>一番困ったことは私の両親の面談のことから私が見えなかったこと、流暢にコミュニケーションをとることができません。</p>	<p>日本人には譲り合い、助け合い、誠実さというものを大事にする心、自分のお金を取らない、例えばお財布落ちていたら主人は困っているはず、交通は困っていて、返すようにする人や人が多いように思っています。自分の番を待つ、予ハートのセーブルは違うみたいだけ</p>	<p>今では外国人も住みやすくなりました</p> <p>差別がしないこと、みんなが違っていいこと、集団行動しても一人ひとりが自分でいられることを大切にすれば良いと思います 学校で教えるみんなと違って良いと同時に同時にみんなと同じって言うところが矛盾している気がして子どもたちの意見が通う事をもっと慎重して対立させること みんなが仲良く、友だちにならなくても、相手を尊重して距離の取り方、などアルゼンチンではもともと子どもたちの意見を大事にしていない社会がとてもしんどいと思います どの場所でも子どもにも気遣わせて静かにじっとさせない学校はどうか 大人はある程度我慢できるはずなのに、逆二子どもたちに気遣わせている学校はどうか 大人はあります 最近公園近くに住む老人たちが公園で遊ぶ子どもたちの声がかうるとクレームを受ける自治体は公園でボール遊び禁止や大声で遊ぶのを禁止してきています これは外国だけではないですか？</p>
アルゼンチン	<p>第一印象は街の清潔感がとても素敵です 南米では食べかすのゴミやベットの草、整備されていない歩道が多く、マンションの管理人やお店や家の主が毎日掃除しても、ポイ捨てが普通に行われていたから日本の街の綺麗さにはとても感動しました 外れてはいるタイルがガタガタになっていたりと、雨の日は水たまりだらけではなくこういうタイルを踏むと服が汚れたりしました 相手への気遣いが多すぎて、友だち関係に発展させる方法が今でもわからない 私が育った国では気遣う事がそんなに無く、いつもみんなが自分のままなので、疲れないし、気の合う相手が見つけやすい</p>	<p>一番困ったことは私の両親の面談のことから私が見えなかったこと、流暢にコミュニケーションをとることができません。</p>	<p>日本人には譲り合い、助け合い、誠実さというものを大事にする心、自分のお金を取らない、例えばお財布落ちていたら主人は困っているはず、交通は困っていて、返すようにする人や人が多いように思っています。自分の番を待つ、予ハートのセーブルは違うみたいだけ</p>	<p>今では外国人も住みやすくなりました</p> <p>差別がしないこと、みんなが違っていいこと、集団行動しても一人ひとりが自分でいられることを大切にすれば良いと思います 学校で教えるみんなと違って良いと同時に同時にみんなと同じって言うところが矛盾している気がして子どもたちの意見が通う事をもっと慎重して対立させること みんなが仲良く、友だちにならなくても、相手を尊重して距離の取り方、などアルゼンチンではもともと子どもたちの意見を大事にしていない社会がとてもしんどいと思います どの場所でも子どもにも気遣わせて静かにじっとさせない学校はどうか 大人はある程度我慢できるはずなのに、逆二子どもたちに気遣わせている学校はどうか 大人はあります 最近公園近くに住む老人たちが公園で遊ぶ子どもたちの声がかうるとクレームを受ける自治体は公園でボール遊び禁止や大声で遊ぶのを禁止してきています これは外国だけではないですか？</p>
南米	<p>初めて仕事の面接を受けました。</p>	<p>困る事はないです。でも周りに日本語がまだわからない方にたくさん出会います。</p>	<p>治安がいい所です。災害が起きて生活出来る。災害が起これると支援も早いです。</p>	<p>住みやすいです。私のように初めて日本で仕事された方も多くいます。だから生活の環境が整ってそのままここで生活が出来ています。</p>
南米	<p>日本に来て一週間後、彼らは私を東京、新宿、六本木、銀座に連れて行ってくれました。想像通り、新しくモダンで豪華な建物がたくさんありました。散歩の最後は増上寺へ行きました。私はこれまでもお寺に行っていたことありませんでした。初めて日本に足を踏み入れたような気がしました!!</p>	<p>今では日常生活ではコミュニケーションに問題はありますが、日本語で読み書きしなくても面白くて奥が深いですが、私にとってはとても難しいものです。</p>	<p>秩序、安全、経済的安定、公共サービス、教育、食品、公衆衛生。</p>	<p>そう思います。日本人はとても親切で、親切で、親切です。しかし、お酒は日本の文化でもあるなど、他の国とは大きく異なる習慣もあります。</p>
南米	<p>私は日系二世です、會話も少しはわかりますが、同様に優しい東京の人が冷たい</p>	<p>私の勉強不足で漢字がかけませんが、お話しは出来ます!</p>	<p>平和で季節や食べ物美味しい</p>	<p>住めば京都、文化の違いで色々あると思います。</p>
南米	<p>同様に優しい東京の人が冷たい</p>	<p>近所がうるさい</p>	<p>治安、便利、住みやすい</p>	<p>はい、そうだと思います。</p>

YOSHIHIRO KAWASAKI



実践者	氏名	川崎 義碩	学校名	山梨県立甲府第一高等学校
	担当教科等	特別活動(LHR)	対象学年(人数)	2年7組(28名)
	実践年月日もしくは期間(時数)	2023年12月11日～12月12日(2時間)		

【実践概要】

【1】実践する教科・領域

特別活動(ホームルーム活動)

【2】単元(活動)名

多文化共生社会の実現に向けて
(教科書などは使用しない)

【3】授業テーマ(タイトル)と単元目標

〈授業テーマ〉「多文化が共生するために何をすべきか？」
～What would you do?～

〈単元目標〉多文化共生を阻む要因は何かを考え、その要因を取り除くために一人一人がすべきことは何かを考える。

〈関連する学習指導要領上の目標〉

- (1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。
- (2) 集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。

【4】単元の評価規準

1 知識及び技能

- ブラジルにおいて、先人の日本人移住者が経験した困難や見出した幸福について理解することができる。
- ブラジルへの先人の日本人移住者の経験と、今回の台湾への研修旅行での経験を比較することができる。
- 日本で暮らす外国にルーツがある人々が経験する困難について推測・調査することができる。

2 思考力、判断力、表現等

- 日本で暮らす外国にルーツがある人々が経験する困難を、すざろく(ざら)の形でまとめることができる。
- 外国にルーツのある人々が日本でより生活しやすくなるために必要なことについて考え、議論することができる。
- 多文化共生を阻害する要因やその解決方法について議論する。

3 主学びに向かう力、人間性等

- ペアワークやグループワークを通して、他者に配慮しながら自らの考えを伝えたり、他者の発言を聞いて積極的に質問したりするなど、主体的・自律的にコミュニケーションを図ろうとする。

【5】単元設定の理由・単元の意義(児童/生徒観、教材観、指導観)

【単元設定の理由】

今年度5月の新型コロナウイルスの5類への引き下げ以降、コロナ禍に停滞していた国際交流のニーズは堅調に回復している。所属校においても、台湾への研修旅行やオーストラリアの姉妹校への短期研修など、数多くの国際交流事業が計画・実施されている。

本校は、探究科を中心に「世界的な視野で考え、地域に貢献する人材や日本をリードする人材」を育成することを教育目標として掲げている。その目標の実現にとって、異文化理解や多文化共生について学ぶことは、外国語の習得と同様かそれ以上に重要であり、本年度の教員海外研修の成果として考案した一連の授業を生徒に実施することによって、日本人と日本で暮らす外国にルーツがある人々との共生のために、自らがどのような行動を取ることができるのかを考える機会を提供したい。

【単元の意義】

海外に移住した日本人が経験した困難や幸福について学ぶことをきっかけに、日本で生活する外国にルーツがある人々が経験している困難や幸福について知り、多文化共生のために一人一人ができることは何かを考え、今後の日常生活で実践することができるようになる。

【生徒観】

対象生徒28名は、探究科に所属しており、授業実践者がクラス担任をしている。探究科とは、探究活動などを通して、論理的思考力、国際的視野、英語によるコミュニケーション能力を獲得し、グローバルリーダーとしてこれからの山梨、日本そして世界に貢献できる人材を育成することを目的に設置された専門科である。対象生徒の多くは、異文化交流や社会的な問題に対して興味・関心を有しており、向学心は非常に高い。また、対象生徒は、授業実践日の前の週に、4泊5日の日程で台湾での研修旅行に参加しており、対象生徒全員が現地の高校生や大学生と国際交流を行う中で、日本と台湾の文化的な違い共通性について考える機会を持つことができた。

【指導観】

コロナ禍では、米国を中心にアジア人に対する差別やヘイトクライムが頻発した。しかし、日本で生活している限り、ほとんどの「日本人」は人種差別を経験することはなく、それゆえ、人種差別を受ける側の気持ちや立場について考える機会が極めて限られている。今回の実践で使用する「ブラジル移住すざろく」において、様々な事象を経験した主体は他でもない「日本人」であり、外国で生活する過程で生じる種々の苦楽やアイデンティティーの変遷を、生徒がより自分ごととして

体感できるようにしたい。

また、「日本移住すごろく」を作成する際には、「ブラジル移住すごろく」と台湾への研修旅行で得た気づきを組み合わせることで、日本で暮らす外国にルーツがある人々が感じる苦楽についてより具体的に考えさせたい。

さらに、多文化共生の実現に向けて一人一人が何をできるか考えさせる前には、多くの生徒がその実現を阻害する要因であると考えられる「言語の問題」と「偏見・先入観」について、有益な事例を紹介することで、より深い学びにつなげていきたい。

【6】単元計画(全2時間)

時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	異文化に身を置くとはどのようなこと ～What would you do? ①～ (特別活動)	①日本人移住者がブラジルで経験した苦楽を追体験する。 ②生徒が、外国で経験した困難について考えさせる。 ③日本で生活する外国にルーツがある人々が経験している苦楽について推測・調査させる。	・ブラジル移住すごろく ・ブラジル移住すごろくを通じて考えたことをBYODで記入させ、班内、教室全体で共有する。 ・台湾での研修旅行で、自らが困ったことやカルチャーショックを受けたこと、すごろく内の出来事の類似点や相違点について話し合わせる。 ・外国にルーツがある人々が日本で生活する上で、どのような苦楽があるのかを考えさせ、3種類の日本移住すごろく(学校編、仕事編、日常生活編)を作成させる。 ・マス目は合計10個に制限	・PPT(1時間目) ・ブラジル移住すごろく ・フォトランゲージおよび解説 ・Forms① ・Forms②1&2 ・すごろく台紙 ・付箋4種類
2 本時	異文化に身を置くとはどのようなこと? ～What would you do? ②～ (特別活動)	①日本で生活する外国にルーツがある人々が経験している苦楽について推測・調査させる。 ②すごろくの結果を元に、多文化共生について考える。 ③生徒の考えを更に深化させる。	・日本移住すごろくを完成させる。 ・他のチームが作成したすごろくを体験する。 ・各チームのすごろくについて全体で共有。 ・多文化共生を阻む要因とその要因を取り除く方法について考えさせる。 ・多様性を阻む要因や解決策について更に考えを深めていくための材料を提供する。	・PPT(2時間目) ・(生徒が作成した)日本移住すごろく ・Forms③ ・Forms④ ・動画の紹介 [Whipple, 2019] ・Forms④

【7】本時の展開(2時間目)

本時のねらい

外国にルーツがある人々と日本人の共生を阻む要因と、その解決策について考える。

過程・時間	教員の働きかけ・発問 および学習活動・指導形態	指導上の留意点 (支援)	資料 (教材)
導入 (10分)	1. 簡単な前時の振り返りを行う <ul style="list-style-type: none"> ●ブラジル移住すごろく ●台湾での気づき ●ブラジルと台湾の類似点・相違点 2. 本時の目標を提示する <ul style="list-style-type: none"> ●日本移住すごろく体験 ●多文化共生のためにできること 3. 3種類の日本移住すごろくを完成させる (学校編、仕事編、日常生活編)	円滑に活動ができるようにPPTを用意しておく 本時の授業の見通しを持たせる	・PPT(2時間目)
展開① (20分)	4. すごろくゲーム実施 <ul style="list-style-type: none"> ●種類を変えて2回実施 ●1回5分×2回 5. 最も印象に残った項目について話し合い、共有する。	最終確認 自分の班が作成した以外のすごろくを体験する ワールドカフェ方式を用いて、3つの班の班員が混合するように指示する。 生徒を指名して全体で共有する	・(生徒が作成した)日本移住すごろく ・日本移住すごろく
展開② (20分)	6. 外国人と日本人の共生を阻む要因について考えさせる 【予想される生徒の反応】 相手の言語を理解する 相手に偏見を持たないなど 7. 6の要因をどのように取り除くかについて考えさせる 8. 7の解決方法について、さらに深く考えさせる。	BYODで回答させる テキストマイニングを行うために、なるべく名詞で回答させる 6の結果を提示する(14の項目を参照)	・Forms③ ・Forms④ ・動画の紹介 [Whipple, 2019]
まとめ (5分)	9. 本時の授業について振り返る <ul style="list-style-type: none"> ●多文化共生のために自分ができることは? ●言語学習だけではない異文化理解 	多様性のメタファーを提示する	・PPT

【8】評価規準に基づく本時の評価方法

1 知識及び技能

- ブラジルにおいて、先人の日本人移住者が経験した困難や見出した幸福について理解することができる。【記述】【観察】
- ブラジルへの先人の日本人移住者の経験と、今回の台湾への研修旅行での経験を比較することができる。【記述】【観察】
- 日本で暮らす外国にルーツがある人々が経験する困難について推測・調査することができる【成果物(日本移住すごろく)】【観察】

2 思考力、判断力、表現力等

- 活動を通して考えたことや感じたことを周囲の人々と共有することができる【記述】【観察】
- 台湾研修での経験を参考にしながら、外国人と日本人がより相互を理解するために取るべき行動について考えることができる【記述】【観察】

3 学びに向かう力、人間性等

- 仲間と積極的に関わり、活動に参加しようとしている。【観察】
- 多文化共生のために必要なことや自らが実践できることを、自分なりに考えようとしている。【記述】【観察】
- 仲間の意見と自分の意見を整理し、建設的な意見や議論の視点を提供しようとしている。【観察】

【9】学習方法及び外部との連携

- 「日本移住すごろく」についての気づきを共有する際には、ワールドカフェ方式に近い形式を用いて、「学校班」、「仕事班」、「日常生活班」の生徒が上手く混じり合い、すごろく作成の過程でそれぞれの班で議論した内容や視点が共有できるように意識した。
- 本校所属のALTの教員から、日本で暮らす上で感じた苦楽について話を聞く。
- 教員海外研修の際にサンパウロ州立移民博物館で出会った20～30代のガイドの方々のお話を参考にして、「ブラジル移住すごろく」に登場する現代ブラジル社会における差別問題についての項目を考えた。ガイドの1人は、自身もトルコからの移民であり、移民やホームレスの方への差別的な言動が存在あることを教えてくれた。

【10】学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

- 本校の昼休みの全校放送にて、JICA 教員海外研修について全校生徒に向けて報告(8月)。
- 2学年の英語コミュニケーションII、総合英語IIで、研修の動画や研修の内容について説明(9月)。
- オーストラリア研修の事前指導・事後指導として、本研修で作成した教材を用いて異文化理解について学習する(1～3月)。

【自己評価】

【11】苦勞した点

限られた授業時数の中で、効率的・効果的に授業を展開することに最も苦勞した。定期試験や学校行事によって時間的な柔軟性が低い通常の授業の中では、新しい単元を取り扱う時間的な余裕はあまりなかった。そのため、生徒一人一人が所持しているBYODを活用して、時間を節約しながら生徒全員の意見を収集した。また、KJ法などを介さずに、テキストマイニングの手法と取り入れて、時間を節約して意見集約を行った。加えて、「日本移住すごろく」では、生徒が作るマス目の数を各班合計10枚に制限して、すごろく制作の時間が長くなり過ぎないように注意した。しかし、実際の授業を終えて、2時間の授業時数だけでは、情報の収集、整理・分析、表現・共有には短すぎると感じ、思考の深まりが十分ではないと感じた。次回は、最低3時間の授業時数を確保したい。

【12】改善点

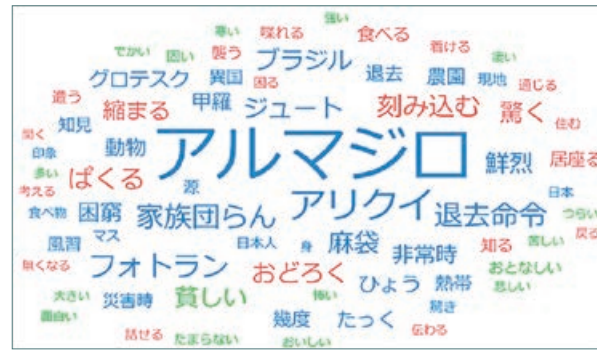
(主に高校生などを想定して)本単元をより深い学びがあるものにするためには、葛藤や矛盾の中で決断をしなければならない活動を取り入れるべきだと強く感じる。後述もするが、「多文化共生社会の実現のために自分ができることは何か？」という質問に対しての生徒の回答は、「相手の文化を理解・尊重する」、「過度な偏見や先入観を持たない」、「相手の言語を理解する」の3種類に大別することができる。しかし、現実の社会では、お互いが譲れない価値観同士が衝突する可能性があり、また、授業の中でも動画で取り上げたように、言語の壁がない者同士でも人種による差別は起こり得る。理想としての多文化共生が、葛藤や困難に直面した際に、どのように変容するのか。多文化共生がお題目で終わらないためには何が必要であるのか。それらを考えさせることができれば、今回の単元はより深い学びにつながると強く感じた。本年度、同じブラジル研修に参加した別の教員グループが作成した「幸せの村」という教材は、矛盾や葛藤を含んだ上での意思決定を行うという内容であり、そちらの教材も参考にしたい。

【13】成果が出た点

- 生徒たちの取り組み状況や振り返りを総合すると、難解なテーマではあったものの、グループワーク中に無言になる時間が全くないほどよく議論をしていたり、関連する自らの経験や家族の話を議論の視点・材料として提供したりしていたという点で、非常に主体的に活動していた。
- すごろくというゲーム要素がある教材を使用したことで、ほとんどクラスの全員が楽しんで活動に取り組むことができ、異文化理解や多文化共生に強い関心を持っていない生徒に対しても、良い学びのきっかけを提供することができた。また、すごろくの各マス目の解説文を音読することをルールにしたため、その後の活動へ向けてレディネスを高めることができた。
- 台湾での研修旅行で自らが経験したことや感じたことを、日本で暮らす外国にルーツのある人々の立場に上手く変換して考えることができていた。
- BYODを利用して生徒の意見集約を行ったことで、自ら積極的に挙手をして発言をする生徒だけではなく、寡黙な生徒の意見も反映することができた。

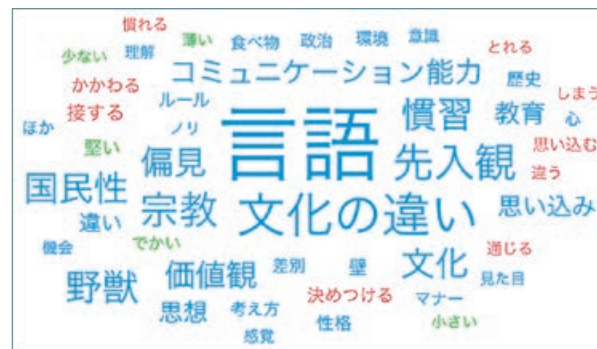
【14】学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）

〈ブラジル移住すごろくで印象に残ったこと〉 ※生徒の自由記述をテキストマイニング



- これをおじいちゃんやおばあちゃんの世代が経験していたと思うと、まだ遠くない過去なのかもと思えた。
- 現在の日本からは考えられない生活を昔のブラジル移住者は送っていたんだなと感じることができた。
- ブラジル＝コーヒーみたいなイメージしかなかったけど、日本とのかかわりや内情を知ることができて楽しかった。とても面白くたくさん笑ったが、それはつまりそれだけ日本での暮らしとギャップがあるということなので、とても関心深かった。
- 日本人でない人が日本にどのような印象を受けているのかを気になった。日系人が多い、ということで文化の面で日本と似通ったところが多いのかなと思ったが、全然そんなことはなくてそれが面白かった。
- 退去命令や収入を得られず借金が増えてしまうなど知らない土地で起こったら想像もできなようなことが当時の人たちに起こっていたことを知り、それでも頑張り続けた人はすごいなと思った。
- 言葉が通じないなかで生活していた先人は本当に大変だったのだと知った。
- 移住することは大変なことがいっぱいだなと思ったけど、その中でも小さな幸福は沢山あると思った。
- 自分に何か得意なことがあるのはいいことだなって思った。
- 普通のすごろくと違って、属性ごとに進んだり戻ったりというのが違うため、平等なかわからないし、少し理不尽に感じるところもあるけれど、たぶん実際も、生まれた環境とか、その人の性格、スペックによって、そういう差が生まれていたのかなと思う。
- 今回の台湾でも日本での当たり前は通用しなかったし、現地の人のことを考えながら生活することは大変だなと思った。
- 事前に避けることが難しいような不幸も少なくないことが印象的だった。

〈多様性を阻む要因〉 ※生徒の自由記述をテキストマイニング



◆自由記述

- ほかの文化に慣れていない。ほかの国の食べ物や商品であっても、日本人好みにリメイクされていることがほとんどである。言語が通じない。ほかの国の人と交流する機会が少ない。
- 圧倒的に言葉の壁だと思う。風俗などの要因もかわりかかるとは思うが、コミュニケーションをとれない人に対しては、自分も一番警戒してしまうと思う。

〈自分のできること〉

- ほかの国の報道番組を見ること。言語が違うだけでなく、取り上げられているニュースやその取り上げられ方（日本では地震や津波などの災害の映像に人が映っていないが、そうでない国もある）などの違いが顕著にみられると思うから。
- 他人の気持ちを考えて生活し、自分から見て不思議な行動や言動でその人のことを決めつけないようにしていきたい。
- 日本語以外の言語を学習して習得すること。なぜなら、台湾に行った際に日本語で書いてある商品や日本語が話することができる人に対して親しみやすさを感じたから。
- 簡単なことではあるが、今回双六を作ったように相手の立場になって考えるということは有効だと思う。それに基づいて、困っている人に声をかけられる人になりたい。
- 外国の文化を積極的に知ろうとすること。理由は多様な文化を事前を知っておくことで受け入れやすくなり外国人の方へ配慮することができるから。
- 他の多くの文化を知ること。文化を否定する根本的な要因は、自分には理解しえない文化だから受け入れられない、という点にあると思う。まずは、他の文化を知って理解することが大切だと考えたため。
- 自分と違うもの、違う習慣や行動、文化に出会ったとき、違和感を覚えても拒絶しない。思い込みが差別的な見方を生む要因の一つだと思うから、思い込みをなくするのは難しいけど、そこから差別につながらないようにすることならできると思ったから。
- 外国から来た人たちと信仰している宗教が異なった時や、自分たちの国のなかでの当たり前だと思っていることと文化が異なる人たちの行動が異なった時に、その国のルールなどを押し付けてしまったら多文化が共生できないと思います。そのため、自分のできることは、自分の住んでいる国に他の国の出身の人が来た時に、その人の文化を理解して自分たちの文化を押し付けないこと、自分の価値観や固定概念で考えすぎないこと、色々な文化や考え方があるということ意識してお互いの違いを尊重することだと思います。
- 食事、習慣などの文化の違いを知っておくこと。私の住む日本の文化圏では非常識でも、その国にとっては常識かもしれない。そんな常識を非難、批判してしまわないようにするため。
- その人自身をありのままに受け止めることが大事だと思うので、「〇〇人だから、や性別、宗教」などで差別をしたり、偏見を持ったりせずに接すること。
- 自らが暮らす環境での文化と他の文化を無理に融合させようとするのではなく、相違点を知ること。いきなり他の文化が入ってくることで「私たちとは違うから」という理由で排除しようとしている気がする。そこで初めから何が違うのかを知っていれば共生できるのではないと思う。

【15】授業者による自由記述

高校の英語科の教員として日々感じるのは、英語の授業の目的が対象言語の「獲得」に収斂し過ぎてしまい、その言語が使用されている国々の文化・社会的背景を理解することや、異なる考えを有している人々とのように共生していくかなど、「言語の先」にあることの指導が二次的になっているということです。今回我々が作成した「ブラジル移住すころく」やそれに関連した授業者の実践は、そのような問題意識の中から形作られました。日本国内では人種的な差別を受けることが比較的少ない「日本人」が過去に海外で経験した苦難を知ることで、反対に、日本国内で生活する外国にルーツがある人々の苦勞に注目を当てることを授業の目的としています。そのため、「ブラジル移住すころく」の後にどのように授業を展開するかが、今回の単元では最も重要な点になると思います。

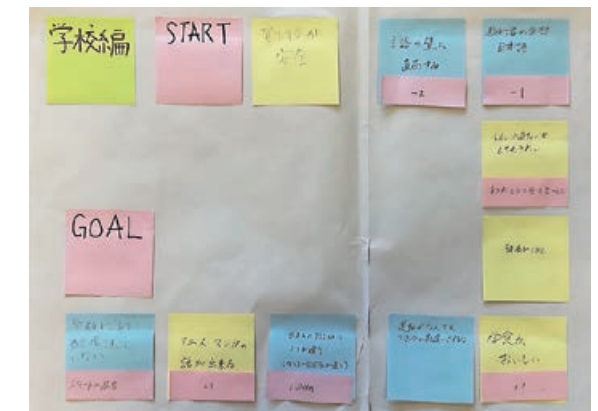
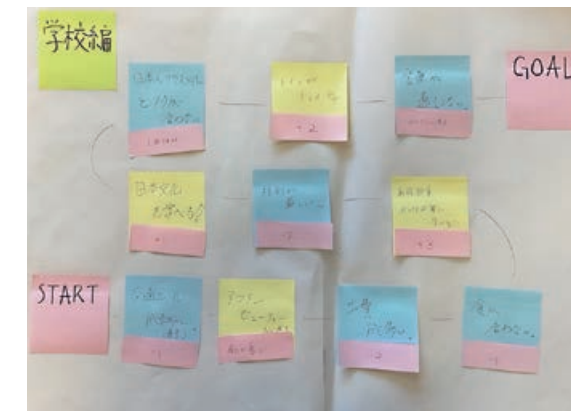
今回の海外研修では、教材として具体的な形をとることはなかったけれども、学校教育、教育制度、社会福祉、自然環境など、幅広い分野で数多くの有益な視座を得ることができました。また、帰国後は、自分の周りにある「ブラジル」に自然と注意が向くようになり、県内でもブラジルのことをより理解するための勉強会やイベントが実施されていることも知りました。また、現地で活躍されているJICAの職員や青年海外協力隊の隊員の方々が流暢なポルトガル語を話されていた姿も、英語以外の言語的多様性について再考する良い機会となりました。来年度以降の教員海外研修の訪問先がブラジルであるかは分かりませんが、個人旅行で地球の反対側まで行く機会はほとんどないと思います。日々の多忙な業務の中で、自らの成長のためにまとまった時間を確保することは極めて困難だと思うので、もし迷っていたら教員海外研修に是非参加してみてください。必ずや貴重な経験になると思います。

参考資料：

- [1] WhippleChris. (2019). What Would You Do?
 参照日：2023年12月12日、
 参照先：Possible bike thief caught in the act: https://youtu.be/q6rMcYzpsAA?si=T_fjo7xb33XCnQ2N
- [2] 小野秀樹. (2018). 中国人のこころ「ことば」からみる思考と感覚. 東京：集英社.
- [3] 笠原敏彦. (2015). ふしぎなイギリス. 東京：講談社現代新書.

◆生徒たちが作成した日本移住すころくの写真 ※マス目は10個に制限した

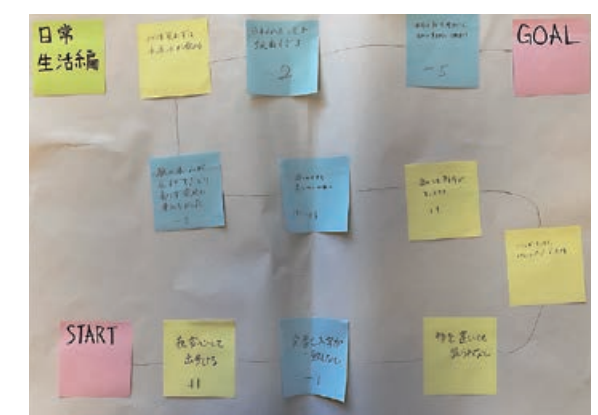
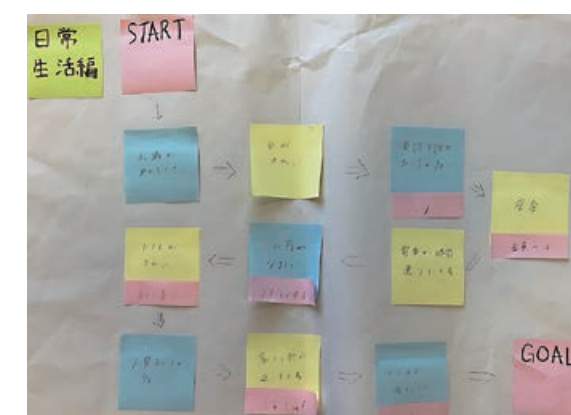
【学校編】



【仕事編】



【日常生活編】



NAOKI TERAKAJI



実践者	氏名	寺鍛治 尚紀	学校名	神奈川県立二宮高等学校
	担当教科等	英語（論理・表現Ⅰ）	対象学年（人数）	1年 2・3組（33名）
	実践年月日もしくは期間（時数）	2023年11（1時間）		

【実践概要】

【1】実践する教科・領域

論理・表現Ⅰ

【2】単元（活動）名

そこに住む全員が幸せになる村（国）を作るには、何が必要か

【3】授業テーマ（タイトル）と単元目標

〈授業テーマ〉 **「相互理解、寛容、共生、資源配分」**

〈単元目標〉 限られた資源配分の中で、他の社会との共生の仕方について考える視野を持つ

〈関連する学習指導要領上の目標〉 高等学校 第1章総説 第3節 外国語科の目標より

第1目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

※今回の実践では、英語で議論するには、生徒の現状の英語力では厳しいと判断したため、教師の説明および生徒同士の議論はすべて日本語で敢えて行った。ただし、上記の目標の「外国語による」という部分以外は今回のワークの意義に合致していると考え

【4】単元の評価規準

1 知識及び技能

割り当てられた村（グループ）の条件を正確に理解し、必要な施設やインフラが何かを導き出すことができる

2 思考力、判断力、表現力等

割り当てられた村（グループ）に必要な施設やインフラについて、グループ内で自分の意見を表明することができる

3 学びに向かう力、人間性等

割り当てられた村（グループ）に必要な施設やインフラについてグループ内で合意形成が取れるように、最後まで議論を続けることができる

【5】単元設定の理由・単元の意義（児童/生徒観、教材観、指導観）

【単元設定の理由】

自分の所属するコミュニティのことだけ考えれば良いのではなく、他のコミュニティに住む人たちの幸せも踏まえて、限りある資源をどう分かち合えば良いのか、考えるきっかけを作った

【単元の意義】

現実の問題として、ある国や自治体が提供できる資源には限りがある。そのため、どのコミュニティも欲しい資源や施設がすべて手に入るとは限らないという社会の現実を踏まえ、社会に存在するすべてのコミュニティが幸せになるためには、何が必要で、どのようなアクションが求められるか」という正解のない問いについて生徒が考える契機としたい。

【児童 / 生徒観】

本校の生徒は、中学校の学習過程でつまづきを経験した生徒が多く、英語を教える際も、中学校の習得事項からの教え直しを必要としている。一方、今回の授業を行った習熟度クラスの発展講座は、学習に向かう姿勢はとても良い。また、普段は英語のコミュニケーション活動をペアで行わせることが多く、非常に活発的に取り組んでいる。今回のワークショップでも、概ね意欲的に活動に取り組んでいたと思う

【生徒観】

上述のように学習意欲が高いクラスであるが、一方で学力に対しては自信がない子が多いと考える。そのため、スモールステップを大切にしながら緻密な足場がけが教師には求められる。課題だけ言い渡してあとは生徒にさせるのではなく、背後からの支援を細かにいきたい。

【6】単元計画（全1時間）

【7】本時の展開

本時のねらい

「自分の村の幸せだけを考えていけば良いわけではなく、条件が異なる他の村の幸せも考えなければいけない」ことに気づく

過程・時間	教員の働きかけ・発問 および学習活動・指導形態	指導上の留意点 (支援)	資料 (教材)
導入 (8分)	1)アイスブレイク 「生きていくために必要なものは」について、ペアで話し合わせる	身の回りの話をさせることで、自己関連性を持たせる	
展開 (32分)	2)ワークのねらいと流れを説明	PPTであらかじめまとめ、ワークのねらいと流れを可視化する	PPT
	3)5～6人グループに分けて、リーダー(村長)を決める		
	4)条件カード*を各村に配布し、村ごとに条件を確認させる		*条件カード:「自然災害が多い」「犯罪率が高い」など各村の状況を書いたカード
	5)施設カード*を黒板に掲示する		*施設カード:「病院」「警察」など、社会生活を送る上で必要と思われる施設を書いたカード
	6)ワークシートを配布し、各自で「自分の村が幸せになるために必要な3つのもの」を施設カードの中から選び、記入する		
	7)村の中で話し合い、村として意見をまとめる		ワークシート
	8)各村のリーダーが集まり、欲しいカードを伝える(欲しいカードが重複した場合、じゃんけんで決める)	欲しいカードを村の中で3つ決めているので、8)は3回実施する必要がある	
まとめ (10分)	9)各村の条件カードを黒板に掲示して、その下に各村がもらったカードも貼る 10)ワークシートに各自で振り返りを書く		

【8】評価規準に基づく本時の評価方法

所属する村(グループ)が最大限幸せになるため、グループの話し合いに貢献できたか(ワークシートの記述、観察、発言)

【9】学習方法及び外部との連携

- 「グループでの話し合いにおいて全員参加を促すため、はじめにワークシートを配布し、個人の考え方を書かせてから、グループでの討議を開始させた。
- 条件カードを黒板に貼って終わりではなく、「この村にはこれが必要なはずだけど、どうすればいい?」「この村で、不要なカードや他の村に渡してもいいカードはある?」などのセリフを授業者がワークの参加者に投げかけることで、「すべての村をまとめて1つの国として考えた場合、最初にもらったカードをそのまま持っても良いのか」「他の村の状況を見て、他の村もそのまま良いのか」考えさせた。

【10】学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

授業当日、朝の職員打ち合わせにて、本ワークショップを行うことを全職員に伝えた。校内が授業観察週間だったこともあり、他学年の先生も多く見に来てくださり、普段と異なる授業のスタイルを目にされたことが刺激になったようである。

【自己評価】

【11】苦勞した点

グループワークの場合、積極的に発言する生徒・活動に参加する生徒がいる一方、受け身になりがちな生徒も一定数いました。また、活動中の会話もグループや生徒によっては、課題や活動と関係のない雑談が聞こえてくることもあり、こちらの意図に沿った動きを上手く誘導することに苦勞しました。

【12】改善点

グループワークの最中に話し合いに参加するのが苦手な生徒がいた場合、どう話し合いに参加させるか、工夫が必要であると思います。また、生徒からの意見の引き出し方についても、小学生と比較すると高校生はどうしても発言が控えめになってしまう傾向があるため、そこをどう上手くファシリテートするかが今後の課題です。

【13】成果が出た点

生徒の振り返りは丁寧かつ詳細に書かれているものが多く、こちらのメッセージがしっかり伝わっていることが見て取れました。また、見にくられた先生からは、「生徒たちが考えながら結論を出そうとチームで協力する姿勢が大変素晴らしかった」「ゲーム感覚で話し合いをさせていて、前向きに取り組ませていた点が良かった」との声をいただきました。

【14】学びの軌跡(児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)

生徒が書いた振り返りは、以下のとおりです。

- 自分の町だけのことを考えていると他の町の人たちが困る。思いやりや周りをよく見ることが大事だなと思いました。
- ゲームを通して国について色々考えることができた。ゲーム楽しかった。
- みんなの幸せを考えるのは難しい。
- 話し合っても問題は絶対になくならないんだと思いました。
- すべての場所が良くなるのは難しいなと思った。平等で終わるのは無理に近いと思う。
- 足りない部分を補おうとして他の村から助けをもらおう手段を取ったとしても、相手の村に都合があったりして上手くいかない時もある。受け入れる、受け入れないの判断も難しいと思った。
- それぞれの欠点をいろんな村と話し合って調整できたところがあったので、現実でも支え合っていけたらいいと思いました。

- 1つの村が極端に発展しても、他の村が貧しくては国全体としての発展にはならないので、総合的な広い視野で考えることが大切だと感じた。
- 地域の環境ごとにほしい物とかが違うから、面白かった。その地域にある悪いものをなくすためにはほしいものと、その地域にある良いものをもっとよくするためには欲しいものがあるのが分かった。
- 世界中のみんなが幸せに、元気に戦争がなく、平和に生きられたら良いのになと思いました。
- 自分の村だけで考えたら簡単で、手に欲しいものをゲットできるけど、周りの色々なことも含めてどこも豊かにするのは難しい。誰かが我慢しなきゃだし、誰かが譲らなきゃいけない。これからの国を支える上で、どこか1つでも崩れたらどんどん崩れちゃうから、悪い部分を改善してどれだけ継続していくかが大事になって思いました。
- 課題を見つけて話し合ったりすることで、改善することもできるし、前よりも良くすることができるのだと思った。
- 「平和に」「豊かに」と考えると悪い点が目立って、そこを潰していくことを1番に考えた。
- それぞれの国で良いところと足りないところがあるからお互いに補い合うことが大切だと思った。自分の国がよければいいじゃなくて、みんなが困ることなくいられる方法を考えたいと思った。
- 全部必要だと思ったけど、世界にはそこまでするほどの財力がないからいつまで経っても解決しないんだなと考えた。本当にすべての国が支え合っていたら、今頃全国の民が幸せなのかと思う。

【15】授業者による自由記述

新しい学習指導要領において「主体的・対話的で深い学び」というキーワードが打ち出されましたが、高校における授業は、教科問わずいまだに多くが「教師主導の一斉授業による知識伝達型授業」に留まっています。知識の習得を越えた部分での熟議型授業を筆者は目指しており、その点からも、今回のワークショップは「生徒主導による」「協働型」「課題解決授業」を達成できたと感じています。そのような授業を校内の先生方が見に来て、良い印象を持ってくださったのは嬉しかったです。JICA 横浜の開発教育セミナーに2018年から通いはじめ5年、目指していたファシリテーター型授業を実際の生徒相手に成立させることができ、個人的にも達成感がありました。今後もこのようなワークを定期的に授業で行い、校内の先生方に限らず、校外にも発信する機会を作り、開発教育の普及の貢献していきたいです。

別添資料：授業で使ったパワーポイント、ワークシート

前半のねらい（探究課題）

「(自分が住む)村の人間が幸せになるため、何が必要か？」

後半のねらい（探究課題）

「幸せな国を作るためには、どんなアクションが必要か？」

活動の手順

- 1) 6人グループを作る
- 2) 村長(リーダー)を1人決める
- 3) 「条件カード」をもらい読む
※ 他グループには内容を漏らさない!
- 4) 欲しい施設カードを3つ決める

今から話し合うこと

- ・ (他の村から)欲しいカード
- ・ (他の村に)譲ってもいいカード
- ・ 交換したいカード
- ・ その他「こんなアイデアもあるよ」

活動の手順 続き

- 5) それぞれの村から1人選び、
村長会議に出席
→ 欲しいカードを伝えてもらう
(重なった場合はじゃんけん)

Ground Rule

× 自分の村の幸せだけを考える
○ すべての村 (=国) が幸せになるためには、どうすればいいか？

を考えてください。

これからの日本の課題

- ・ 少子高齢化
- ・ 人口減少
- ・ 地域の空洞化
- ・ 国の借金
- ・ 経済格差

分配ゲーム OR みんなで作ろう しあわせの村

① 必要なものとその理由 名前

--	--	--

② それぞれの村について買付いたこと、買ったこと、考えたこと

A	B	C
D	E	F

③ ぶりのかえり

--

ご協力いただいた皆様

- ・かながわ開発教育センター (K-DEC)
- ・小野行雄氏 (かながわ開発教育センター)
- ・公益財団法人海外日系人協会
- ・公益財団法人横浜市国際交流協会鶴見国際交流ラウンジ
- ・JICA 横浜教師海外・国内研修過年度参加者の皆様

スタッフ

- ・JICA 横浜 長縄慎吾
- ・JICA 横浜 中野貴之
- ・株式会社メディア総合研究所 (2023年度運営事務局)



独立行政法人国際協力機構
横浜センター (JICA横浜)

〒231-0001 横浜市中区新港2-3-1

Tel : 045-663-3220 (直通)

Fax : 045-663-3265

E-mail : yictpp@jica.go.jp

<https://www.jica.go.jp/yokohama/>



